
北斗による協奏曲

三河あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北斗による協奏曲

【Zコード】

Z3953A

【作者名】

三河あおこ

【あらすじ】

(自称)カリスマリーダー明彦、怒ると力を發揮する俊、運がいい孝之、ケンカが強い甲斐の中学生4人で結成された「北斗軍団」がいろんな事件を仲間と協力して解決してゆく物語。はたして、今日の事件は?

人物紹介～スタート

時間は現在、45分の休憩時間、周りの人はトランプ、おにぎりで熱中していた。

その教室の中心でやや凜々しげな男が黙つて椅子に座っていた。

「……………」

がその男から微かに苛立ちを感じる弦きが聞こえた。

数十分後、

「いやあすまない団長、遅れてしまったよ。」

「遅いぞ、お前ら！会議の時間に30分も遅刻だぞ！俺が社長ならクビだぞクビ！！」

と団長は不満を爆発させたが、一、二回深呼吸をして団長はすぐに落ち着きを取り戻した。

「ふう、まあいい。団員よ、急いで一見様に自己紹介しようじやないか。」

「……………は？」

戸惑う三人をよそに、団長は迷わず机から立ち上がり、

「俺は北斗軍団の団長、こばじかわ あきひ小橋川明彦。君たちバカを仕切るカリスマリーダーだ。よろしく」

と、誇らしげに明彦は名乗った。明彦が紹介した後、周囲にいた三人から、

「はあーーー？ 何でお前がカリスマなんだよ？」

「お前はカリスマじゃなくて、青虫だろ」

「レタスでも食つてろ、ニセモノめ」

と言っていたが、明彦は満面の笑みで、

「・・・ おい、甲斐、次はお前だ」

と、最後に文句をつけた男に紹介をするよう、アイコンタクトで説得された。甲斐と呼ばれた男はめんどうさそうに頭をかきながら自己紹介をした。

「・・・ 名前は紗次田甲斐^{さしだ かい}、団員番号は1番・・・こんな感じでいいのか？」

甲斐のテンションの低さに対し、明彦は、

「おいおい、今日も元氣ないのかー、頼むぜえ。しゃあない、次、俊だぜ。」

なぜか毎日元氣が無い人みたいな解説を口にした。すると、不意打ちに

「団員番号2番、屋比久俊^{やびく しゅん}、まあよろしく。」

と言つた直後、明彦が

「ひねりゼロかよ、これだからばかミーハーちゃんは・・・」

と叫んだ。すると、俊が突然、

「だあれがミーちゃんだ、ゴRRRRRルアー！」

「よ、よせー！俺は団長だぞー！誰か止めてくれーーー！」

俊にはある特性があり、ネコ系の言葉を（ミーちゃんの他にタマ、もしくは、そのままネコとか）言つと、異常に反応してキレる性格、らしい。

いつもなるとなぜか手がつけられない俊をどうにか甲斐がどうにか羽交い絞めにしたが、その後、甲斐は耳元でなにか俊の耳元で咳くと、途端に大人しくなった。

「何を言つたんだ。なぜか顔が真っ青になつてるんだが・・・」

「気にするな。ちよろつと脅迫しただけだ。」

「・・・ま、まあ最後だな、そ、孝之。」

と、孝之に紹介をうながすよつて言つた。孝之はほつきつて

「因圓番号3番、おおじいだかおお大城孝之。特に好きなものはガンダム、かな？」

と言つたら一部のクラスメイトから真つ田な田で見られていた。

「孝之、発言にほほん気をつけるよ。場合によってはこの作品選されかねないから」

「えへへ、うん」

と俊がマジメにフォローし、孝之は深くうなずいた。少し訂正するなら、彼は純粋なアニメ好きであつて、その中でガンダムが好き、という意味が含まれている。

明彦が一つ咳払いをして、

「では諸君、一見様への紹介もすんだし、会議を始め……」

キー、ローン、カーン、ローン……

予想外の休憩時間終了のチャイムに（北斗軍団）全員が驚いていた。

明彦は、何もなかつたように冷静に、

「やれやれ、鐘がなつたようだ。諸君、会議は終了だ。また明日しようじやないか。」

と言つて、なぜか勇ましく机に戻つていつた。その後ろ姿から高笑いが聞こえてきやうだった。ポカンとしている三人は、とりあえず、

「時間つてあつても足りないもんだな……」

なんとなく、感慨深い一時を過ぎていっていた。

ヤツの恋人疑惑

シユツ・・・・・シユツ・・・・

ある日の美術の時間、俺たちは印鑑を作っていた。自習のような響きをしているが、実は教員はしつかり存在し要所要所で説明も入るため、何気に普通の授業をしている。だから、自習に近い空気が流れているのに教員がいるだけで、割とそうなつていない。

シユツ・・・シユツ・・・・

聞こえるのは微かな話し声と彫刻刀の彫る音。

班になつて固まる北斗軍団、とりわけ沈黙の苦手な明彦は時折をもどかしそうに口を動かしていた。

「・・別にちょっと話すくらいならいいんじゃないのか？」

彫刻刀を止め、ぎこちなく手を動かす明彦に声をかけた。

「確かにそうしたいが・・・生憎おれは一つのことを一編に出来るような器用なこと出来ないんだよ。それになぜか進行が一番遅れてるし。」

「大丈夫だろ。間に合わなかつた時は星形の彫り物でも造つて学校中に配つてやれよ。」

「嫌だよー確かに姉貴はいるけどまだ結婚しないからなー。」

さすが明彦、絶妙な突つ込みだ。

と、感心をしていると隣に椅子に誰か座り込んだ。

「そんな異次元な会話しても誰も分からんと思つけど？」

声に振り向くと、呆れ顔の義孝の姿があつた。勉強が好きで得意、スポーツは好きじゃないけど得意というなんとなく分かりやすい明彦の友人である。当然本人は北斗軍団の団員では無いし、むしろ物凄く嫌がっている。（理由はわからないけど、特に明彦をかなり嫌がっている。）

「俺、話題に付いて行けない人間は置いて行く主義だから。あまり気にしないでくれ」

「さらっと冷たい」と言つて。ま、いいけど。甲斐も本気じゃなさそうだし

はは、と軽く笑い義孝は思い出したように小さく口を開いた。

「そうそう、孝之、おまえ好きな人がいるって聞いたけど本当か？」

・・・少し沈黙が流れた。幸いなのは、他の誰にも聞かれなかつたのか視線が集まらなかつたことくらいだ。

ていうか、今のは本気なのか？俺は孝之に目を移した。向かい合つた俊が目を見開いて、

「お、おい、マジなのか？」

と聞く。孝之が、

「へ？マジで？何が？」

震える口と手で俺たちを眺め回した。

休憩時間に入り、場所は男子トイレの個室に移動し会議を行つた（バカみたいにせまい・・・）。ではなくほほ尋問をしていた。

「貴様、俺より先に恋をしやがつて、何故黙つてたんだ！」

自分たちに隠していた事と恋愛事情で団員に先を越された事について明彦は2倍キレていた。（こいつはアホだと思った。）

孝「違う！好きじゃなくて・・・」

明「じゃあどうだと言うのだ？んん？」

孝「ただ気になつてるだけ・・・」

甲斐「それってほとんど同じじやない？」

俺のこの余計な一言によつて俺と孝之を除く団員たちは個室の扉を開け次々に出て行つた。

「よし、孝之、お前の『気になる人』を拝見をせりー。」

孝之はしづしづ教室を出て行つた。僕達は操られたよつて孝之についていった。

孝之は三組の教室の前に止まり、大きなため息をついた。明彦は子供のよつて

「なあなあ、どいつかね？お前の姫様は？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

と聞くと、孝之は真剣に口を開くことを嫌がっていた。しかし、明彦が握りこぶしを作り奇妙な笑顔で、

「孝之、本気出していいのかア？」

結局孝之は観念したようだった。孝之はうつむいたままある方向に指をさした。

がいた。
なかだみち

仲田美智子。言い表すような特徴はないけど、クラスの人から天然ボケ（時々俺もそういうわれるが、まあそれは置いといて）と評価されている女子、て位にしか俺には分からなかつた。

「なんつーか、妥当な・・・」

俊はかける言葉がなかつたのだろう、それだけを言った。俺から見たら意外な組み合わせに啞然としていたかのだが。

「なんか意外な組み合わせだな・・」

図らずも明彦と同意見。やつぱり俺たちにはそう映る、と思つ。しばらく美智子の様子を見てみたが、彼女は本当に天然なのかもしない。

消しゴムを机の下に落とし、それを拾い上げた拍子に机に頭を打ち付けた。そこまでなら目をつぶれるかもしれないが、問題は、その後にまた消しゴムを落とし、拾い上げ、拍子に・・・というループが一、三回目の前に起きていたのだ。

• •

「……………」

一同、絶句。

明らかに濁り始めた空気を察したらしく

「まあまあはどうするかを作戦会議だ！」

そう言つて明彦は教室へ戻つていった。

俺も、変な気分に変わる前に、明彦の後ろに付いていった。

一人、紹介したい友達がいる。

彼の名は大城孝之おおじのたかゆき。理由は分からぬけど、ドドリア（聞いたことは無いよな？）と呼ばれたり、授業中はよく居眠りをしており起きるとたまに鼻水をたらすことから「ボーチャン」と言つあだ名もついたりと、明らかに本名よりもその数が多い。

しかし、一番のポイントは神様から見放されたような、運の無さだろう。本当に可哀相な親友である。例をあげるなら、テストで全員がカンニングをしているのに対して、孝之だけがバレてしまう。本当にそんな感じである。

で、昼の休憩時間、

その哀れな少年のために、俺たち北斗軍団は、死ぬ氣で知恵を振り絞りながら意見を出し合つていた。

明「お前らだつたら、じつやつて気になる女の子に告白する？」人ずつ言つてみる。

甲斐「ストレートに『好きです！』、とかでいいんじゃないか？」

俊「・・花束をあげる」

明「それで、なんていうのだ？」

俊「僕は死にません！..」

明「なぜ、パクる？」

俊「いやそういう小説だら、これ」

明「まあ、否定はしない」

しかし、ほとんど参考にならない意見が飛び交う中、明彦は黙

り込んだ孝之に

「で、お前はどうしたいんだ？」

と、まともなセリフで問い合わせてきた。孝之は覚悟したように

「ま、まずは一人で話してみたい・・

と小声で言つた。そのときの明彦の顔はかなり驚いていた。そして、明彦も決心したように、

「よく言つたぞ、BOY。そんなお前のために最高のステージを用意してやるぞ。」

フハハハハハ、と笑いながら明彦は

「甲斐、俊、行くぞ。」

「アーリーダーリー」

と質問した。明彦はノリノリで、

「最高の恋愛映画を作りにだよ。フハハハハハハハハ——。」

そう言つて一目散に教室から消えてしまった。少し後になつて俺も俊也明彦の目的に気付き、フハハハハハ――
、と空を飛ぶように手を広げ、狂つたように笑いながら教室から消え去つた。

ただ一人、孝之は

「何なんだよ、あいつらは・・・」

哀れな生き物を初めて見たような視線で、俺たちを見送った。

で、放課後、

孝之は『最高の恋愛映画』の設定を聞かぬまま帰ろうとしていた。だけど、俺たちは孝之への帰り道を妨ぐ。

「おーおー、主役がいなきゃ、映画は盛り上がりねえもんだろ?」

と、明彦ははやすやすと言つた。

「な、何だよ、いつたい。」

孝之は状況が飲み込めず、ただそう言い返した。

「言つてただろ? 最高の『恋愛映画』を作ると。」

明彦の代わりに俺はそう言つて、孝之を学校に待機させた。やはり逃げる気満々だったようだ。

・・・・・ 数十分後、

「来たぞ!」

と、俊が何かを報告していた。孝之は視線の先を見ると、仲田美智子が歩いてきてたのだった。

「ナニコレ、聞いてねーぞ。」

パニックになつてゐるのがバレバレン孝之は俺たちにやつ質問した。

開き直つたよつて明彦が、

「そりやそーだ。何も言つてないんだし。」

と軽く言つた。続けて明彦が、

「いいのか、こひしてて? 何もせずに映画のエンディングをむかえたいのか?」

上手くあおるよつて明彦は言つた。

「じょ、ジヨーネーだよ。やつてやろひじやないか!」

孝之も開き直つてゐるが、なんか弱々しい足取りで美智子のところへ歩みだした・・・・

ヤツの恋人疑惑—中盤—（後書き）

言い忘れてましたのですが、彼らは中学2年生です。ご了承ください。

ヤツの恋人疑惑へ決着

孝之は生ける屍みたいに、ふらふらと美智子に近づいていった。
ゾンビみたいで妙に怖い・・

俺は孝之の様子を遠くから見て強く祈っていた。

「神よ、こいつを見捨てないでくれよ」

あまり他人のために必死になつたことない俺は、なんとなく祈つてしまつ。すると、それが届いたのか、孝之と美智子教室のドアの前で何かを話していた。少しすると、孝之が、

「じや。」

と言つなり美智子と別れてこちらに帰還してきた。そんな孝之を俺たちは優しく迎え入れた。

「よくやつた同士よ。どうだい、反応は?」

明彦は「冗談を言わば、真面目に聞く。

「いや、イエスでも、ノーでもないんだ。」

「そうか、一生友達で、つてことか・・

「そうじやなくて、そろそろ帰りの会始まるから、後でつて言われてさ。」

「あ、なんだ」

発言が発言だから、てつきりダメだったと思つたからつい勘違いしてしまつた。

「「なんだよ、かなりベタだな～。」」

俊と明彦は声をそろえていった。

「まあいいだろ。それなら落ち着いて放課後まで待とうぜ。」

俺は軽く言つてその場を收拾させることにする。

時間は経ち、現在午後六時、
実際に終わる時間より1時間遅く3組のホームルームが終了した。
すっかり待ち疲れた俺は、

「なあ、やつぱ俺帰つていいか?」

ダメ元で聞いてみるが、明彦は俺が予想したとおりの返事が返してくる。

「弱音を吐くなバカモノ！俺たちはやるといつたらやる、決して逃げたりしない男たちだ！だから認めぬ」

この言葉に俺は深くため息をつきながらも、しかたなく明彦に従つた。

そのころ、俊は孝之の様子を見ていた。今の孝之の表情はとくとく、世界の終わりを迎えるようなブラックな顔をしていた。それを見ていた俊は無理矢理に励ましていた。

「だ、大丈夫だよ。お前のよつな色男をほつとくわけ無いって。」

俊がそう言つた、こいつの顔は色男の影は無く、まるで40代を超えた中年のオッサンのようにやつれた顔をしていた。見ていてかなり痛々しい……

そして……さらに十分後、ようやく本人の姿を確認する。それを見た俺たちは、

「よし、孝之、「オオオ——!——!」

急に生き返つたように叫び、明彦は孝之の背中を蹴り飛ばした。孝之は蹴られた拍子に美智子にタックルを決めていた。一人は勢いよく立ち上がり、顔を上げると偶然一人は目を合わせた。そして目を逸らすと、二人は恥ずかしそうにモジモジした。その様子を遠くから見ていた俺たちは

「や、やばい……」

「これは面白いな」

「ふ・・・・ふくくく・・・・」

どうしてなのか、笑いを堪えていた。しばらく様子を見ると、二人はこちちらの教室に近づいてきた。そして孝之が僕らに声をかけた。

「・・・頼む、誰も来ないか、見張つて欲しいけどいいか?」

照れくさそうに言ひ孝之の誠意に答え、俺たちは親指をぐつと立てた。

夕暮れ教室の中、二人が話をしている。見張りをするために俺たちは廊下に一人、外に一人と警備を待機した。本當なら一人の会話を盗み聞こうとも考えていたけど、明彦が見張る前に言つた「盗み

聞きした奴は、明日の太陽を拝めぬと思え!」と叫び警笛によつて止めることに。△

といつても、友達のため、そんなシンプルな理由で俺たちはやめた。

約二十分後の六時四十分、話が終わつたのだから、一人は教室からおもむろに出てきた。

「孝之、ちやんと家まで送つてやれよ。」

あえて結果は聞かずについた。そして、幸せそうに一人は帰つていつた。一人だけ帰らせたかったが、非常に運が無い孝之の特殊能力ため、なにかのためにバレないよつて後ろから見守り続けていた・・・

・・・翌日

孝之はいつもとは違つて、妙に男らしくなつていて。さすがに気になつてしまい、俺は聞いてしまう。

「昨日の」とか?」

孝之は誇らしげに首を頷かせる。

「守るべきものがあるつて、すばらしげー!」

と、自信ありげに答えた。びりやん、お似合いのかップルが誕生したらしい。正直、ふられるだろ?と予想していたからなんだか嬉しいくなる。

そんな孝之を見て、明彦が

「ふう、もうデドリシアとは呼べないな・・」

とちゅうと残念そうに言つた。しかし、次の行動で僕らは田を覚ました。僕らの田の前で椅子に座つていた孝之が、なぜか後ろに転倒していたのだった。しかもその近くには、美智子が立つていた。

「デドリシアに格下げだな」

「守るべきものに守られてる・・・」

「うん。やっぱ孝之だ」

ああ、俊の言つとおりだ。孝之は幸せがきても孝之だ。それが改めて分かつた気がした出来事だった。

小さな冒険④突然の事件

学校へ登校中、

天気は快晴で暑くもない寒くもない、ちょうど暖かい天気であった。けれど、僕は何か憂鬱だった。

その理由は、学校へ登校中に黒猫をたくさん見かけたり、いろんな種類のカラスが僕を中心にして、飛び交っていたのだ。朝いきなり不吉な感じがして落ち込んでいた僕の後ろから、

「よう、甲斐。何か元気が無いけど、どうかしたのか?」「孝之が声をかけてきた。憂鬱になつている僕は孝之に、

「孝之、今日はイヤな予感がしないか?」

と聞いてみたが、

「そりか?そんなことないぞ?気のせいじゃないか?」

と孝之が言い返した。

「そりか・・・そうだよな。」

と僕は少し前向きになつて言った。（さつきまでの出来事は、孝之と遭遇する前ぶれだと思うようにした。）しかし、そう思つてみても、なにかがひっかかるのだ。だから僕は、学校が終わるまで油断をしないと肝に銘じ、登校した。

無事、学校に着いて僕は、

（よし、何も起こらなかつたか・・・）

と安心していた後だつた。教室の中から明彦と俊が、口論をしている声が聞こえてきた。僕と孝之は、その会話を聞いてみた。しかし、聞いてみると余計に謎が深まつてしまつた。内容は、

俊「なぜだ!なぜ俺達がそんなことをするんだよ!」

明「理由は一つ。一つはこの町のため。もう一つはこの中学校生活にいい思い出を作りたいからだ。」

俊「そんなことなら、警察に任せればいいじゃないか。」

明「バカモノ。警察は少し行動が遅いからな。早いうちに、俺達がやればいいだけだろ。」

俊「バカはお前だ！そんなトラブルに飛び込んだら、俺達はあぶねえんだぞ。」

・・・・と言つよつな会話が続いていた。僕と孝之は、好奇心にかられて、この会話に入った。

「俺達も混ぜてくれよ。その話によ。」 「俺・・・・・・

僕はそう言つて話に参加した。（孝之も僕と同じことを言おうしたが、ハモッたせいで「俺」と言つセリフから黙り込んでいた。不運だな・・・）

「聞いてくれよ。このバカがなあ・・・」

俊がそこまで言つと、明彦が割り込むように会話に入ってきた。

「まあ、聞いてくれよ。俺の親友が先日、不審者につかまりそうになつてたんだ。とりあえず、逃げ切つたらしごけどよ。」

明彦はそこまで言つと、僕は察したよう（そして、『不吉』の正体を聞くよつこ）に言つた。

「とすると、俺達がその犯人を捕まえると言つことか？」

思つたことを言つてみたら、

「ビーンゴォ！ そういうことだ！」

と明彦は親指を立ててはしゃぐよつこ言つた。

「な。こいつ、アホだろ。」

俊が哀れむよつこに言つたら、再び口論が勃発されよつとしていた。だけど、僕のこの一言で勃発を防いだ。（てきとうに答えたのだが、後に『不吉』を呼び寄せることになるのである）

「・・まあ、面白そうだな。やつてみよつぜ。」

しかし、これが原因で事態は大変な方向へ向かつた。それは、

「聞いたか？ 仲間はこれで一人だ。ボクタチが死んだら、主な友達はいなくなるぞお。」

と明彦がをほとんど、脅迫らしき」としたのだ。この『脅迫』によつて、

「・・・わかったよ。やつやいいんだろ。やつや。」

と俊が言つて、リタイアした。また、明彦が、

「いつものメンバーじゃないが、これで事件も楽勝だろ。ひだり。」

そう言つて、孝之を煽り立てた。明彦の思わずくびうり、「

「上等だよ！俺もやつてやるよ！」

孝之も仲間になつた。（その姿を見て僕は、こんな自分達に振り回されるこいつが本当にかわいそうに思つた。）こうして、いつものスタメンで僕らはちよつとした冒険をするのだった。そこで明彦が「作戦会議をしたいところだが、ちよつとジャンケンしてくれ。」と何か意味ありげに言い出した。僕らは、その言葉を疑わず、指示どうりに動いた。

「「わあーーいしょーーはグーー。ジャアーーーンケヨーーー
ン・・・・」

放課後、

僕と俊と明彦は各自で準備された自転車に乗つて、その僕らの前方約十メートル先に孝之がいた。

状況を知りたいとしたら、作戦会議から説明する。明彦の考えた作戦は、不審者の現れた場所に全員が移動。一番前の人（孝之）は不審者をおびき寄せる『エサ』なのである。そこで、不審者が現れた場合、後方にある（僕たち）『自転車隊』が追つてくる。こうして不審者を捕まえたら、ボコボコにして、警察に突き出すと言う作戦である。さきほどあつたジャンケンは、役割を決めるためのじゃんけんだつたのだ。（一番怖い『エサ』役に選ばれた孝之の感想は、「死にたい・・・」だつた。）

一見、楽そうに見える（僕もそれが理由で選んだ）『自転車隊』だが、実際やつてみるとかなりの神経を使うのだ。不審者はどこから狙つているのか、この作戦はバレていなか、孝之はまだいるどうか

など、いろいろなところに手をやつながら、怪しまれなにように俊と

明彦と会話したつしていた。（）につけられ、やつれてくるはずだ。）

しばりやつてみても、不審者が現れる気がしなかつた。そういう雰囲気が出始めたとき、僕は妙な胸騒ぎがしたのだ。気配がかではなく、自分の本能がヤバイと叫んでいるのだった。僕は急いで孝之のほうへ走つていつた。その様子を見た俊と明彦は

「な？ 甲斐？ どうした？」

戸惑つたように言つた。それとほとんど同時に孝之の近くにあつた黒いバンのドアが急に開いた。

「逃げろ！ 孝之！ …」

僕は叫ぶよつて言つた。孝之は、

「何？」

と言つてこちりて振り返つた。

「孝之！ …逃げろ！ …！」

僕はいつそう強く叫んだが、すでに手遅れだった。孝之はなす術もなく不審者の男にバンに乗せられ、バンはエンジンをかけていた。そして、そのまま何処かへ走り去つとしていた。

（くそ、間に合わない！）

バンとの距離が離れ僕がそう思つたときだつた。後ろの方で、

「遅いんだよ、ミーちゃん！ 役立たずか、てめえはよー！」

明彦の暴言が聞こえた。その後俊が、

「だあれがミーちゃんだゴラアアーーー！ 僕はお荷物なんかじゃねぞーーーー！」

と猫ではなく、獣のように叫びながら、俊はスピードで黒いバンに向かつて行つた。

小さな冒険④ 追跡と謎解き

屋比久俊^{やびくしゅん}普段のこいつは笑つてしまつぽぢの無氣力の持ち主であり、勉強のレベルは北斗軍団（ていうか学年）の中で低い方にランクされる。理由はわからないが、周りからはあだ名はネコ、ミーちゃん、タマなどネコに関する文字（魚やキャットフードも含む）を言うと俊本人からもれなく、鉄拳制裁をいただくことになる。しかし、強くなるのは、パンチ力だけでなく、全般的な能力が大幅にアップするのだ。短距離走で例えるなら、50m走で普段の能力が約20秒だとしたら、怒らせると、約10秒の記録を作り上げそうなほどの男である。また、ケンカによる能力もひょっとしたら、かなり強い方だと断言できる。（僕より強いかも・・・）

俊の乗つた自転車は、徐々に黒いバンへと近づいてきた。

（よし、いける。）

僕がそう思ったときに、バンは意外な方向へ進んだ。それは、

「な!? 左折したぞ？」

と僕らは驚いた。左折をすると、そこは上り坂になっていたからであつた。いくらキレた俊でも大変なことになつたのだ。俊に続いて僕も明彦も体中の力を振り絞るようにして坂を駆けた。けれど、相手はスタミナじゃなく機械でできた車だ。少し食らいついたものの、僕らとバンの距離は徐々に離されてきて、さつきとは逆の展開になつてしまつた。僕も明彦も俊も坂の途中で力尽き、バンは勝ち誇つたように僕らの視界から消えてしまった。何もできなかつた僕は孝之に対して、

「・・・すまんな・・・孝之・・・・・（この時、『不吉』の正体は僕自身だったと気付いた。）
と言つしかなかつた。

バンが消え去つて少しすると、僕らも完全に息が整つていた。もう一度走る事だつてできる。けれど、

あのバンを追いたいのこ、どこにいるのかが見当もつかないのだ。そして現在の時刻はと言つと、自分の腕時計で見る限り6時半を超えていた。はつきり言つと、皆が諦めていたとき、明彦が

「負けっぱなしなんだぜ?これでいいのか?」

と奮い立たせるように言つと、まず僕が、

「ちつ、俺のセリフをとりやがつて。なかなか生意氣だな?」

と言つて立ち上がつた。続いて俊も、

「ホント。俺もそう思つていたんだぜ?」

生意氣な口をたたいて、立ち上がつた。こうして全員のヤル氣が上がると、こちらもヤル氣になつてくるから、こんな時は本当に頼もしい奴等だと思つ。すると俊が、

「黒い車が通つてゐるのを見ましたか?」

いつの間にいろんな人にあのバンの行き先を尋ねていた。

「俺達もやるぞ。」

と明彦が言つと、僕らは、

「「ヨツシャ!」」

と張り切つて言つた。それと同時に僕の中にある疑問が出てきたのだった。

それから30分後、（現在午後七時）

情報と言つ情報は無に等しかつた。主な情報と言えば、

「あそこの方で見た。」

と言つことだけ。どこで見たと聞いてみると、その人は、坂を登つたところを見た、と答えていた。はつきり言つと、その情報はなんの意味も無かつた。なんせ、孝之を最後に見た現場だったからである。

「くつそ。何の進展も無しかー・・・」

俊がぼやくよつて言つと、僕はさつきの『疑問』を問い合わせた。

「なあ。何で孝之は連れて行かれたんだ？」

この『疑問』に対し、明彦は、

「やつぱりアレだ。運が無いんだよ。」

僕の予想どおりの返答だった。この返答に対する（やつぱり）そな

のかな？）と思った。少し落ち込んだ僕はもう一つ聞いてみた。

「じゃあ、さらわれかけたお前の親友って誰？」

この質問の答えは、

「ああ、あれか。あれは義尚だな。」（あまつそう見えなにけど・・・）

明彦は思い出したよつて答えた。すると僕は『答え』を見つけた。僕は改めて、

「もう一回聞くけど、なぜ連れて行かれたのが、孝之なんだ？」と明彦に聞いてみた。明彦はしばらくすると、何か納得したような、そして思い出したような顔をした。俊は話についていけず、無理やり話題に入ってきた。そして、

「何だよ。俺にも分かるよつて説明してくれよ。」

俊が苦しむよつて言つた。僕はその答えを少し遠まわしにして云えた。

「一度田は義尚、一度田は孝之、これがどうこいつ意味か分かるか？」

そう言つても、俊は、

「何言つてんだお前は？」

と言つて返した。（つまり分つてこない。）もつ一度僕が言おうとしたと云ふと、

「今度は、俺が言つぜ。」

と明彦が割り込んだ。（多分かつこつけたくて割り込んだな・・・）

「少しヒントをやろつ。孝之とあいつには、ある共通点がある。」

明彦はそう言つたのに、

「はあ！？だから何なんだよ？」

俊はまだ気付いていなかつた。明彦がめんどくさそつこ、

「もつ一つヒントだ。これは決定的だ。あいつらにあつても、俺達

には無いものだ。

「今まで言ったのに、俊は、

「ああ！？ワケわからぬーよ。要するに何だよ！？」

僕はポケットから十円玉を出して、いつ言った。
と少しキレ気味になつていた。まだ分つてないネコちゃんのために

簡単に僕がそう語つと、俊は、

「そ……か……金が狙いつてワケか……」

今更ながら、俊が答えをとくことができた。謎解きもできたり、これから反撃を誓う僕らであつた。

小さな冒険／新たな策と孝之

リベンジも誓つたし、覚悟も決めた。だけど、僕らは困っていた。いくら敵を倒したいと思っても、孝之を助けたいと思っても、『場所』が全然特定できないのである。しかももう時間もヤバイのである。と言うわけで僕らは途方にくれていた。そんな状況の中、僕はひとまず提案を言ってみた。

「・・・なあ、いくらなんでも遅すぎるぞ。美智子にこのことを伝えて、明日解決しよう。」

そう言ったのだが、明彦は、

「バカヤロウ！ 今日で片付けねえと、孝之がアブネエだろ！」

と、ほとんど怒ったように言った。今度は気まずい雰囲気が流れた。その状況の中、今度は

「とりあえず、美智子には伝えた方がいいだろ。」

と俊が言った。

「・・・・・じゃあ、そうしよう・・・

何かしょんぼりした空気が流れたまま、僕らは美智子の家へ足を動かした

コンコンコン。

僕らを代表して俊が家のドアをノックした。

「はい。」

いつもの能天気な声が聞こえてきた。（僕らに取つてこの声を聞くことは、結構辛かつた。）そして、美智子がドアを開けた。

「なあーに？ 遊びにきたの？」

とあんまり言わなそうな言葉で出迎えられた。普段なら笑うところだけど、僕は真剣な表情でこう言った。

「重大なことを言つ。立ち話もアレだからとりあえず家に入れてくれ。」（僕の言った言葉、自分自身、変と思つた。）

そつして僕らは、リビングでこれまで『事件』の話を聞かせた。術と説明した後、美智子は、

「うそ……でしょ……」

と案外驚いていないような顔つきで言った。（ぶつちやけると、もう少し驚いて欲しかった。）

「ウソじゃない。全部マジだ。騒ぎを広げたくないから、全部内緒にしてくれ。」

と明彦が諭すように言った。けど美智子は

「じゃあ、孝之が大丈夫か聞いてみるよ。」

うろたえたように携帯電話を取り出した。この様子を見た僕らは、（やっぱ話し聞いてないし。ていうか「じゃあ」じゃねーだろ。）

といろいろ（心の中で）シッコミを入れた。それを見た明彦が、

「それだ！ その手があつたかー！」

何を思ったのかそう言い出した。

「コイツ……とうとう壊れたか……」

俊が哀れむように言った。けど、明彦は今のセリフを聞いていなかつたように、そして生き返ったようにこう言った。

「甲斐、お前に国語の成績が本当にアップなら、やつて欲しいことがあるんだが……」

一方、孝之はといつと……

俺が捕まつてどれくらいになつただろうか。辺りはもう暗くなつていて誰かが助けに来る、という雰囲気すら感じられなかつた。そんな空氣の中、グラサンと帽子で顔を隠した男は、

「さて、そろそろやりますかね。」

そつとひいて、俺のほうへゆっくり近づいてきた。そしてまた、男が

「なあ、携帯持つてないか？ 今使いたいところだが……」

恐怖を煽り立てるように言いながら、俺の服を調べ始めたその瞬間

だつた。

ピリリリリリ。ピリリリリリ。

胸ポケットから携帯電話が鳴り響いた。男は少し驚いたが、一瞬もしないうちに冷静になつて携帯を取り出した。男は携帯を開き、

「おい。お前の家の番号か？」

と聞いてきた。俺はその番号を見てみると、それは全く知らない番号が表示されていた。俺はワケが分らないからとりあえず首を縦に振つた。そうすると、男は携帯に応じた。

「やあ、こんばんは。」

男がそこまで言つと急に静かになつた。少しすると

「何だそれは？言つてみろよ。」

と俺には理解できない話が展開されていた。すると突然男が

「何だと！－！それはどういうことだ！」

何かをしたような、そんな叫び声が響いた。

「それで、どうじろと？」

さつきとは変わつて男は何かを知りたいように質問をしていた。（

この後の話はあまり聞かなかつた。俺にはついていけなすぎだつたからだ。）

少し会話が途切れ沈黙が流れていった。すると男が、

「俺の名前？如月開きさらきかいだ。今の話、ノつたぜ。じゃあな。」

こうして携帯による会話は途切れた。男は携帯の電源を消したのだ。そうすると突然男が俺を乱暴につかんだのだ。そして、

「来い、場所を変更だ。」

そう言わされ、俺に何も説明しないまま、バンに乗せられ何処かへと移動した。移動中俺はなぜこうなつたかを考えてみた。一つ目は、何かの情報ミスで俺はニセモノ扱いされ殺される、もう一つは『アイツら』かもしれない、と言つ考えが出た。けど、一つ目はやつぱりありえないなと思つて自らその考えを消した。

・・・・・どれくらい沈黙が流れただろう。気が付けば俺の知つている町並みが現れたのだ。俺は思わず、

「おお！」

と感激してしまった。（自分の家がかなり恋しかったからだ。）けれどさう言つと、

「おー、黙つてろ！」

開が怒鳴るように言つた。（そう言えば甲斐と同じ名前だと今更気付いた。そしてなぜ戻ることになつたかも知りたかった。）

数分後、

車は、俺の想像どころが夢にも思わない場所に到着した。そこは、俺が小学校の頃『秘密基地』だったからである。開はバンから降りて外の三人の男に何か話をしていた。話が済んだのか、開は俺に

「降りろ。」

と強引に降ろした。（その拍子におでこをぶつけた。）俺は恐る恐る顔を前に向けると、目の前にはかなり怪しい格好をした中学生か高校生三人（グラサンや帽子をかけてるせいでよく分らない）が俺を見下すように笑つっていた。正直、今かなり怖い状況だった。

小さな冒険／事件解決

俺は正直死を覚悟している。事態がここまで来るとそれもあるしかないのだ。けど、何を話すのかが気になつてしまふがいいから俺も話に割り込もうとしたが、開が無理に俺を引き連れた。そして、この開から意外なセリフが出てきたのだ。

「ホラよ。こいつは返すから金をよこせよ。」

てつくり殺されると思っていたのに、俺の代わりに金を払う奴が出現して俺はかなり驚いていた。困惑している俺をよそに会話は続いていた。

「金は出しますよ。けど、この人をもつ少し、ちゃんと見させてくれませんか？」

見た目とは裏腹に声がやや高く少し背の低い『男』がそう言った。

「ああ、いいぜ。」

少しじれつたそうに開は言った。『男』は俺の顔中を少し眺め回した後、

「確かに。この人は違いますね。」

確認したように言った。

「やつぱりそうだらうが。早く金をよこせ！」

甲斐は我慢できないうちに言った。『男』は少しため息をついて、

「・・いいでしょ。金はあげますよ。」

と落ち着くように言った。『男』は隣にいた男からすぐ隣のトランクを受け取った。そして、

「このトランクの中に、僕、大城孝之の財産が入っています。」

俺に取つて驚きの発言が出てきた。俺はますますこの『男』たちの正体が分らなくなつていた。俺がさうに困惑しているとき、

「どうぞ。」

と『男』は一寧にトランクを手渡した。そして開が、

「ハハ・・・・これすべてが俺のものか・・・・」

と勝ち誇った顔でトランクを開けた。すると、開は何を見たのかかなり驚いたような顔をしてこちらに顔を向けた。そして、

「何故だ！話が違うぞ！」

開がそう言つたとたん、さつきの落ち着いた様子とは打って変わつて『男』は突然乱暴に開の右ほほに渾身の右フックを炸裂させた。これを食らつた開は勢いよくぶつ飛んだ。度重なる状況の変化に俺は頭を痛めた。何が起こつたか順番に整理させていると『男』がさつきの声の高さとは正反対にかなり荒々しくしゃべつたのだ。

「コノヤロー。やつと殴れたぜ。このパクリ野郎が～。」

グラサンと帽子を取つた『男』の正体は正真正銘の甲斐だった。

〈甲斐の視線〉

僕が本気の右フックを如月（名前で呼ぶとかなりむかつく・・・）にはなつた後、かなりすつきりした。なんせ、パクリ野郎を自分の手でブツ飛ばしたし、生きている孝之と対面できたから、かなり嬉しかつた。今すぐにでも孝之のところへ行きたいけれど、如月がまだ立つて来る事を知つていたから僕は動かなかつた。感じたとおり、如月はフラフラだが戦う意欲を見せていた。そして如月のその目は怒りに震えていた。僕はそれを煽るように、

「ちょうどいい。まだこつちは殴り足りないんだよ。」

余裕な口調で言つた。すると如月は、

「てめええアアア！殺してやるゾオオ！」

狂つたように叫びながらこちらに走ってきた。僕が迎え撃とうとする、如月はポケットの中からナイフをいきなり出した。

「ヤツベ。」

僕はこの展開を考えてなかつたから、ナイフの刃先と衝突しそうだつた。けどとつさに顔をどかしたおかげで右ほほをかすると言ひ結果でどうにかなつた。（まさか、コイツと同じ所をケガするとは・・・）

痛みが来たことによつて、僕も思わず

「テメエ！痛えじゃねかよ！」（ほとんど同じキレ方だよ・・・）
キレて僕はパンチの雨を如月の顔を中心にたくさん降らせた。ついでにナイフで反撃しないよう、ナイフを持った左手を思いつきり殴つた。ナイフを落とした瞬間僕はもう一度右ほほに右フックを振りぬいた。

（完璧だ！）

自分でもそう思うほど見事な一撃がはいったのだ。しかし、如月は立ち上がった。けれど、さつきとはダメージの量が違うらしく、今の如月はちょっと押しても△できそつうな程弱つているボクサーに等しかつた。（まさに虫の息だ）めんどくせくなつた僕は、

「俊、明彦、孝之。皆でぶつたおそれぜ。」

と皆に声をかけた。僕が戦つている間に孝之はすっかり自由の身になつていた。何時間ぶりに全員がそろつて、僕は非常に気持ちが良かつた。

「いくぜ！」

孝之を先頭に皆が如月のところへ駆けていった。

「や・・・やめて・・・」

命乞いのように開が言つたのだが、その声を無視して僕らは

「オラア――！」

全員が一斉に如月に攻撃した。孝之は左足にローキック、俊は右足にローキック、明彦はボディブロー

、僕は顔面にドロップキックを放つた。全員一斉に攻撃したのが良かったのか、如月は本当にダウンしてしまつた。（一瞬死んだと思つた）少しの間休憩して、僕は孝之に、

「よ。おかげり。」

と普通に言つた。孝之は、

「・・・ただいま。」

と返してきた。その直後に孝之は思い出したよつて、

「さつきのアレ。どういうこと？」

と孝之が聞いてきた。僕は、

「は？アレって？」

と聞き返した。（本当にわからない）

「さつき変装したヤツ。アレ何？」

ともう一度聞いてきた。僕は会話の内容がわかると、

「ああ、アレか。アレはな・・・」

ウーウーウー。

外からパトカーなサイレンの音が聞こえてきた。孝之が外へ移行をするのは僕らは拒んだ。そして、さつきの変装グッズを急いでつけて、孝之にこう言った。

「いいか。何も知らない。何も見てないって言つとこてくれ。」

そう言つた直後、僕らは孝之を置いてこの場所から急いで逃げ出した。（へタしたら、如月をボコボコにした僕らも捕まると思ったからである）

翌日、

僕らはいつもの通りに学校に通つた。校門の前まで来ると孝之と出会つた。すると孝之が、

「だから、変装のアレを聞かせろよ。」

聞いてきた。何かしつこいから、僕は最初にこう言った。

「それを言つ前に最初から説明しないといかんな。」

昨日明彦が考へた作戦は、犯人の所へ僕らが『行く』にではなく、僕らが『誘つ』のである。つまり、相手をこちらにひきつけるよう僕らが上手く話さないといけないのだ。そこで、国語の言語能力が高い僕が選ばれ、孝之の番号を知らない人から携帯を借りて、電話をしていた。電話での話が終わつた後、俊が警察に先回りするように通報していたのだ。ちなみに、如月と甲斐の会話は、

開　「やあ、こんばんは。」

甲斐「こんばんは。突然なのですが、重大なことを話します。」

開　「何だそれは？言つてみろよ。」

甲斐「あなたが連れていった人は孝之ではありません。」

開「なんだと！！それはどういうことだ！」

甲斐「ですからね。本物は僕なんですよ。」

開「バカな！ちゃんと家に入るところも見たんだぞ！」

甲斐「僕が招いただけですよ。」

開「…………」

甲斐「僕が金を払えばいいんですね？」

開「ああそうだ。」

甲斐「金はちゃんと持つてきます。その代わり、あなたにやつて欲しいことがあります。」

開「ほう。それで俺はどうしろと？」

甲斐「そこにいる僕の友人を連れてきてください。金と友人を交換つてことでどうでしょう？」

開「イイゼ。その…………」

甲斐「ああ、失礼。名前も聞けますか？」

開「名前？如月開だ。今的话、ノツたぜ。」

甲斐「…………そうですか。それでは人気も無いし、あのR学校の近くの工場でどうでしょう。」

開「ああ。そこにしよう。じゃ、あばよ。」

ピッ。（電源を消した）

と言つ会話をして僕らは孝之にはバレないよう、変装していた。（あいつが正体を言いつだから、変装した。）そして開がトランクを開けて油断している所をたおした。と言う作戦だった。

僕が作戦のすべてを言つと

「納得した？」て言つたが、俺が何言つてるかわかるか？「

と聞いてみた。孝之は本当に分つてているのか、

「アア、ワカツテル。」

と無表情で答えた。（絶対分つてないのはバレている）

「ところで孝之、事情聴取はなんていってんだ?」「僕が逆に質問してみた。すると、孝之は楽しそうに、元気よく答えた。

「そのうち、わかるさ。」

そう言って走つていった。僕は珍しくあいつのセリフが気になった。

朝の会、

僕の担任の先生が僕のびっくりする話を始めた。

「ええ、昨日不審者が捕まつた話がありました。警察の人が犯人を捕らえた人が誰かと聞いてみましたが、聞く所によると、私が犯人を倒したことになつてました。」

僕たち(北斗軍団)はこの話を聞くと思いつきり笑つてしまつた。

先生が、

「おい。うるさいぞ。」

注意した。それでも僕は顔を伏せて笑つていた。

(孝之め、面白い事を・・・)

と素直に思つていた。北斗軍団以外の人から見れば変わつたニュースだが、僕らだけが知つてゐるから僕はかなり気持ちよかつた。この話題が終わつた後、僕たちは冒険を終えていつもの日常へと戻つていつた。

不登校生徒を連れ戻せ！～その1

「オラオラオラオラオラオラオラー！」

朝早くから、僕と俊は単純に殴り合っていた。けどそれは、一般的に見た感想であって、僕の中ではちっちゃいネコとじゃれている感覚であった。（ちなみに、上のオラオラは僕が言った。）何故じゃれているかと言うと、理由は簡単。退屈だったからである。本気で殴りあうとシャレにならないから、やっぱり軽くやっている。けど俊の場合、僕が「ネコ！」と言ったせいで本気になり、手加減しているのは僕だけであった。

「その程度の攻撃、効かぬわ～。」

何かの悪役のような言葉を言った俊だが、もうこいつの体は全身が震えていた。つまり、僕の攻撃がかなり通用しているのだ。その様子を見た僕は、

「人も集まってきたし、もうやめようぜ。」

と言ったのだが、俊は無視して、

「貴様から仕掛けた勝負だらう。最後までせぬのか？」

としつこく言った。

「・・・はいはい。今すぐ天に還らせてやるよ。」

僕がそう言ったとたん、僕は俊の懷に入り、のどぼとけの部分に逆水平チョップをおもいつきり放った。その瞬間、俊は、

「ケフッ。」

と言つおもじろい声を出してダウンした。僕は力エルのように仰向けに倒れた俊を見て、一人で大爆笑していた。

授業時間を飛び越えて、45分の休憩時間、

明彦が珍しくも真剣な顔で、

「北斗軍団、今日は深刻な会議を行う。」

と急に言い出した。あまりにも珍しい光景なので、

「ほう。それで、今日の議題は？」

と真剣に食いついてしまった。

「朝の出席確認の時、すっかり名前すら呼ばれなくなつた奴がいるが、誰なのが知つてゐるか？」

と聞いてきた。僕は、

「いや、知らん。」

と素直に答えた。すると、孝之が、

「え、と、確か、津嘉山健つかやまけんだよな？」

と言つた。名前を聞かれて僕はそいつの存在を思い出した。僕の記憶が確かなら、コイツは今年に入つてからも、一度も学校に来ていない生徒、いわゆる『不登校』つて奴だ。

「ふうん。で、その健が何か？」

僕が何気なく聞くと、

「なにつて、あいつを学校に来させるに決まつてゐるだろ。」

と明彦が素直に答えた。

「そんな事なら、あいつ自身で解決させよう。」

とめんどうくそそうに答えた。続いて、

「そーだよ。わざわざ俺達が行かなくてもいいじゃんか。」

孝之が反抗してきた。少しすると、

「あいつが学校に来ないのは、人が嫌いだから、らしくござ。」明彦は小声でそう言つと、僕のほうに「ビーする?」と言つような顔つきで僕のほうを見ていた。

「・・・・・わかった。わかったよ。行けばいいんだろ。」

降参するよつに僕は言つた。孝之は珍しそうに、

「なんですか? わざわざ行かなくてもいいのに・・・・」

そう聞いてきた。僕はその質問にはつきりと答えた。

「俺とあいつに『共通点』があるからな。そういうのは助けてやるとな。」

僕たち三人（俊は途中でリタイアした）。その理由は、朝僕が放つた

チョップのせいで声が軽く出なくなつたと呟つことらしい。ちなみに、休憩時間の時点で彼はすでに学校から去つていた。）は、先生から健の家の地図を書いてもらひ、僕らはその地図を見ながら道を歩いていた。

「いやー。あいつの家が超豪邸だつたらなー。」

僕らは健の家がどんなものなのかを予想していた。僕は今言った孝之の意見を否定した。

「いや、違うだろ。学校に行かないのは、多分、貧乏もあるからだと思うんだ。と言つわけで俺の意見は古ぼけたアパートだと思つ。」

僕も意見を主張した。けど、明彦が、

「アホンダラかね、君達は。口口は現実だ。だから考えすぎるのもいかん。俺の意見はな、ノーマルのアパート。これしかないと。明彦もそう主張した。けど僕はその意見にけちをつけた。

「ほとんど俺の意見と同じじゃないか。」

そつ言つたのだが、

「『古い』と『ノーマル』と同じがうんだよー。」

と言つた瞬間、孝之が

「着いたぞ。」

と言つた。僕と明彦が顔を上げて家を拝見して見た。度肝を抜かれた。なぜなら、よく時代劇で出てくる奉行所らしき屋敷が目の前に広がつていたからである。このときの僕らは本当に眼が点になつていたと思う。このすゞさを例えるとしたら、自分の家のトイレが世界遺産に登録されたくらいのすゞれだつた。

不登校生徒を連れ戻せ！！～その2（前書き）

あらすじ

ある不登校な生徒を学校へ連れ戻そうと家まで来て見たら、すごいものを見た。

不登校生徒を連れ戻せ！！～その2

五分後、

僕らはその屋敷を発見して、まだ驚いていた。金持ちだらうと少しは覚悟をしていたけど、とても和風な雰囲気の豪邸をただの中学生が目の当たりにしたのだから驚くのも当然だった。（孝之が豪邸だと予想していなかつたら、僕らはショック死していたに違いない。）

「 プツプー プツプー

ふと、後ろから車のクラクションが鳴り出した。僕らは今たつている所からどき、車を見てみた。その車は黒いベンツと、何か怪しい雰囲気をかもし出すような物が、僕らを横切り正門に入ろうとしたときだつた。突然、車の運転席の窓が開き、

「 ン～～？ 何ヤツテんのかな～？ ボクウ～？」

いかにも前科がありそうな男が、怖い笑顔でそう話し掛けてきた。黒いベンツ、和風な屋敷、そしてこの顔つき。そこで僕らは健の家は『ヤーさん』の家だと言うことが理解できた。孝之は恐ろしくなつて、

「 命の大事さを知つたよ。だから、帰してください。」

敬語で話し掛けってきた。けど、僕は、

「 事情を知つたからには、なおさら助けてやるよ。」

と、平然に言い返した。

「 なんだよ！ なんでそこまでして、健を助けるんだよ～。」

孝之は本気で気になつたらしく怒るように聞いてきた。すると僕は、また平然と答えた。

「 一昔前の俺にソックリなんだよ。」

孝之はあまり分つていなかつた。だから、

「 ハツ？ そつくりつて何が？」

ともう一度聞いてきた。少しちんぐさくなつた僕は、

「 だからな～、あいつ・・・・・・・・」

とまで言つと、ベンツの人が、

「君ら、健の友達？ それならどうぞ。」

ちゃんとした清々しい笑顔で、話し掛けてきた。何か勘違いしているが僕らはその言葉に甘えて、屋敷の中に入つていた。

僕らは家来（やつぱり顔が怖い）の人人が、健の部屋を案内してもらった。（どうやら不登校の原因は引きこもりと言つことらしい）部屋に到着すると、僕はある不思議なものを見つけた。健の部屋の向かいはただの壁なのだが、その壁には無数の穴が刻まれていた。その穴は部屋のドアにもあるのだ。そのことを不思議に思つていると、

「おーい、健。」

と言いながら、孝之が無防備に部屋に近づいていた。僕が違和感を感じながらその様子を見ていたら、家来の人人が、

「危ない！止まって！」

と必死で止めにはいつた。孝之は指示どおり止まると、

パン パンパン パン

何か渴いた音が響いた。それと同時にドアに新しい穴が作られた。僕らは事態が飲み込めず、ただボーゼンとしていた。横にいた家来は、

「そうそう。健のヤツ、部屋に入るときウチのトカレフを持つつたんだよ。」

少し困つたように、それでいて、少し気楽な感じでそう言つた。

今起こつたことを全てまとめるど、僕は小声でこう言つた。

「これつて、間違いなく『立てこもり』じゃねーか。」

僕らはこの事件の後、この家で食事をいただいた。僕らから見れば、かなり豪勢なメニューであり普段なら喜ぶ所なのだが、突然、目の前で友人が殺されそう（孝之は九死に一生を得たような事件）になるという本気でビックリな展開が起こつたため、おいしい食事ものを通ることは無かつた。おまけに健の親（多分組長つて顔をして

いる)とその大勢の部下達が、意味もなく静かになっているから余計に食べづらかった。しかたなく、僕らは小声で『緊急会議』を行つた。

（話がブツ飛びすぎてついていけないんだが・・・）
孝之がまず口を開いた。表情が戸惑つてゐる所を見ると、真剣に聞いてゐるようである。そういわれた僕は、ポケットから鉛筆と紙をだして軽くまとめた。その内容は、

『今俺達は、テロリストの基地内にいる。俺達の目的はテロリストの解放なのだが、テロリストの要求は、『俺を外に出すんじゃない！』ということだ。つこさつき、お前は外に出るよう説得をしに行こうとした。すると、おまえに威嚇射撃をした。だからおまえは生きているんだ。と言つわけなんで、まだ俺達の目的は達成されていないんだ。任務は続行いたす。』

と書かれていた。それを見た孝之は、約500万ドルの価値はありそうな笑みをしながら、本気で涙を流してゐた。孝之を泣かしたところで、僕は『組長』に一つ質問を投げてみた。

「健はいつから学校に来なくなつたんですか？」

そう聞いてみると、『組長』は、

「そうですねえ・・・」

そう言つたきり、真剣に考え込んでいた。しばらくすると、
「ああ！思い出しました！」

と爆発したような大声で叫んだ。僕はそれを耳を塞いではいなく、『爆発』を直撃したから、人生の中でトップにランクされるような痛さが耳に走つた。それをこらえながら、

「そうですか。では、教えてください。」

と冷静に聞いた。『組長』は一つ一つをじつくり思い出しながら、僕らに話を始めた。

「確かに・・・健が一年に上る少し前の時期に、母親を無くした

んですよ。私も健も妻のことが好きだったから、あいつの為に盛大な葬式を行いました。けど、何故なのかそれから少しすると、健は学校に行くことを何か怖がっているように外へ出なくなつたんです。それで、今にいたる、ってわけですよ。

僕はその話を聞いていると、ある疑問が浮かんだ。まさか、と思いつつ疑問をぶつけてみた。

「喪中には、健の友達はいなかつたんですか？」

『組長』はまだじつくり思い出していた。顔を上げると、今回は叫ばず冷静に、

「そのような人はちつとも見かけなかつたな」

そう言つた。この一言で、先ほどの『疑問』は『確信』へと変わつていつた。

「そう言つ事か・・・・・

僕はそう言ひながら健の部屋へと向かつて行つた。

「お客さん！？ いつたい何を！？」

「止せ、甲斐！死ぬぞ！」

『組長』やら、家来やら、明彦やらが、口々にそう言つたのだが、僕は足を止めずに健の部屋へ向かつた。

食事をいただいたあの広い部屋とは打つて変わって、健の部屋の廊下はひどい位殺伐としていた。僕は後ろからついてきている人たちに、

「お願いなんだが、絶対に手を出さないでくれ。それと、もうついてこないで下さい。」

と一言言つて、後ろの人々を待機させた。僕は一人で健の部屋へ足を進めた。足音を出しながら、それでいて無防備に進んだ。

（客人、それはヤバイですつて！）

かろうじて聞こえる小声で警告してきたが、僕はそれを無視しながら、歩いて行つた。健の部屋のあの『ドア』に差し掛かる直前に、僕は足を止めた。そして弾丸のあたらない安全地帯の壁にもたれな

がら、僕は健に話し掛けた。

「よう、健。」

不登校生徒を連れ戻せ！――その3（前書き）

前回から不自然に導入されたが、とてもわかりやすい。

あらすじ

甲斐が健に話し掛けた。

不登校生徒を連れ戻せ！――その3

「ちょいちょい話をしようぜ。」

僕は銃弾のあたらない範囲内で健に話しかけた。けれど、健からの返事は返つてこなかつた。しかたないので、僕は健に無理やり声をかけた。

「なあ、健。そんな所にいても、つまんないじゃん。学校に来いよ。」

と言つたのだが、健は突き放すように、

「なんで？なんで学校に行かなきゃいけないの？」

と言つた。僕は、どこかの模範生徒みたいに言つた。

「そりや、おまえ、友達がおまえのこと心配してるんだぞ。」

我ながらくだらないことを言つたもんだと思つた。そして健は、僕の少し予想したとおりの返事を返してきました。健は馬鹿にしたように言つた。

「トモダチ？ハハハ、馬鹿じやない？」

予想していたとはい、なんだかむかついた。僕が、そう思つていることも知らず、健はさつきとは打つて変わつて、少し寂しそうにもう一言いつた。

「トモダチなんて、全部ウソっぽいなんだよ。」

僕は少し言葉を考えてみた。そして選んだ言葉は、

「何故そう思つ？」

と言つた。そう言つと健は、

「だつて、そうだろ！？皆、僕がヤクザの息子つてだけで、避けていくし、親友だと思つていた奴でさえ、遊ぶことを避けていたんだ。よくよく考えてみたら、電話で連絡をする時もそうだ。僕からはかけるが、あっちからかけた事なんて一度もないんだよ！そして、誰も家に来ようともしないんだよ！だから――トモダチなんてものは、誰全部ウソなんだよ！」

たまっていたもの全部吐き出したように、叫んだ。僕はそこまで聞くと、

「と言つてもアレだろ？本氣で心配してくれた時は助けに来たもんだろ？」

少し心配するように言つた。そう言つたせいで、健はまた寂しそうに、話をした。

「心配？助け？ありえないね。いじめに關しては、何の問題も無かつたさ。けど、勉強や、いろんなことに困つた時に友達に相談をしても、相手はこっちの顔も見ないで、適当なことを言つてくる。あげくの果てには、母親の葬式には僕の友達なんか誰一人来ることなんか無かつた。」

そこまで聞くと、孝之と明彦は『原因』を全て理解できたらしく、つながつたように、一人は、

「あ。」

と言つた。つまり、健が部屋にこもつた理由は人間不信、そして、『友達』と言つもの嫌つていること、『ヤクザの息子』と言つコンプレックスというわけだつた。この一人がそこまで分ると、健は話を続けた。

「もちろん、喪中に友達にきて欲しい頼んださ。けど、どんなに誘いかけても、誰も来なかつた・・・そんな目にあつといて、学校に来て、トモダチとはなす？無理な注文だね。うわべだけの友達なんて、もうゴメンだよ・・・・」

そこまで言つと、健の口調はもつと静かになり、疲れたようにこう言つた。

「だから・・・もうほつといてよ・・・・」

それつきり、健からの応答は無かつた。そして、僕は決心したようにこう言つた。

「ああ、分つたよ。」

それだけ言つと、僕の後ろの方にいた皆さんが『What?』と言つ風な表情をしていた。勘違いされたために、僕はもう一言言つた。

た。

「そのかわり、だ。俺の条件を一つのんでくれ。」

僕は決心した。もう迷わない。そういう感情を抱きながら、そう言った。

「・・・・条件つて、何?」

健が本当に知りたそりに言つてきた。場所が場所だから、僕は勇気を振り絞つていつた。

「俺と勝負しようぜ。とてもシンプルなタイムマンだ。」

不登校生徒を連れ戻せ！――その4（前書き）

あらすじ

貝が凄い事を言った。

不登校生徒を連れ戻せ！！！！～その4

今僕の言つた発言は相当インパクトがあつたらしい。明彦と孝之は、お口を開けてポカンとして、後方にいた怖い顔の家来達も同じ顔をしていた。

「客人、アンタ、何言つてるんだ？」

口には絶対出したくないが（命がもつたいないし）こいつらは顔も悪いのに頭も悪いらしい。全く話を理解していなかつた。

「いぢいち、タイムンをするなんて、君は何考えてるんだ？」

健は疑問に思つたらしく、僕に質問してきた。僕は迷わず

「別に。お前の頭を冷やそうとしてるだけだが？それがどうしたのか？」

「…………」

健は何も答えてこなかつた。話が途切れた所で、僕は話を本題に戻した。

「30分。それまで庭のほうで待つてやるよ。30分以内にきたらタイムンをはじめるぜ。」

「…………君が勝つたらどうするの？」

僕もそこまで考えていなかつた。少しうるたえて、僕はこう言つた。

「…………潔く学校に来る。それだけ。しかしだ。お前が勝つた場合、俺はお前に関わらないし、学校には別にこなくて良い。」

僕は付け加えるようにもう一言いつた。

「あと、30分待つが別に来なくたつてもいいぜ。けど、来なかつたら、少なくともお前は世の中を怖がつて一生そんなトコで何も変わらず、生きていくだろうな。そうなるとお前はかなりの臆病者だな。」

僕はここまで言つと家来達も黙つてはいなかつた。

「客人、テメエ。いい加減ダマッてろ！」

家来はスゴイ形相でこっちに来て、僕の頭のあつちこつちに銃を突

きつけた。僕はそれに動じないで、
「そんじゃ、待ってるぜ。」

そうこうと、この部屋を後にした。

「お前って、スゴイなあ。」

孝之からそういうわれた。急に言われて僕は戸惑っていた。

「何が？」

そう聞いてみると、

「だつてよー、考えてみろよ。自分の頭に銃をくつつけられてんのに、それをシカトして、何処かに行く奴なんて絶対いないぜ。」

孝之が熱中したように説明した。僕も考えてみた。・・・・・・

・うん。いないな。

「・・・・・トイレに行つてくる。」

「？」

「イヤ、普通にトイレに行くと悪いのか？」

僕は少しキレ気味に言つと孝之はビクつとして

「・・・・・どうぞ・・・」

と言つた。

僕はトイレに行くと、

「・・・・・チクショウ・・・・許さんぞ～～・・・・・」

そう言いながらズボンを脱ぐと履いていたズボンもパンツもパンショ濡れだつた。あまり言いたくないのだが、『失禁』と言つものを初めてしてしまつた。

「・・・・ロロス・・・・・ロロシテヤルゾ～～～

僕は完全に怒りに震えていた。

トイレで着替えを済まし、

僕は庭に戻つた。

「よつ、甲斐。・・・・・あれ？ズボン変わつてない？」

明彦は僕の怒りのつぼに触れた。

「……じゃ、ついでにテメエの顔の形も変えてやるうか？」
今の僕なら、人造人間も倒せるほどの勢いはあるだろうと思った。
それくらい殺氣を出していた。

「…………問題ナシですな。どうやら。」
今の会話をなかつたようなく長で話を進めた。
「で、そいつダレ？」

僕は明彦と孝之を後方に指を指した。一人が振り向くと、綺麗な顔立ちで、カッコイイ男の理想の体型っぽい、やせた人がたつっていた。
「…………と言つても、多分健だらうけどね。」

見とれていた二人は、「何！」と言つような顔をした。

「ビビつて逃げた、と言つわけでもなさそうだな。」

少し挑発してみたが、健はのつてこないで

「いいから始めようぜ。」

と言つた。ただの庭だつた所が、完全に闘技場のような雰囲気に変わつていつた。

不登校生徒を連れ戻せ！――その5（前書き）

前回のあらすじの所の漢字間違えた。で、

あらすじ

甲斐／S 健

不登校生徒を連れ戻せ！！！！～その5

紗次田甲斐、北斗軍団の中で唯一戦闘を好む（自分はそう思わない）人物で、ヒゲがクラスの中で特に長いため、『オッサン』と呼ばれたりしている。稀にだが奇妙な発言をしたりして、回りを混乱させたりすることが、しばしばある。好きな言葉は、『人類平等』である。

生徒会調べ

この広い庭に静寂が流れていた。此処にいる全員が呑気にしゃべれるような雰囲気じゃないと言う事が分かつていてのかも知れない。僕も健も沈黙しながら互いに歩み寄ってきた。お互が殴れる範囲まで来ると同時に歩をとめた。

「・・・・・覚悟・・・・できるか？」

僕は試すように聞いた。それに対して健は、「なんだ？自分にそう言つてんのか？」

挑発するように言つた。この会話だけで僕は、（コイツはもう迷つてないな。）と確信した。

「死ね」

僕と健がそう言つたと同時に僕らは顔面に右のストレートを打つてきた。パンチを撃つたと同時に僕は左に、健は右（僕から見て）に顔を逸らした。そうすると、僕らは後ろに退いて距離をとつた。まともにヒットしていなければ、お互い右ほほにかすり傷ができてきただ。

「やるねえ。何でそんなに強いの？」

僕はそう質問した。健は少し笑つて、

「昔、一応空手をしていたからね。」

と自慢するように言つた。その様子を見て僕も少し笑い、

「偶然だな。俺もその類の部活をしている。」

と言つた。僕らがそこまで言つと、会話は途切れ、戦いが再開された。

僕は前に踏み込み腹を打とうと右のパンチを放とうとしたら、健のパンチがすでに来ていた。

（やば。よけられねえ！）

そう思つた僕は額の先パンチを受けた。そして僕はすかさずパンチを出した。そうすると、健は膝蹴りを放つた。僕はとっさにその足を殴つて、膝蹴りを上手く回避させた。

「うつ！」

健は膝を殴られてひるんだ。僕はその隙に左で腹を三回殴り、動けなくなつた瞬間、僕は思いつ切り右ストレートを顔面にヒットさせた。すると、健はぶつ飛んで、そのまま倒れてた。少し様子を見てみたが、あまり動かなかつた。

「俺の・・勝ちだな。」

僕は少し息を切らして、戻ろうとする後ろから、

「・・おい・・・待てよ・・」

健の声が聞こえた。僕が振り向いた瞬間、何かが目に入った。それはザラザラしていたから、すぐに砂だとわかつた。

「てめ・・・」

目を開けて反撃をしようとしたら健のハイキックが僕の頭にまともにヒットした。ぐらついた瞬間、県の猛攻が始まった。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ」

四方八方からどんどんくるパンチとキックを全てよけきれず、ヒットした。そして、

「オラア！」

とどめに前蹴りをして、僕は吹っ飛んだ。今度は健が僕を見下ろしていた。その様子を見た明彦と孝之は「か・・・甲斐！」

信じられないものを見たように、二人は戸惑っていた。すると、「おい、立てよ。ハンデしたまま僕に負けるのか！？」

健は少し怒つたように聞いてきた。此処にいる皆は気付いていなか

つたらしい。

僕は平然と立ち上がった。そして、不思議そうに聞いた。

「まだ蹴りを出しきれないんだろ？早く本気出せよー。」

健は本気で怒っていた。皆は僕がまだ本気を出していなかつたことに今氣付いたようだつた。

「・・・分かったよ。けど、後悔すんなよ。本気出すと加減がわか
んなー。」

僕は忠告するよ、と云つた。

不登校生徒を連れ戻せ！――――――その6（前書き）

言い訳をせて。俺に無いのはネタじゃなくて、時間なんだ。だから書く機会無いんです。許して。

不登校生徒を連れ戻せ！！！！！！～その6

僕は口にたまつた血をブツ、と吐き出し、

「お前は俺に勝てない。その要因は3つある。

自信たっぷりにそう宣言した。僕は続けて、

「1つ。今言ったように俺は加減をすることが苦手なんだ。」

そういうつた直後、僕は思い切り地面を蹴って、瞬時に健の懷に入つていつた。そして、右の拳で健のわき腹を全力で殴つた。ドン。

鈍い音が辺りに響いた。そして健は、殴られたわき腹を苦しむようにおさえていた。その隙に僕は顔面へハイキックをしようとした。するとそれに気づいた健は、腕を顔の横にかまえ、防御の体勢をとつた。けど、僕にはそれが読めていた。僕の放つたハイキックは健の頭上を通りていつた。僕はすかさず、左の拳で顔を殴つた。健は吹つ飛んだ。健が倒れると、

「2つめ。俺に蹴りを使わせた事。実際に使つたり、フェイントに使つたりできるからな。」

僕はそういうと、即座にジャンプして健を踏み潰そうとした。健は横に転がり僕のジャンプ攻撃を回避した。そしてすぐに立ち上がりうとした。すると、健の顔の前には僕の履いている靴がすごい勢いで迫つてくるように見えた。健はそれによけきれなかつた。

ベキッ！

さつきのパンチに比べると、今のほうが危なそうな音が出てきた。モロに顔に入つたからしあうがない事だ。

今、オレの目の前にすごい事が次々と起つていった。

甲斐と健のダウンの応酬、血みどろの殴り合い、このケンカを見て組長の部下が怒つては孝之に八つ当たりしているなど、普段まったく目にならないものを今日はいろいろ目にした。そして今、互いの攻

撃が当たる打ち合いとなっていた。確かに打ち合いだが、徐々に甲斐が優勢になつていて、気がついた。そんな状況になり始めたとき、部下の一人が我慢の限界に達していたらしい。突然、「組長！あのヤロウの頭、ハジかせてください！！」

そういうて、懐から銃を取ろうとしていた。今の彼は、組長の息子が殴られている事にひどく苛立つているらしい。部下がそう言つと、組長は黙つてジロツ、と睨んだ。そんな組長にお構いなしに、「ブツ殺してやる！！」

銃を出して甲斐に狙いを定めた。殺そうとしている部下を止めるため、オレが駆け寄ろうとして瞬間、

「やめんか！」

組長の怒つた声が庭中に響いた。（戦つている甲斐達は気づいていないようだ。）組長は部下に歩み寄ると、本気で殴りだした。今のパンチは、あの一人のより、ずっと強そうだった。

「わかつてないなあ。この勝負、止める必要はないぞ。」

組長は恐ろしい声で言つた。部下は不思議に思い、「な、何ですか。健さんも危ないというのに・・・・」と聞いた。組長は少し落ち着いて言つた。

「・・・なあ、健の顔を見てみろよ。」

オレ達は健の顔を見た。・・・・じつくり見てみると、戦う前の顔は冷めた表情をしていたが、それが今、

絶対に負けん。

と言つような、前とは打つて変わつて負けん気な表情になつていた。

「・・・・あんな顔、はじめて見た。」

オレが思わず言つと、組長は、感心して、

「そ。私も最近、健のあんな表情をしているのを久しぶりに見たんだ。だから、止めないんだ。」

こう言つた。冷静に考えてみると、甲斐が健にケンカを誘つても、全く動じなかつたのはこの人一人だった事を思い出した。もしかしてこの人は、健がこんな風に変わつてくる事を読めたのだろうか。

そんな事を思いながら、俺はまた、戦っている甲斐達に目を移した。

ドサッ

健はまたしても吹っ飛んだ。健は身体中がふるえ、大きく肩で息をしながら、ゆっくり立ち上がった。

「3つめ。これは決定的だな。」

僕はふらふらした健に近づきながら、最後の説明をした。

「スタミナだ。学校で遊んだり部活している俺と、部屋にこもりつきりのお前じや、体力差はぜんぜん違う。だから、長期戦になれば、こっちが確実に勝てるぜ。」

僕は余裕の口調で少しづつ近づいてきた。焦った健は、とっさに右の正拳を突き出した。しかし、この正拳には以前のようなキレも速さも無くなり、

へ口へ口になっていた。見て悲しくなりそうなほど弱いパンチを手で軽く受け、僕は止めを刺すためパンチの弱を降らせた。

「無駄無駄無駄無駄！無駄無駄無駄！」

最後の一撃を放つと、健の身体は空を飛んだように、宙に浮いた。

不登校生徒を連れ戻せ！…………～その7

ドサツ

宙に浮いていた健の体が、地面に落ちてきた。立ち上がりつつあるが、もう動けないらしく、立つことに必死になつていた。

「どうした？ リタイアか？」

僕はそう問いかげた。健は立ち上がりれずには、

「・・・・・ギブアップだ・・・」

と小さく言つた。勝負の結果を知つた僕はあまりの疲労に後ろに倒れ込んだ。僕は何度か深呼吸すると、ひとつ質問してみた。

「悔しいか？」

「当然だろ。」

当然の反応だが、健は本気で悔しそうだ。とこりよつ、ほととぎキレている状態だった。

「部屋にこもつてゐる時にそんな風に思つたことがあるか？」

「・・・・ないな。」

ちよつと会話すると、僕はあることを思い出した。

「じゃ、約束どおり、学校に来てもらいますか。」

そう言つと健は、

「やつぱり、僕は学校に行かない。」

と言ひ出した。約束を破ろうとしていることに対して僕は少し怒つた。

「・・・・なんでだよ。」

「学校に来たところで、みんな僕の事なんか覚えていないし、心配をしていたヤツなんて誰もいないよ。」

健がかなしい事言つから、いつちもかなしくなつてきたな・・・それでも僕は、説得を続けた。

「・・・まあ、心配していたヤツは多分いないと思うな。」

この部分だけを聞けば、僕は血も涙もない鬼のような発言をしてい

るみたい・・・

「けど、お前が学校に来ないと、俺が悲しくなるな。」

「僕がそう言つと、健はただ黙つていた。」

「・・・・・いや、正確には俺達かな・・・・・」

と言つと、この戦いを見ていた明彦と孝之が駆け寄つてきた。

「おい、大丈夫か？」

そう言つと、一人は、僕らをゆつくり立ち上がりさせた。

「まったく、ヒヤヒヤさせやがつて、お前が倒れた時はめっちゃ驚いたぜ。」

明彦が妙な大声で僕に感想を言つた。・・・・・うるさいな。僕にそう言つと、次は健に顔を向けた。

「いやあ、変な話だが、お前みたいなすごいヤツがいるとは知らなかつたな。ちゃんと学校にこれば結構目立つと思うぜ。」

明彦が素直な感想を健に言つた。そして、

「今からお前の友達第一号は俺達と言つことで、ヨロシク。」

そういうて、握手をしようと手を差し出すと、健は後ろを向いて震えだした。それでも、明彦はそれでも手を引かなかつた。僕は明彦を呼んで、

（感激してゐるんだよ。ちょっと空氣読めよ。）

と小声で伝えた。今何か言つのもおかしいから、

「じゃ、学校で待つてるぜ。」

そういう残して、僕らは帰宅することにした。

翌日、

「勝負！」

僕らは、朝からポーカーに熱中していた。

「見よ、愚民よ。10の4カードだ！」

明彦は自慢げにそう言つと、僕はそれに対抗して、

「なんの！こつちは10と12（クイーン）のフルハウス！」

そういうたら、孝之はだんまりしていた。

卷之三

僕がそれを書いたと、孝之は僕のくらがードを出した。

思わず絶句した。孝之はアタ（なにもそろってない）だ。だから……

卷之三

卷之三

ガラツ 明彦は本気で哀れんだ。微妙な空氣が流れた瞬間

と教室のドアが開いた。そこにいたのはボロボロになつた（人のことは言えないが）健の姿があつた。

— よ
けんき
か?」

「おかげさまです。」
「僕が普通の挨拶をすると、健は笑顔で、

一〇〇

と笑顔で言った。その時の笑顔はヤクザの息子といふ雰囲気にはまるで見当たらず、ただの中学生津嘉山健の笑顔だった。

用語を翻訳するには、翻訳の範囲を明確に定め、翻訳の基準を明確に定め、翻訳の過程で問題となる用語を抽出して、その用語を翻訳する。

「・・・・ポーカーか、久し振りだな。」

「七十四へらぶーど。」
と書いて席に着いた。やがてすると

と孝之が勧誘した。健ははつきりと、

一
イ
ヤ
た
レ

と言われた。ポーカーとは言え、遊んでいる健の姿は楽しそうだった。なぜかは知らないが、その様子を見ていたら、僕らまで楽しく乗ってきた。

カードを引いたび、うれしそうである。そして、この楽しそうな健
が勝負ののろしをあげた。まるで子供みたいだった。

一勝負！！

おぬすのボボ画図（福井県）

たまにせいろのむこうかなと題して書いてみました。

ある日の北斗団

「おー、例のブツは準備出来るんだろうな?」

「ああ、完璧だ。お前はどうだ?」

「こっちも完璧だ。」

僕たちがなぜ、このような会話をしているかおかしいと思うだろ? だから、最初から説明したいと思つ。

「あーあ、ヤミナベの大会をしたいな・・・」

明彦のこの一言から始まつた。この唐突な言葉に僕は、

「なんでやねん」

と思わずツッコんだ。明彦がその言葉を言つたせいで、『ヤミナベ大会』をしたくなつてしまつた。

「いや・・・ヒマだし・・・な」

明彦が促すと、僕は何も言わず親指を立てた。

「お前、ひづだ。するかね。」

少しテンションの上がつた僕は変な口調で孝と後に問いかげた。俊は、

「ヒマだし、OKだな。」

淡々と言つた。そして、孝とも、

「じゃ、おれも。」

と参加してきた。お前ら、ノれるぜ。

「よーし、これで全員そろつたし、今日するかー。」

「・・・・・・へ?」

これは想定外だ。

そして下校、

「ヤミナベだから、食材は何でもアリで。そういう事でいいか?」

「当然。」

それが普通だろと言わんばかりに自信満々に答えた。

「1時間後、家庭科室に食材を持って、集合だ。何か質問は？」

明彦が久し振りにリーダーの顔になつた。

「なしあ」

僕らがそう言うと、

「それじゃ、ヨーロッパ・ドン・」

明彦は威勢良く、言った。明彦が最寄のスーパーへと駆け込んでいった。僕らも違う店へ移動し、ありとあらゆる食材、調味料、ジュース、週刊少年ジャンプなどを買い込んでいった。

そして1時間後、

（1番最初の場面に戻つて）と言つ余話をしていたわけである。理解できたら嬉しい。

・・・それじゃ、はじめます・・・」

明彦がやや小声で言うと、僕らはカーテンを閉め、ドアの鍵も閉め、

「大會って言つてるナビ、ルールつてあるのか？」

孝之が一人で準備しながら、質問した。聞かれた明彦は下をうつむ

「ダメじゃん

田原川の言葉を元氣が言つた。

「ルールは、いたつてメチャ簡単。このナベを一人ずつ食べて、『まずい』とか『あつい』とかのリアクションは一切とらない。といついいリアクションは『うまし！』と『ブランボー！おお！ブランボー！』の二つだけだ。何か質問は？」

僕は手を上げた。

「『ラブ・ラボ』って、あんた、そのセリフ結構有名だと思つから、あんまり言わないう方がいいと思うが・・・」

「・・・・・ 多分バレないから、大丈夫だ・・・ぜ」

「またパクリやがったな。」

これ以上マンガの話をしていたら、じつちが危ないから話を本題に戻す。

10分後、
ナベがいい感じにグツグツと音を出していた。匂いは・・・・・き
ちゅい。

「一番手、孝之。」

僕はえらそうに指示した。孝之は震える手で、箸をつかむと、何の躊躇もなく口に放り込んだ。すると、

「ウエツツ、ゴホゴホ、オゲツ」

暗闇の中、僕らは厳しい現実を目の当たりにした。

ウト 残り3名 食べたもの プリン（醤油味）

次は俊が自ら手を上げ、なべの前に来た。ヤル気のないネコ、ほぼ将来は二ートだろうと言われた俊が自ら困難に立ち向かうと・・・・・

・僕はこの俊に始めて敬意を払った。だが、それもつかの間、

「ゲツ！ マッズツ！ ！ ！」

俊はトイレへ向かった。 俊 アウト 残り2名 食べたも

の バスタオル

残るは僕と明彦になつてしまつた。明彦は自分から行かないし、僕も動きはなかつた。と言つことで、僕はある提案を持ちかけた。

「明彦、俺たちはサンドイッチで、一緒に食べよう。それで反応したヤツが負けるどうだ。」

「いいだろう」「う

よし。あとは僕がミスをしなければ・・・・・僕は箸をつかんでナベに手を伸ばした。てきとうにつかむと何か、硬いものをつかんだような感覚になつた。僕はこれを生の食材だと判断した。

「せーの、でいくぞ。・・・・・せーの！」

パクッ、となるはずの物が、ガチッとなつたのだ。僕は、この硬いものがなにか、すぐに認識できた。

・・・・・鉄板じゃん・・・・・

しかも熱いなべに入つていたから、以上に熱していた。我慢できつこなかつた。

・・・・お前もかよ・・・・

甲斐 明彦 アウト 食べたもの アツアツの鉄板（甲斐）
原形がほとんど残つてない週刊少年ジャンプ（明彦）

大会成績

全選手 1回戦敗退

「えへ、みんなの衆、今日は実に良い日だ。」

明彦が突然貴族のような口調で僕らに話しかけてきた。

「別に普通だる。」

「何言つてんだよ。オレたちは今日からひとつ大人になつたつついうのに・・・」

えらそつこしゃべつていたと思つたら、今度はすゞしご落ち込んだ。どうしたんだ、こいつ?

「まあ、たしかにそつだよね。」

孝之が隣からしゃべつてきた。

「おれたちつて今日から3年じやん。普通喜ぶよね。」

孝之が不思議そうに僕に問いかけた。僕は

「メンバーがメンバーだから、進級したなんて実感が湧かないんだよね。」

「・・・・・たしかに」

僕が進級しても普通にいた理由をいつと孝之は納得していた。

「よし、今日は3年になつての初会議をしようじやないか。」

「お、おつ。」

いきなり言つもんだから、おもわず「つと」とか言つちやつたじやねーか。

「さて今日の議題は俊、決めてくれ。」

「なぜおれ?」

「いいから、早くしや。」

俊は少し考え込むと、

「・・・じや、3年生になつたら、何をするか、つといつのは?」「とベタな案を考えた。(会議のテーマになつてねえ・・・・)議題は何でも良かったのか、

「じや、それで」

団長が鼻をほじりながらテキトーに答えた。

「発表の順番は、あいつえお順で。…………つてオレかよ！」

変なネタをして、明彦はまじめに発表し始めた。

「3年生になつて頑張りたいことは、彼女をつくりたいです。そして、我が北斗軍団の活動を今まで以上に頑張りたいと思つ。」

珍しくカツコいこと言いやがつて……活動を今まで以上つてこれ以上何を頑張るんだ、一体……

「次、甲斐だぜ。」

明彦が指を刺していった。

「3年生になつて頑張りたいことは、…………いろいろ頑張る。」

「出たぜ。超普通の考え方。普普。」

・・・・・なぐりてえ・・・・・思いつきり殴りてえ・・・・・

「おい俊、とつとといえ」

少し起こつた僕は俊にすぐさま話題を降つた。

「3年生になつて頑張りたいことは、彼女を創ること。」

え？？彼女を『造る』？？漢字がおかしいだろ。ビリみても。・・・

・・・ていうか根本的にこいつが彼女つて・・・・

「おい、ミーちゃんじやん。やつたな、おい。」

孝之め、禁句を言いやがつた・・・・・

「ダアレが、とつてもかわいらしい彼女の正体はミーちゃんだんだ」

あ――――――

俊が孝之に飛び掛ると、ニヤン、ニヤンといなながら、マウントボジショーンを取つて殴つていた。もし僕らが止めていなかつたら警察沙汰になつていたかも・・・・・

「気を取り直して、最後、孝之。」

そういわれると、孝之は立ち上がり、発表を始めた。

「3年生になつ・・・・・」

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

「あ、チャイムだ。じゃ、今日の会議はこれにて終了とこい」とド。

明彦が席に戻ると、条件反射で僕らも席に戻つた。ただ、重要なことを言いそびれた一人の男を除いては。

「・・・・・許されるのか？・・・・・こんな・・・オチ・・・・」

孝之が小声で言った。

北斗×ソラオ～前哨戦？（前書き）

一応新章です。見てやつてください。

北斗 VS 南斗、前哨戦？

僕は自分の場所の靴箱とにらめっこしていた。その理由は、差出人の名がない手紙がひとつ入っていたからである。その様子を見ていた明彦は、

「お、新学期と一緒にお前に春が来たのか？」
と、いたずらをするように話しかけてきた。

「つーかよ、これ何？」

僕は靴箱から手紙を取り出して、明彦の目の前に見せた。それをじっくり見ていると、結論が出た。

「わかった！ 恋文だな、これ。」

「コイブミ？」

「ラブレターのこと。」

あまり聞かない言葉が出てきてだいぶ焦つたが、意味が分かると何の対したこともなかつた。つまりこの手紙の内容は『甲斐君が好きです』って言うことだろ・・・・・・へつ？ 何で僕なんだろ？ 不思議に思つていたら、持つていた手紙を奪われた。

「じゃ、最初に読むぜ。」

「どうぞ。」

内容がどうであれ、僕は最初からこの手紙を隣にいる明彦にあげるつもりだつた。手間が省けたな。

「あれ？」

黙つて読んでいた明彦が突然驚きの声を出した。恋文じゃないのか？

「少し読むぜ」

手紙を取り返すと、僕は小声で文章を読み始めた。

北斗軍団団長へ

田じろ君たちの行動があまりに派手なおかげで我々『南斗軍団』がまったく目立ちやしない。よつて、一方的ながら君らを処刑する

ことに決定した。ということで、今週の土曜日の正牛に、体育館にて殺す。マジで殺す。ルールなどの説明は当田するのであしからず。

「南斗軍団？ 処刑？（多分処刑だらう） ルール？ こいつら何がしたいんだろ？」

「本島に謎だな。しかも所々幹事間違っていると云つて云ふのがバカだ。」

「お前もだろ。」

団長へつて書いてあるのに僕のところへくるつて言つてのりも変な話だな。

「で、どうするよ、団長」
なめられちゃつてるよ、どうする？ そつこつよつと僕は明彦に聞いてみた。ま、答えは分かつていてるけどね。

「殺すしかないだらう、このパクリ集団は。」
確かにパクリだな。ほとんど。

『処刑』当田、

あちらが時間どおりに來てるのに対して、僕らは20分の遅刻をしよつと予定していた。その理由は、敵の戦力分析と、誰か知り合はないのかなというのをさがすためである。孝之は遠くから双眼鏡であちらのメンバーを見ていた。

「おい、大体知ってるやつがいるぞ。」

孝之が言つと、

「誰だ」

と言いながら、双眼鏡を奪い取り覗き込んだ。少し見渡すと、

「ホントだ。」

と後の反応。今度は僕が双眼鏡を覗き込んだ。そこにいたのは、全員僕らの同級生で、ちゃんと4人いた。名前を挙げていくと、三神藍里と、伊鯨瞬と、伊芸良、そして見た感じがリーダーっていう感じの人がいた。

「誰だ、アレ？」

明彦が双眼鏡をのぞいて聞いてきた。が、誰も答えられなかつた。どうやらみんなはじめて見るらしい。

「実際あつてみないとわかんないし、行つてみようぜ。」

とりあえず、僕は指揮をとつた。僕たち4人は戦場に向かう兵士の

ように黙つて目的地に向かつていつた。

北斗～S座斗～ 戦の前の闘会式（前書き）

約一ヶ月ぶり！！

んなワケでいっぱい書いてみるんで頑張ります。

北斗VS南斗～戦の前の開会式

「待たせたな」

僕らは余裕ありげな表情で遅刻してきた。

「待たせやがつて！30分近く待つてたぞ。」

相手全員が勢いよく飛び出してきた。僕の気分としては、『小次郎、敗れたり！』と、いいたい気分だが、状況が状況だから言えるはずがなかつた。よくあんなこと言えたな、武藏。

「ところで、そいつは誰？」

孝之が、南斗軍団の中で唯一見かけない女子を指差して聞いた。

「この人？この軍団のリーダーをして・・・」

「はあ、恋がしたいな・・・」

良が話してる途中でリーダーはため息をつくと、小声でそう言った。ていうか、何いってんだこいつ？

僕らは今の発言を聞かなかつたことにして、話を進めた。

「琴瀬愛子ことせあいこだ。ちょっと変わってるけど、うちのリーダーだ。」

ここから小声。本人に聞こえない程度の。

（ちなみに彼女、自らを『恋愛ジヤンキー』と読んでるんだ。）明彦は『What？』というよつつな表情をしていた。僕らもそれをじっくり聞いていた。

（それって意味は？）

（・・まあ）

「何こそこそしてるの？」

愛子が突然話に割り込んできた。これには皆ビビッたらしく仲には、ウワツ！と声を上げる奴もいた。不思議なことにびっくりしたら、話の本題を思い出した。

「そういえば、俺たちをどう『処刑』するつもりだ？」

僕がそういうと、和んでいた空気がいきなり冷たくなつたのがよくわかつた。言わなきやよかつたな。

そう思つた時だつた。

「ああ、そう言えればそうだな。」

「軽。つーか、忘れてたのかよ。これにはさすがに皆驚いていた。

「心配するな。こっちが一方的に処刑してもつまらない。そこでだ。

お互い勝負をする方が面白いだろ?」

内容的には納得できるのだが、僕らは一方的にいじめられるわけはないのだが、まあ、いいか。これはこれで好都合になつたし。そんなことを思つてたら、話は瞬から愛子へと変わつていた。

「どう勝負するかといふと、これを使うの。」

愛子がポケットから出したものはただの赤い風船だつた。中に水が入つてゐる、ということ以外は。

「水風船?」

俊は拍子抜けだつたらしく、ばかばかしそうに尋ねた。だが、愛子にとつては待つていたような質問だつた。

「いえ、ただの水風船じゃないんだよね。これが。」

そういうと、愛子は近くにある大きな木に目掛けて水風船を投げつけた。水風船が当たると、風船は破裂した。そして中からは黄色い水が弾けたのが分かつた。

「南斗特製の『絵具水風船』、これを投げ合つて最後に生き残つた方が勝ち。どう?」

何事もなかつたかのような笑顔で僕らに聞いてきた。当然僕らは、「ふざけんな! 服が汚くなるだろ!」

とかいろいろクレームをつけると、あちら側も、

「そうだよ! つーかこれ、処刑じゃなくて、もはやゲームじやん! あと、南斗特製つて、俺らしらねーよ。それ明らか『愛子特製』じゃねーか!」

よく分からぬが、内紛が始まつてゐた。なぜかは知らないけど、こいつらにかなり同情してゐる、僕は。

「さあ、とりあえず始めるよ。異存はある?」

愛子が無理矢理言つと、横から藍里が何か耳打ちしてゐた。何かい

やな予感・・・愛子が何かうなづくと、今聞いたことを僕に告げた。

「・・・。体育館はここじゃあいませんね・・・」

目前にある古びた施設を指差していった。まあ、僕はこの体育館に言つたことないから知らなかつたけど。僕はめんどくくなつて、

「もうここでやる。それが一番だ。」

「それもそうね。」

即答？考える気ぜ口かよ。

「じゃ、ここでしますか」

そんな感じで『開会式』は終了した。

北斗×ソウルゲーブ開始（前編）

てこりかせついたら20話だよ。
多分すこよね？
・・・まあどうでもいいか。

「質問だけど」

「はい、なんでしょう。」

始めようとしたその瞬間に孝之が手を上げた。高ぶっていたやる気が下がつていつた。後で敵より早く殺してやる。

「なんだよ、もう問題はないだろ。」

少し苛立つた声で瞬が話を進めようとしたが、孝之は無視をしてこう聞いた。

「おれ達の水風船は？」

あ。確かに。冷静に考えてみたら、水風船を持っているのは愛子1人だつた。前言撤回だな。

「あ、配るの忘れてた。」

配る？どういうこと？

「全員分作つてあるんだ。1人5個までもつてね。」

持つていた袋から大量の絵具水風船が入つていた。スッゴイ用意周到だな。この人・・・

「じゃ、5分ごとに1人ずつ入つて全員が入つて10分後にゲームスタート、てことで」

「よしわかった。ということは1時だな。」

そう言つうと、最初に入つたのは明彦だつた。そして5分ごとに俊、僕、孝之と全員が入つていつた。入り口に入り少しまつすぐ進むと、明彦たちが待つていた。多分、まず全員集合、ということか。

「何か策もあるのか。」

「ああ、こいつ等にあたりを探検させて、いろんなものが見つかつた。例えば・・・」

「まどろつこしい事は置いといて、早くお前の策を聞かせてくれよ。」

そう聞かれると、明彦は不敵に少し笑つたのが分かつた。明彦がこ

うこう笑い方をすると、本当に凄い事を考へてゐる証拠だ。

「いいか。一度しか言わないぞ。」

僕らは顔を近づけて、静かに策を聞いていた。

「なるほど。確かにすごいな、これは」

「明彦すげーな。」

「ふ、やるじやねーか。」

これほど絶賛される作戦は初めてだつた。実行するにしてもタイミングをはずせば終わりだと思つしいと思つ。けど・・・
「これ序盤じゃできないのか?」

僕がそう聞くと、明彦は冷静に答えた。

「確実に成功するには、人数の少ない時、大体1、2人としたほうがいい。やるなら中盤だ。」

なるほど。実に適切な返答だ。普段からこういう奴だつたら、非の打ち所がない男なのだが。

「実行時間はどうする。」

今度は俊が質問した。確かにこれも重要なだな。

「ゲームが始まつて30分後、1時30分に実行に移せ、OK?」

「ラジャー。」

一応この施設の面積的に考えてみると、30分後にはたしかに1、2人はたおしてそうな時間だつた。ホント、意外に賢いんだよな。「悟られないように、あの部屋だけは行くなよ。わかつたか?」

「OK」「OK」

僕らにもう質問もないし、問題もなかつた。

「みんな、死ぬなよ。」

そして、僕らは四方に散つていつた。

午後1時 ゲームスタート

解散して10分後、1時10分

「案外会わないもんだな。」

俺はそう言いながら、あたりを見渡しながらちゃんと注意していた。はつきり言つと、俺がついわざと考へた作戦に不安していた。なぜなら、作戦を実行に移す前にこの軍団が全滅ということもありえるかもしないし時間になつたとしても相手が誰もたおされてない状況だったらおさら都合が悪い。ましては、相手も人間だ。相手もそれなりの策を持つてこっちに来るかもしれない。いや、必ず持つてくる。その策がこちらの策を上回つているとしたら……

ガタン

考え事をしながら歩いた俺はかなり驚いた。といつても、敵襲に遭うよりましか……今のは空耳だと思うようにしようと思ったがそれが目の前のロッカーから出でているから、そう思ひようが全くなかつた。俺は、自分の放つ音や声を全て消してあのロッカーへ恐る恐る近づいていった。

これは罠かもしれない。

そう思つて歩を止めようとしたが、どうせなら刺し違えてやる。と覚悟を決めると、自然に足を動かせた。それに、俺が殺られても、アイツラならやつてくれるだろうというような奇妙な安心感があつた。すでにロッカーの目の前に俺は立つていた。俺はどうでもいいことを考へるのをやめて、ロッカーの戸に手を置いた。

北斗へシ座オヘ留意ヘシ藍田（繪書モ）

いつぱい書くつて言つたのに2話で終了。
すげーふがいないや。。。

小橋川明彦こばし川 あきひこいわゆる一般人に近くルックスは軍団の中で一番。しかし、それに比例して頭が弱いという欠点がある。バカではあるが、状況によってはとんでもない賢さを發揮する。本人は学校1のモテ男といつてると、本当に縁がないのが哀れ。

俺はロッカーの戸に手をかけると、勢いよく開けた。

「ん？」

中には人影のようなものなどなく、はいつていたほうきが倒れてきた。てことはだ。さつきの音は、このほうきが倒れて出たといふことか。

「つたく、脅かしやがって。」

この瞬間に搔いてしまった大量の汗をポケットに入っていたハンカチで拭いた。そして同時に思った。このロッカーの音はだいぶ大きかった。こつして俺が来たつてことは、だ。俺はすぐさまあたりを見渡した。上を見渡した時だつた。上の階から、あの小さい女、名前は確か藍里だつけ・・・そんなことを思つていたら、藍里は無言で風船を落としてきた。

「うお！」

俺は全力で前へ飛び込んだ。そして風船はそのまま、床に落ちて紫の水がバシャッと爆発した。

「あの野郎・・・」

奴を倒すという気持ちが前に出て、俺は少し離れた階段へ走つていった。その間にも爆弾は上から降つてきていた。藍里が3つ目の爆弾（逃げながら弾数を数えていた）を投下して、4つ目を投げようと顔を出した瞬間、俺はようやく1つ目を投げた。

「わっ！」

もう少しで当たりそうだったのだが、とさに藍里は顔を下げてし

まっていた。はつきり言つと今のは別に当たらなくても良かつた。今は、階段を昇るための時間稼ぎのためだけに投げたのだ。俺の思惑どうりだつた。あの1発で藍里は中々顔をだそとはしなかつた。俺はこの好きに階段を昇つていつた。もちろん、身をかがめながら。俺は顔を少し上げて、チラッと藍里の様子をうかがつた。藍里は下の方、階段近くを何かを探しているようにあちこち見ていて、どうやら隠れていることに気付いていないらしい。

「ふう・・・これでよし。」

一応安全を確保して俺は一安心した。俺はゆっくり息を整えながら、階段を音一つ立てないよう注意して昇つていつた。そして藍里のいる階にたどり着いた。階段を昇ると、前、右、左と通路あつた。左の通路には藍里がいる。前はトイレとその向かいに部屋が1つ、でロッカー、右は・・・暗くて分からなかつた。

(さて、どうするか)

ここにきてまた作戦を考えることになるとは・・・
「・・・・うし、かんがえた。目に物見せてやるぜ。」

いつたい何処に行つたのだろう。

この絵具水風船を投げようとしたら、相手がもう投げていたから避けて、体勢を整えてから探しみると下には誰もいなかつた。逃げたのかとも思つたが分からぬし、階段のほうも見たが人がいるという感じはしなかつた。

「・・・やだな・・怖い」

私はこれに乗り気はなかつたけど愛子さんが楽しくやるつといつたからやつてみた。なのに、場所を間違えた挙句、こんな事するなんて・・・

ガタン　　ガタン

ビクッとした。今度は何なの?さつきの人の仕業だとしたら・・・けど、何処に行つたのか分からぬ。てことは、そのまま逃げたのでは? そう思いながら私は先の見えない通路へゆっくり歩き出した。

先に行つてみると、いける道は真つ暗な前の道と、右の階段、左のいたつて普通の通路があつた。ロッカーは左にあることを確かめた。私は周りに気を配りながら、ロッカーへと近づいていった。恐る恐る戸に手をかけゆっくり開けてみた。中を覗いてみると、何もない空っぽだった。

「え？」

私は冷静に考えてみた。じゃ、さつきの音はいつたい……。

フニャアーオ

私はまたビクツとした。振り返ると猫が後ろの男子トイレから忙しそうに走つていった。そして猫は向かいの部屋に入つていった。私はこの状況を猫は何かを見てトイレから逃げた、と確信をもち、トイレへと入つていった。トイレに入つて最初に調べたものは、個室、みんなが言う便器の部屋を調べようとした時だつた。最初のドアに鍵がかかっていた。

「・・・なるほど」

つまりここに隠れているわけね。中学3年にもなつてトイレつむしろすい」と思った。ドアをよじ登り中にいる男を倒そうと風船を投げようとした瞬間、中を覗くと誰もいなかつた。

「へ？」

私が驚いていると、後ろから、
ビシャッ

と、背中に風船が炸裂したのが分かつた。びしょ濡れになつた背中よりもなぜか飛んできた風船に驚いた私は振り返ると、あの北斗軍団のリーダー、明彦がそこにいた。驚きのあまりに何もいえなかつた私に彼は指を刺しながら意味のよく分からぬことを言い出した。

「何が起こつたかよく分かつてないらしいな。なら説明してやるよ。次の話でな。」

北ナウル座オーラーダーと真剣勝負（前書き）

あくまで、リーダーと真剣勝負する、ところの意味ではない。

つまり、『いつこう』こと。

藍里が下を見て俺を探している隙に、足音を殺してまっすぐ進んだ。さすがの俺もかなりの緊張感があつたサ。で、落ち着いた後で俺はロッカーを叩いた。『いつこう』緊迫した状況の中で、突然、近くで大きな物音がすれば一応見に行くだろう。先程のロッカーの音で近づいた俺みたいに。そして、近くのトイレに入つて、便器の部屋にこもろうとした。けど、ここで想定外の展開が起つた。それは、『部屋』の入り口を開けた瞬間、

フニャー

と、慌てたよつて『部屋』から出て行つた。声が出そうになるのを両手で押された。最初、確実にトイレにいることがばれたから、やばい！と思つたが、ここで、あの策が浮かんだ。

ここで倒してしまおひ。

とこりうりと、俺は『部屋』に入り口の鍵を閉めた。そして、この部屋をよじ登つて隣の部屋へ移動した。つまり、藍里がかぎのしまつた部屋にひつかかり驚いてる隙にビシヤツツといぐ。単純に見えるがこりうりの状況だから引っかかる策なんだ。

「と、いつこうと。」

我ながら話が長すぎてだんだん何言つてこのか分からなくなつてきていたが、うまくまとめきれいでたらしい。藍里が残念そうに、『・・・・・まいつたな・・・』

と小声で言つたのが聞こえた。とりあえず俺は、

「とりあえず、お前は負けたし最初に会つた入り口に戻れ。」

これでも俺は紳士を目指しているから、それらしい口調で言つた。しかし、意外なことに、

「・・・怖いから一緒に行いつ。」

とこう藍里のほんの少しだけ怯えている表情で、そう言つてきた。

言われてみたらこの場所は平均的に暗いから怖いのも無理ないかも。

「・・おひ」

むしろいぢりの方が紳士っぽいな。ていうか、女子と歩くつて全然なかつたな。そりいえば。そんなことを考えながら、トイレを出した瞬間、

「こまです。愛子さん！」

そう言いながら、後ろから藍里に突き飛ばされたのが分かつた。突然すぎて理解できないまま、周りを見渡した瞬間、赤い球形が俺の顔にめがけて飛んできたのが確認できた。映画で言つなら、なにかのキャラが死ぬ寸前によく使いそうな言葉を最後に言い放つことを鮮明に覚えている。

「・・・ノー・・・ノー・・・・」

ビシャッ あわびゅ

「ん？」

今、明彦の変な声が聞こえた気がような・・なわけないか。

「それにしても、あいつら、大丈夫かな。」

自分のことを中心したいところだけど、実際、あいつらのほうが心配だ。まあ、甲斐はぜんぜん大丈夫で、明彦は微妙だけど、何とかなるだろ?と思うが、問題は孝之だ。あいつ、見事に運がないし。ま、オレも猫つて言われている時点での、心配されてるんだろうな。

・・・・・ん?

だれがネコだと?

そんな風に一人でキレていたら、

「よう、俊」

近くの扉が開くと中から伊鶴瞬いづか しゅんが出てきた。

「今日こそ、決着をつけようじゃないか。」

「・・・なんの?」

実際心当たりがない。瞬が急に言つたことだ。本当のことを言つたのに、

「とほけるなよ。じつちが最強の『シュン』か、白黒つけようじやないか」

何のことかさっぱり分からんが、売られたケンカは買うしかないのがオレのポリシーだ。とにかくやるしかなさそうだ。

「いくぞ。」

声が重なつたと思つたら、オレらは、同じタイミングで風船を投げていた。

ビシャツ

水風船の炸裂した音が響いた。

北斗～S南斗～合流と不運の男（前書き）

まち久々 ！
いつぱいよんじつヒーリング。

北斗／Ｓ／南斗／合流と不運の男

瞬が投げ込んできた風船はオレの頬をかすめて、遠くの後方で炸裂したのが分かつた。確かに俺も投げたが、当たつたかどうかは分からなかつた。

「チツツ！－」

舌打ちをしながら、少し離れた所にあるテーブルに飛び込んだ。

「ふー」

ひとまず瞬の風船はこれで当たらないだらうけど、問題は当たつたかどうかだ。当たつたとすれば、何かしらの反応があるはずだが今はそれが無い。それに隠れているではあるが、こっちからヘタに向こうを見れないので。ここに隠れた所でこっちに来られてはアウトだし、うかつに顔を出してもアウトだ。つまり、絶体絶命、という状況である。

（どうする？どうするべきだ？）

そんな風に迷つていい時である。

「グウアア－－－－－！」

瞬の叫び声が響いた。驚いたオレはおそるおそる顔を出してみると、黄色い水で顔がびしょぬれになり、もがいている瞬の姿があつた。ひとつ気になるのは、この瞬の後方すぐに爆発している風船があることである。オレが瞬に投げたはずの風船だつた。

「いつたい、何が・・・」

困惑している時だつた。後ろから不意に肩をトントンと叩かれた。

「うわあああ－－－－！」

「・・・なんだ、甲斐かよ・・・・」

まさかそんなに驚くとは思わなかつた僕のほづが驚いた。まあ、ひとまず

「大丈夫か？」

と話しかけてみたが、ネコ俊はまだ激しく呼吸をしていた。その状態で俊が

「つーかよ、何故ここに？」

と聞いてきた。僕は当然のように

「助けにきちゃまずかつたか？ま、なんにせよ瞬があんな大声で叫んでりや、場所なんてバレバレだろ。」

と答えた。が、実際は、近くを通りていたら、瞬の声がして慌てて隠れ、会話が終わって風船を投げた後、俊のところに行こうとした所を、狙い撃ち。それが偶然顔だった。それが真実だけど、それは言わないで置いた。そのかわりに

「今何時だ？」

僕は冷静になつた俊に聞いた。俊は時計を見ながら、

「12時22分」

とまた少しあせつたように言った。時間を行つた後、俊が困つた顔でこつちを見ていた。僕は気持ちを落ち着けるために、

ひとまず合流したことだし、少し急ごつか

一人ではないことと、時間にゆとりがあることを強調させながら言った。ひとまず、仲間一人を見つけ『アナウンスルーム』へと向かつた。

「いて！！」

おれはまたしても、そこらのガレキにつまづいてしまつた。これで7回目だから、もう飽きていた。

「くそぅ・・・なんでこうなるんだよ・・・」

いろんな意味で泣きたくなつたが、とにかく我慢するしかなかつた。唯一幸運なのは、敵といまだ遭遇していないという所だけだ。といつても、味方にもあつてないけど。

「おーーい！誰かいるかーーー！」

無性に寂しくなつたおれは、誰かに会いたいがために叫んだ。かえつてきたのは静寂だけだった。

「ま・・ そん なす ぐに は出 な い か ・ ・ ・ 」

また悲しくなつて歩き出そうとした瞬間だつた。足元に風船が爆発したのが分かつた。

「だれだ!?」

おれは風船が飛んできた横の方を見て言うと、良が口笛を軽く吹いていた。よりによつて、あいてはナンバー1・2レベルのヤツだなんて、ホント、おれはツイテナイナア・・・・おれはこのゲームをして初めてため息をついた。どうにでもなつたおれは、手に持つている風船を、良に目掛けてブン投げた。けど、いつのまにか投げていた良の風船とぶつかつて、かなりの量と緑と青の水が目の前で同時に弾けた。

「あ？ 何で？」

そう言つた瞬間だつた。はじめた水で相手が見えなかつた。それで
けで、おれはこう推理した。

ヤツもみえてないはず！

北斗 残り2人
南斗 残り1人
残り3名

北斗VS南斗～想定外と裏切り（前書き）

一拳三話だーー！

北斗VS南斗～想定外と裏切り

明彦の考えた作戦はこうだ。

明彦の話によると、この施設のアナウンスルームは、まだ使えることが判明したらしい。このアナウンスを使って、『罷なんかない。話をしたいから中央の大広間に来てくれ。』なんてことをいいながら、南斗がそろつた所を一網打尽にたおす！！！
てな感じである。ベタっぽいと思われがちだが、あのアナウンスルームがまだ使えることは僕らも以外だつたし、明彦もビックリだつたという。なんせ、適当に動かしていたら、動いてしまつたという奇跡だつたらしい。

「本当に通用するのか？」

俊が不安げに話し掛けってきた。正直、僕も不安だつた。

「わからない。けど、とにかくやるしかないでしょ。」

そう言うしかなかつた。今僕が言つた通り、ただやるしかなかつた。

「今何時だ？」

「12時28分」

気が付いたら時間がだいぶたつていたことに驚いたが、今はそんな暇は無かつた。できるだけ早く、アナウンスルームに行くのが先決だつた。はつきり言うと道筋に関しては、僕はほとんど覚えてなかつた。そのため、いま何処を走つているのか分からなくなつてきていた。

「おい！まだなんか？」

自分でもあせつてきていることが自覚できた。僕がそりゃうつと、

「あつたぞ。」

俊が足を止めると、前にはエレベーターの扉があつた。

「・・・エレベーター・・・だよな？」

「その隣」

僕は落ち着いて隣のドアを見てみた。確かにかすれた文字で『アナウンスルーム』とかかれていた。僕は安心してふう、と息を吐いた。

「よし、入るとするか。」

僕はドアを開けて、部屋に入ると、想像してなかつた光景が広がっていた。アナウンスの機械という機械に水風船が炸裂していた。

「・・・・あのやうう」

誰の仕業なのか、僕は容易に想像できた。愛子、もしくは良以外にないことが確信した。少し感心していたら、

「どうすんだよ、作戦は？」

「ていうかだ。」

僕はさつきから感じていた違和感があつた。それは、「もうすぐ30分だ」というのになぜあの2人がこないんだ?」自分で言つてて気付いた。多分2人は・・・

「やられちゃつた?」

どうやら、俊はすぐ感づいたらしい。僕は無理に話を切り替えた。

「それよりだ。新しい作戦はどうする?」

僕も俊もこれに頭を悩ませた。このとき、時計は32分だった。

「！ よし。」

僕は新しい作戦をひらめいた。小々強引だけど・・・

「俊、ちょっと大広間にきてくれ。」

何も知らない俊は、ただ僕の指示通りに動くしかなかつた。

「で、何する気?」

僕はポケットに手を突つ込んで、水風船を一つ取り出した。そして、薄笑いを浮かべながら、

「我が胸の中に生きよ・・・・

とわざと聞こえるくらいうつた。

「へッ？」

このときの俊はいやな予感がしたに違いない。だとしたら、それは

大正解である。

「あばよ！！」

僕は俊に目掛けて、渾身のストレートを放った。

「ギャ

ビシャツ

北斗 残り1人
南斗 残り1人 残り2人

北斗の艦オーナーマッチョ（漫畫モード）

3話目。

今日はじめで勝負してやる。

北斗VS南斗～ゲームセット

俊は断末魔をあげ、地面に倒れ付した。

「これでよし、と。」

僕はそう言って、2階にあつたアナウンスルームへ、戻つていった。

同時刻、

「ん？」

いま、確かに誰かの悲鳴が聞こえた。よくは聞こえなかつたけど、男の声だつた。少なくとも良や瞬の声でないのは間違なかつた。とすると、答えは一つ。

「だれかいるな・・・

知らない声の悲鳴だから、たおされたのは、北斗の人間。だから、味方がいておかしくない。

「・・・方向的に大広間があ・・・」

私は誰が倒され、誰がそこにいるか、気になつて大広間に向かつた。

大広間、

「あれは・・・」

ついた瞬間、私が見た光景は倒れているのは確かに北斗のやつだつたが、肝心の味方の姿が無かつた。

「ひょつとして、逃げたな。」

といつても、そんなに時間はたつてないから、まだ近くにいるはずである。念のため、あたりに注意しながら、仲間の名前を呼んでみた。

「りょーう。しゅーん。」

だけど、何の返事も返つてこなかつた。私はもう一度呼びかけをしてみたが、なんの音沙汰も返つてこなかつた。なんの返事も返つてこ

ないから、少し怒つて、

「良！瞬！」

と呼んでみた。それでもなにも返つてこなかつた。

「どうなつてるの？」「

私は少し困惑してきた。瞬も良もかなりの実力者のはず。実際、あの倒れた北斗の人だつてたおしてりんじやない。なのになんで姿を・・・・・

「は！」

自分で思つてて気がついた。すでに2人は・・・・・しかし、もつと謎なのは、この北斗の人を良か瞬が倒したとして、誰が2人を・・・・ここまで考えていた時だつた。

ビシャツ！

私の頭に水風船が爆発したのが分かつた。わかつてゐるのだが、理解ができなかつた。私はまず上を向いた。そこには、北斗軍団の中で特に目立つ甲斐の姿があつた。私はもうなにもかもがわからなくなつていた。

「どうやら、俺達の勝ちだな。」

僕は2階から階段を降りながら、勝ち誇つたよつに言つた。そう言いながら愛子の表情を伺つてみたが、頭がついていけてない様子だつた。

「いろいろ、理解できてないみたいだが、何か聞きたいことは？」
分からずには、相手が理解できてないことをこつちでさせる、僕のポリシーだ。

「・・・・・良と瞬は？」

最初にギリギリで分かるような範囲の質問を愛子はしてきた。

「それは知らない。一応、誰かに倒されたらしいぞ。」

これは、僕も本当にわからなかつた。適当ことを言つてゐるだけだけど。

「もうないか？無いならゲームセッ・・・・・

「アレは何？」

倒れている俊を指差して聞いてきた。表情を見た限り、これが、一番分かつてないらしい。普通は分からぬけど。

「ああ、アレ？俺が直々に投げた。」

「な、なんで？」

愛子はもつと理解できない、と言いたそうな顔で聞いてきた。「僕が自身満々にそう言ったのが余計に不思議になつたらしい。

「じゃあ、お前はなぜここにきた？」

そこまで言つと、愛子は何かに気付いたような、全て理解できたようだ、ハツ、とした。

「・・・・すべて・・・・罷、てことね。」

「そゆこと。」

全てを理解した愛子の膝が落ちた。それを見た僕は少しむかついた。なぜなら、

「こつちだつて聞きたいことはあるよ。」

愛子が顔を上げると、悔しそうな顔でにらまれた。少しひるみそうになつたが、僕はこらえて、

「アナウンスルームのアレ、誰がやつた？」

僕はこれ一つが理解できなかつた。一応、僕もスッキリしたいし。

「あれはね。団長の明彦が中に入つたときなにかいろいろさわつていたの、窓から見えたんだ。」

僕はあの部屋の中を慎重に思い出してみた。全然見てなかつたけど、確かに窓があつた記憶があつた。

「ああ、あれね。」

「様子が見えてね、念のため使えなくさせてやつひとつ、みんなが来る前に私がやつたの。」

つまり、丸見えだつたわけだ。松田の・・・いや、明彦のバカ。

「・・・・お互い一本とられたわけか。」

「ふふ、そうみたいね。」

お互い、スッキリしすぎて、ふふふ、ははは、果てには

アーサー ハツハツハツハ・・・
という風に大声で笑っていた。なんだかんだでこのゲーム、結構面白かったし。

「ゲームセットだ。いこうぜ。」

「うん！」

僕らは満足のうちに、この『処刑』ゲームは幕を引いた。

北斗 残り1人 優勝 北斗軍団

北斗／＼南斗／＼ゲームセッター（後書き）

1日で1つさに3話つて指がつらくなるね。
しかも、久しぶりだし。

北斗 VS 南斗～閉会式

「おい、離せよ！」

ゲームも終わり最初に集まつた前庭戻つて来た僕と、今腕に抱きついている楽しそうな愛子を見て、一同は愕然としていた。

「何があつたの？パパに話して『コラン。』

明彦は冷静に言つたつもりだらうけど、『コラン』の方で確實に声が裏返つていた。それに目が思いつきり開いていた。

「いや、作戦勝ちしたから、『そこにはれたー』なんて意味不明な発言されて、困つてんのだよ。」

南斗の人は、他の奴もかなり納得していたのだが、明彦だけがそばで

「くそー、クヤシー！」

なんて言いながら一人暴れていた。

「さ、気をとり直して閉会式しましょ。」

愛子は、テレビキャスターのよつたテンションの高さで、突然言い出した。何故かは知らないけど、今の発言でなんの反論もなく、チームごとに並んだ。

「では、結果発表！」

いきなりかよ、と思いもしたが、結果はもう知つてゐるから、非常に清々しかつた。

「勝者は、北斗チーム！」

言われてすぐさま僕達は祭りのように騒ぎだしたが、南斗の人たちはなんの盛り上がりもなく、ただ、冷たい視線を僕らに送り続けていた。

「はあ、い、終わり」

「ちょっと待たんか！！」

勝手に終らうとした愛子の進行に、全員が慌てて止めに入った。

「え？なんか変だった？」

「こへりなんでも終るの速いだろー句でもこへりやれりじこ」として終るつ。」

僕らはちやんとしめくぐるためこへりこつと、愛子は、ま、いつか、的な切り返しで司会を続行した。

「じや、勝者のコーダー、なにか一言下せー。」

愛子はそつ言つてマイクを渡す（手振りをする）と、

「マヌケかあ、キサマらわ~」

はつきり言つて僕らも見てて素直に喜べないコメントを残してリーダーは僕達のもとに帰つて來た。あちらの方々は今にもマヂ切れする雰囲気だつたのだが、

「まあ、楽しかったんじゃねーの？」

僕は、内心祈りながら平然に言つた。少し静まりかえつて、

「ま、確かに面白かつたな。」

涼が言つてちよつとすると、みんなにかを思い出したように笑いだした。まるで、なにかとんでもないイタズラしたあとみたいな、そんな空氣だつた。

「じや、ちようどこい感じになつたし、終了しますか！」

愛子の言つとつり、周りはとてもいい感じになつっていた。僕達は満足のうちに長い永い『ゲーム』に幕をとじた。しかし、

「あれ？ なにか忘れてるよくな・・・」

僕は重要なものを忘れたような気がしてならなかつた。

「オレはいつまでもこつすんだ？ つーか、誰か来いよ」

つこわつき田斐の野郎が裏切つて、ムカムカしてたら寝ていたけど、気がついたら誰もいなくなつていた。

「オノレ、作者めー」

やや意味のある発言をして、もう一つのヒントイングに幕を下ろした。

北斗ヒロセ・南斗ミナミ・闇雲アカシ（後書き）

ただでせえ、書くのが遅いくせに休業するのを

許してくれ~~~~~

運動会大作戦～前哨戦（前書き）

約3ヶ月ぶりの投稿。

どうか温かい目で見てやってください。それから一言。

1周年だ――。（とづく）

運動会大作戦 前哨戦

今月は7月。

この沖縄での7月はかなり暑い。水を飲んでも飲んだ気がしないような、やってられないほどの暑さだ。個人的には、ウルトラソウルと叫びたくなるほど、やってられない。

それに加え、来戸は運動会

「死・・・死む・・」

孝太が僕の隣でほやいていた

「二れ以上……蝶るんじゃな、」

ちょっとした体力すら今は惜しくて仕方なかつた。なにせ、今練習しているのは沖縄特有の太鼓を持つて踊る伝統芸能『エイサー』である。詳しく知りたい方は、辞書を引いてください。とりあえず、踊りに集中したかったのに暑くて暑くて仕方なかつた。放課後になんなんだ、この暑さは。

「ほい。じきあ今田ほいれで終わるよ。」

先生の声が体育館に響いた。汗がダクダクな僕らは、この声がどれほどありがたかったか。時計は7時を回っていた。

「ブッハ――――！」

明彦は烏龍茶を一気に飲み干した。

「いやー、いつ死んでもおかしくなかつたな。おれたち。」

絶対にかかるからさう第一で語文の話題が大絶対にかかるからさう第一で語文の話題が大

はははとんと冗談は聞こえなかつた。むしろ大きく共感した。それが自販機からジュースを買ってガブガブ飲みながら帰宅して

「練習して1週間なのに、意外に慣れないもんだな。暑さって」

僕が感心したように呟つと、みんなが口々に文句を言った。

「慣れてたまるかだろ。普通。」

「毎日110円使うことになるんだぜ。」

「なるほど。俊の言つとおり、毎日お金を使つのは、非常にもつたないな。そう思つた僕は、ある案を思いついた。

「寝るときはヒーターをつけよう。これで暑さなんかへッチャラだ。」

「うん。われながら名案だ。」

「絶対アホだろ？ それはありえないって」

「そう言つたのは明彦だった。」

「まず、そうしようとするヤツがありえない。暑さで頭にキタのか？」

「何を言つ。まだキとらんわ。」

「じゃあ、一回やってみろよ。それで暑さで強くなつていたら、おれたちもやるつ。」

なぜ勝負するような雰囲気になつたのだろう。意味がわからなくなつてきた。

「じょーとーだ」

僕は一目散に家に帰つていった。

「ふふふ、とくと見るがいい」

僕は布団に入る前に、ヒーターのリモコンのスイッチを押した。

ビ

途端に部屋の気温が高くなつた気がした。少し危機感が出てきた。

（恐れるな甲斐。お前に怖いものはない。）

僕は自分にそう言つて聞かせながら、布団をかぶつて眠つてついた。

「甲斐のヤツ、遅くないか？」

遅刻の時間を10分近く過ぎていて、甲斐の姿が見当たらなかつた。あいつの場合、間違いなく早く登校して、遅刻はありえない

のに

「じゃ、出席するわ。その前に」

担任の出席点呼が始まつた。そのとき珍しく何かを言おうとしていた。

「甲斐は熱を出して、お休みだそつだ。」

ちなみに、これから物語は運動会を大成功させようと必死な中学生の姿を描いた話である。

あれから数日。

「いやー、あれはやつちゃいかんパターンだな」

「気をつけろよ。8月のはじめくらいに運動会があるというのに無僕の体調はすっかり回復していた。今思つとほんとにはアホみたいだ。

駄に休んだらシャレにならんだろ。

明彦は諦めたようにため息をついた。

「まあとりあえずだ。来月の運動会を大成功させるためにおれたち

珍しい明彦の真剣な姿に、僕たちは思わず力強く頷いてしまった。

3 校詩の本領

「ネ」――――ノロいんだよ、このボキヤ――

僕たちは100mリレーをしていました
——応本體に並んでの練習とし

僕たち生徒にとっては『死合い』なのだ。

「段に取れえホンケ!!」

僕は今から二ノ毛を受取る

僕は俊からバトンを受け取つて走り出した。僕はそれほど足が速いほうではないから余裕をかますことなど、不可能だつた。ただ、受け取つたバトンを一刻も早く次に渡そうと必死になつてゐるだけだつた。周りはその姿を見て笑う人もいたが、今の僕にはそれがとても許せなかつた。

バカにすんじゃねえ

自分では気づかなかつたが、このとき僕は、限界以上に加速していく。見る見る次走る僕のクラスの走者が近づいてきた。

「・・・とは・るしへ・・・

つかれきった僕は、はつきりと喋ることができなかつた。が、伝わつたのだろう。バトンを受け取つた走者は、受け取ると振り返らずに、そのまま走り去つていつた。座ると一度と立てなくなりそうな気がした僕は、そのまま立つて呼吸をしていた。今の状況は1位だつた。けど僕はこう呟いた。

（またビリだらうな）

1位をキープしたままで、走者は孝之にまわってきた。バトンをとつて走るうつとしたその瞬間だつた。孝之は自分の足に足を引っ掛け、縦に一回転して転倒した。見ていたとしても派手な姿はさすが不運の持ち主。普通に転ばないところが見事だつた。この間に一人に追い抜かれ2位に落ちてしまった。

「何してんだよドリアーン。バカかあ」

周りは孝之に罵声をぶつけた。本人だってわざとであんな転び方してないというのに。立ち上がつた孝之は、落としたバトンを拾い、また走り出した。

運動会大作戦～対抗リレー（後書き）

ひとまず後半へ続く

「孝之、後ろ！」

孝之が振り返ると、本気の形相で走つてくる伊芸良の姿が背後から迫つてきていた。

「急げ！ 抜かれちゃマズイ！」

良は僕達とは違つてもとの運動神経がハンパではない。その上、勝負事になると手加減をしないという鬼つぶりを發揮するのだ。スポーツにおいてまともに相手になりたくない人物だ。

「孝之ーー速く走れ！」

孝之はバトンを拾い、すぐさま走り出した。その時には良は真後ろにいた。トップスピードで駆けていた良は、加速をつけたばかりの孝之を追い抜いた。

「おねがい！」

孝之はすまなさそうに言しながらバトンを渡した。受け取った走者は走り去つていった。

「ドンマイドンマイ」

僕は失態を見せただけでなく、追い抜かれてしまつて落ち込んでいる孝之に声をかけた。

「まあ、相手が良なら運がなかつただけさ。こけていなかつたら問題はなかつたよ。」

「ああ。おれが転びさえしなれば・・・こんなことには・・・」なぜそんな発想をするのだろう。もう少し前向きに生きて欲しいな。それに、今の僕の発言もなにかおかしかった気もするけど・・・

「おい、アレ見ろよ。」

僕は、落ち込んでいる孝之から田を離して明彦の指を指す方向を見てみた。

「あれ？」

後ろに結んだ髪に、結構そろえられている前髪に普通の女子より高

い身長。アレつて

「なんでアイツここにいるの？違う学校じゃなかつたっけ？」

「さあ。俺も今初めて見て驚いてた。」

たつた今走り終えたその女子は、こちらに向かって歩み寄ってきた。

「オス、オラ愛子」

「つーか、いつの間にこの学校に来てんの？」

「詳しい話は後。で、明彦は走ったの？」

「あ、次じやん。」

明彦は急いでレーンに向かった。なぜ愛子がここにいるのかは分からぬが、とりあえず気にしないでおいた。（しかも、いつの間に僕の隣に座つてゐるし）アンカーの明彦がバトンを受け取つた。

「うおおおお！」

声出して走つてゐる人初めて見た。しかも、一人を追い抜いていた。

「おおー！これはいけるぞ」

僕のクラスはとても沸いていた。初の最下位脱出の光が見えてきたのである。現在4位中3位だった。

「行け、このまま行つてしまえー！」

今の中明彦は、本物のヒーローのようだつた。歓声を背に堂々とフィールドを駆けるその姿はヒーローそのものだつた。

しかし、

ゴテツ

ゴロゴロゴロ

見事に明彦も転んでしまつてゐた。その間に案の定、追い抜かれてしまつた。

『はあ・・・・』

切ないほどため息が聞こえた。この広い運動場に響いた気がした。

結果

最下位 脱出ならず

運動会大作戦～フォーアクダンス（前書き）

30話突破じゃ～～
多分まだまだ続きそうです

運動会大作戦／フォークダンス

「今日はフォークダンスをするだ」

先生のこの言葉にテンションが上がったやつと下がったやつが、真つ二つになつた。

「先生。大体、なんで運動会にフォークダンスなんてするんですか？」

「僕がそう質問をすると、先生は楽しそうに答えた。

「決まつてゐるだろ？中学の三年にとびつきりの思い出を作ろう、ということで、運動会ではこのフォークダンスを取り入れたわけ。わかつた？」

「・・・・はい」

多分、それは先生の意見なのだろう。

「もう一つ。なんで女子と踊らなきゃいけないんですか？」

俊が嫌そうに質問した。これには先生は即答で答えた。

「じゃお前は男と踊りたいのか？」

「・・・・・」

俊も、その後ろで踊りたくない意見の男子達も、観念したのかともも静かになつた。まあ、男子同士で踊つてもなんの思い出にもなりそうにないし。

「質問がないなら、早速練習するだ」

1曲目、

先生曰く、『フォークダンスに欠かせない絶対の名曲』の『青い山脈』だつた。一応、毎年の運動会でこの曲が流れるのだが、フォークダンスに向くのかどうかは知らなかつた。

「はい、1・2・1・2」

初めてやるという事で、ゆっくりやつてこるのでよく分からん。

足の運びだとタイミングとか、段々何を言っているのか分からなくなってきた。しかも、暑い。

そういう状態の上で女子と手を取つて踊る。

少なくともそういうのと縁のない僕は手を取ることすら出来なかつた。僕はそれを『女子が苦手だから』と考えず、『自分が未だに純情だから』と、思つようとした。ちなみに、他の軍団たちは、軽がる手を取つていた。

あいつらすげえな

2曲目、

生徒が選ぶ事の出来る自由曲だが、『ポルノグラフィティのジョバイロ』か『スピッツの空も飛べるはず』の一曲に分かれたのだが、最終的にスピッツに決まった。ジョバイロが落ちた理由は、『簡単なダンスで満足しなくなつて、レベルが段々上がりそうで怖い』といつ先生側からの意見だつた。ジョバイロに投票していた僕は、ひどく残念な気分だつた。

とにかく、躍るのはスピッツの曲だ。

とにかく、この曲自体初めてするから先生方振り付けを全て考えてから本格的な練習をするそうだ。そのため、

この日は、ずっと青い山脈を踊りっぱなしになつた。僕はこの日、ただの一度も、女子の手を取ることが出来なかつた。本番に間に合つかどうかとても微妙な所だつた。

運動会大作戦～完成、そして当日

ドン　ドンドン

気温が非常に高い事から体育館での練習になつたのだが、余計暑い。なにせ室内だし。

まあとにかく、今やつている『エイサー』もいよいよ完成が近くなつてきた。気がつけばあとい週間。その頃には運動会はとっくに始まっているのだ。普段鈍感と言われる僕にも『もうすぐ運動会』という緊張感がでてきた。ちなみに僕が使つているのは『大太鼓』と呼ばれるもので、名の通り大きな太鼓である。重さは大体・・米の袋一つ分くらいだろう。結構重たいのだ。僕以外の軍団たちは、『小太鼓』で、彼らはそれを使つて踊るのだ。小太鼓の場合、それほど重くはないのだが、派手に踊ることが重要であり、大太鼓は身軽に踊れない分、大きく響く音と少しの動作で小太鼓の踊りをよりよく見せるため、どちらも忙しいのだ。僕はそれほどエイサーに詳しくないから、多分こういう感じなのだと思う。

完成し始めているのは、エイサーだけではない。リレーに対しても、クラスが一丸になつて協力をするようになつたり、フォークダンスに限つては皆楽しそうに踊れるようになつた。僕は踊れはするが、手を取れないという、3歩進んで2歩下がるようなことを繰り返していた。我ながら情けない

運動会前日の放課後。

「完璧だ」

先生が素直に言つたこの感想に僕達は大きな歓声を上げた。ついに、エイサーも完璧にやり遂げた。僕達は、このとき暑さを忘れ喜びに浸つていた。運動会はまだだというのに。

「では、明日に備えて、ゆっくり休んでください。」

全員は満足そうに小さく笑つて、体育館を出て行つた。

「明日かあ。まじ楽しみだぜ。」

俊は興奮しているのか、口元が震えていた。俊はこうするとわくわくしている、ということを現しているという。

「確かに。なんか今まで以上に熱くなれた気がしたな。」

「な。あとはリレーでおれがこけなければ完璧なんだけどな。」

「まあ、こけないように頑張れよ孝之。」

「お互い様だろ。明彦」

僕は隣りでその会話を聞いて笑っていると、いつも僕らが世話になつてゐる自販機があつた。僕はジュースを買おうとポケットからお金を取りうとした瞬間だつた。

全員が足を止めるはずの自販機を素通りしていった。

もしかして、田ごりの練習で、暑さに慣れてしまつたのだろうか。

僕はその姿を見てお金取るのを止めた。なんだかんだで、僕もそれほど喉は渇いていなかつたし。僕は本当に明日の運動会が楽しみになつた。愛子もでてきて、面白そうだし。僕達は家に帰つて、明日に備えて、自分の部屋で横になつた。

そして今日、その日がやつてきた。

運動会大作戦～完成、そして当日（後書き）

ちなみに筆者が沖縄のある中学校を卒業したので、全てその中学校を元に作っています。

最終運動会計画（前書き）

最終運動会計画

「来たぜ、この日が」

運動会当日、明彦がにやついていた。多分待ちきれないだろつと思つたが、この表情はとても危なく見えた。

「まあ落ち着けつて。まだ開会式なんだし。ゆつくり行こうぜ。」

そう言う孝之の表情も危なかつた。現在気温32度。こんな暑苦しい中でまともに校長の話を聞く人なんて、見た限りでは片手で数えきれそうだつた。暑いのをじまかすために僕らは話をしながらどうにか開会式を乗り切つていつた。

開会式が終わつて、

「さて、どうすつかな」

一応僕達は今年最後の運動会だ。午前で3年の出る種目は意外と少なかつた。あつても一つ一つくらいだり。

「なあ、俊。どこか遊びに行こうぜ」

僕は偶然通りかかつた俊に誘つてみた。俊が答えを返そつとした、まさにその瞬間だつた。

「ねえねえ、正午にやる綱引きやる?」

・・・・この声は・・

「愛子、わざわざ俺に声をかけてくるのは、一体どうこう心境の変化なんだ?」

途中から自分でも何言つてゐるのかわつぱりだつたのだが、今まで伝わつたらしい。（隣りで聞いていた俊は、ポカンとしていた。これが伝わつてない人の顔だ。）

「だつて、まともに話せる人、甲斐しかいないもん。」

「お前、自分のチームはどうした!?」

「あ、そつか。忘れてた。」

「おま・・・お前、タチ悪つ!?!」

僕は普段ボケキャラと呼ばれている（なぜか分からない）のだが、こいつの前ではただのツッコミになってしまっていたのに気がついた。なんか疲れるな、この人。

「大体な、綱引きは大人のやるヤツだろ。俺らがどうやって出るんだよ」

「大丈夫。私服持つて来ればいいから。多分ばれないよ。」

自信満々でこたえる愛子。やる気があるのは分かるのだが、相手が悪かった。

「そんなめんどくさいのやつてられんよ。甲斐、もつ行こう。」

「だな。てなワケで、じゃあな」

僕らが振り返り、歩き出した瞬間だった。

「・・・・・ むよ」

「ん？」

愛子が何かを呟いていた。僕らは思わず振り返ってしまった。

「綱引きでそつちが勝利したら・・・・・・ チュ しちゃうよ」

最後のあたりで、愛子は小声になりハムスターのように小さくなっていた。

（くだらな。）

僕が愛子に背を向けた瞬間だった。目の前には明彦が立っていた。

「その綱引き、受けて経とう。」

ものすごい突然の返答だった。ていうか、こいつの間にこにいるのは何故？

「はあ！？」

僕と孝之（お前もいつの間に）は納得のいかない声を上げた。

「貴様らは、彼女がいるから大丈夫なんだろうが、オレにとつては最初で最後かもしけんのだぞ。一回くらいいいじゃねえかよ。」

明彦の目には、炎が燃えていた。下手に触れたら大火傷しそうなほど情熱を、まさか明彦から感じるとは・・・・・よく見たら、隣にいる俊の目もメラメラしてゐるし。

「・・・・・ わかった、まいった。」

僕は、観念して両手を上げた。ということで、僕らはしょうもない理由と漢の意地のかかつた縄引きに私服参加する事になった。

最終運動会計画～選手会編（前編）

あいすじ

脣をかけて、綱引きを始めた。

正午、普通ならでる必要のない綱引きに僕らは参加させられてしまつた。原因はもちろんあの一言。

「しかも、ばれてないし。どうなつてんだよ、この学校の教師は」僕らは私服に着替え、サングラスをかけてまでの変装をしたというのに、だ。誰一人、僕らが生徒であるということに気が付いていなかつた。

「いっそ、ばれて参加しないのがベストなのになあ・・・」

「さすがにもう遅いと思うよ。前の2人のテンションが異常だから。」

「孝之と僕がローテンションな会話をしている中、前では

「K・I・S・S、キッスゥアア！」

と、とても異常という言葉では終わらないハイテンションな2人がいた。正直、うるさくてしようがない。

「恥ずかしいから、黙ろうぜ。」

「ええい。わかつとる。」

「じゃ、黙れよ。」

そんな会話をしていたら、確認のように綱を男達が引いていた。少し引っ張つていたら今度は女がゆっくり引いていた。人數的には、互角のようだ。

『それでは始めます。よーい・・・』

「パアーーーン！」

開始を告げるピストルがなつた。僕らはそれとほとんど同時に綱を力強く引っ張つた。しかし、簡単に終わらないのは、さすが綱引きだ。少し引いたと思ったら、また引っ張られたりしている。やつてみたら、意外と綱引きを楽しんでいた僕らに不幸が降りてきた。

「おわっしゃー！」

手を滑らせたのか、孝之は体のバランスを失い後ろに勢いよく吹っ

飛んだ。それが原因で後方にいた大人達も、うつかり手を離して、孝之をかわしてしまった。力の大半を失ったこっちの綱は、あえなく、女のほうに引かれてしまった。

『ただ今の結果、お母さんチームの勝利です。』

そのチームにいる愛子がこっちにピースをしていて。たゞやる気のなかつた業を、そのボーズでやる気を起させた。

「フフ、なめるなよ。」

二回戦、 パー ン！

ひとまず僕らは一番後ろのほうで固まつておいた。さらに、孝之を一番後ろにした。これならば、孝之が転んだ所で、被害は孝之一人だし、何より、後ろのほうだから力も出しやすい。僕らはテンポよく綱を本気で引いていた。この作戦が効いたのか、さっきよりも短い時間で結果を出した。

『 ただ今の結果、お父さんチームの勝利です。』

アナウンサーの声が白熱していた。僕らも一勝した事によつて、勢いもついたし負ける気がしなかつた。愛子のほうに目をやると、彼女の表情は動搖していた。『勝利のご褒美』自体に興味はないけど、負けるのが嫌な僕は、皆に声をかけた。

「「「才オ————!!」」

僕らは次の1勝のために、気合を注入した。

『ではこれで、綱引きを終わります。保護者の皆さん、お疲れ様で

・・・は？

アナウンスの言う通りに、目の前にいたはずの大人達がぞろぞろ戻つていった。

「なんじやあ」つや——！

明彦と俊が、ガクッと膝をつけて涙を流していた。
無駄な時間を過ごした僕達より哀れに見えた。

戦績
戦利品

1勝
1敗
敗者の涙

引き分け

最終運動会計画～THE対抗リレー

「・・・・疲れた。」

無駄に気合を入れすぎて、僕らはもうトントトだった。その中で、まだ元気のあるヤツが一人いた。

「くそー！チューがあ！初めてのチュウがあー！」

なんでそんなに元気なんだ、明彦。ひとまず僕らは学年ごとに設置されているテントまで移動した。すると、ある光景を目にした。ちょうど、同級生達が学級ごとに色の違う鉢巻を頭につけて、ウォーミングアップをしたりなどの景色が見えた。少しいやな予感がした。

「お前ら遅いぞ。対抗リレー次だぞ。」

僕らは言われて初めて思い出した。そう言えば次、3年の対抗リレーだけ・・・

「どうしよ・・おれ何番目に走るんだっけなあ」

順番を思い出そうとしている孝之を見て、あることを思い出した。

「なあ、提案があるんだけどいいかな？」

僕が突然言つた言葉に一同は食いついてきた。

「提案？なにがあるのか？」

「あるよ。一か八かで、ひょっとしたら1位になれるし、間違つたら、ダントツの最下位になるんだけど。」

「とりあえず聞かせてくれ。」

「オッケー。俺は一言しか言わないから、どうするかはそっちで決めてくれ。」

『2レーン、一組、屋比久俊』

「誰が二ヤン二ヤンテレパシーだ、『ゴラア』」

多分、今のアナウンスがそう聞こえたのだろうか。ありえない耳してると、あのネコ。

「二ヤンか言つたか？」

「言つてるわけねーだろ」

今、僕の心中を読まれたみたいだ。内心、かなり焦つた。

「なあ、質問質問」

さつき僕が提案を聞かせた人（名前忘れた）が僕の隣に座つてきた。

「本当にあの順番に替えて、1位になれるのか？」

「さつき言つたじやん。一か八かの確率つて。少なくとも、最初の

一番、一番は確実にいいと思うぜ？」

表情から見て、あまり理解はしていなかつた。まあ、詳しく述べは説明していらないし仕方ない事だけど。

「ま、見れば分かるや。」

そう言つと、タイミングよくアナウンスが聞こえた。

『位置に着いて・・・』

全走者がそれぞれのスタートに適した構えを取つた。（ちなみに俊はクランチングスタート）

『ヨーイ・・』

全員がピストルの合図を待つていた。この瞬間、この広い運動場が静まり返つたような気がした。

パーン！

第一走者が一斉に走り出した。

最終運動会計画～THE対抗リレー～2

今の順位は、俊が3位だった。実の所、俊自信の能力はそれほど高くない。細かく言えば、彼の運動能力は文化系の人と同じくらいだ。「おい、悪くはないけど、どこが『ブツちぎりの1位からスタート』なんだよ。」

「まあ、見てなつて。」

僕は立ち上がると、俊に向かつてありつたけの大声で叫んだ。

「鈍^{のろ}すぎてハエも止まりそうだぜ！？」このカスキャットがあーーー！ クラスで僕が大声で叫ぶのはほとんどないせいか、ほぼ皆がこちらに視線を注目させていた。後になつて、とても恥ずかしくなつてきた。けど、効果はあつたようだ。

「誰がハエも止まりそうなカスキャットだつてえ！？」

あの耳のおかしい俊が的確に文句を聞き取つた！ それほどこの対抗リレーに勝ちたいのか・・・・・ 意味は良く分からないけど、そう思つてしまつた。

「フウウオオオオーーーーー！」

ものすごい勢いで走る俊は先頭の走者まで、難なくブツちぎつた。

「おいおいー滅茶苦^{めちゃくちや}茶速すぎるだろー！ あのスピードでバトン取れるのか？」

確かに。見た感じの2位との差は人五人分の差がありながら、まだ加速していく。

「まあ、かなり厳しいだろうな」

「スピードを緩めさせろよ。そつしないと・・・」

「問題ないさ。」

この男は北斗軍団のことをそれほど知らないのか、またしてもポカンとしていた。

「次の走者が誰だか分かつてただろ？」

「分かつてると、あれはさすがに・・・」

「心配ないさ。部下の能力を知らずにビリヤードリーダーを名乗るんだ?だからアイツなら大丈夫さ。」

珍しい生き物でも見ているかのように、眺めていた。

「ま、見れば分かるけど。」

僕は、次の走者を見るように促した。期待通りに、リーダーは高速で迫りくるバトンを助走をつけながら、受け取っていた。この一連の動作がどんなものか理解したのか、運動場中が『おお!』と驚きの声を上げていた。正直、これくらいことをほぼ毎日してきた僕達にとつては、当然のようになないとおかしい感じだった。

『1組が大きリードしています!』

放送部のアナウンスもすっかりテンションが高くなつてきているのが、声だけで分かった。このまま安全に1位をキープできると思つていたのだが、一つ。たつた一つ、意外な事が起きた。三組の走者があの南斗の男、伊鯨瞬だつたことだ。身体的に体が大きく、身長が176センチもあるという。それでいて、足が長い。瞬はその体格を生かして、歩幅を大きくして、走るようにしていた。つまり、結果的に足がかなり速いことになる。

「やばいぞ明彦!急いで走れ!!」

声が聞こえたのか、それともなんとなくなのか、身の危険を感じた明彦は必死に走り出していた。しかし、このとんでもない歩幅のせいで、徐々に距離が縮まつてきていた。

『三組さんが、どんどん追い上げてきます。一組さん頑張つて!』アナウンスがそう言つたころには、七人分の距離が四人分に縮まつてきていた。明彦も決して遅くはないのに、瞬がとんでもなく早いのが分かつた。

「いよっしゃーーー!」

明彦が妙な大声を上げ、少し加速した。縮まつていた差が、広がる事もなく縮まる事もないまま、明彦は1位のままバトンを渡す事ができた。

「さて、俺たちは最後だから、本気で頑張らんとな。」

僕は孝之の肩をポンと軽く叩いてリラックスさせた。

現在 5位中 1位

最終運動会計画～THE対抗リレー～3

現在、リレーの状況は、本当の意味でシーソーゲームしていた。1位になつたり2位になつたりのくりかえしで、かなりいい調子だつた。まず、練習の時にトップにすらなつた事がないクラスなだけに、盛り上がり方が普通ではなかつた。その万年ビリのクラスが本番当日に突然のトップに。この事態に困惑し、1位にならなければ、という焦りからか、他のクラスもとんでもないレベルで盛り上がりついた。

まるで、何かの祭りのようだ。

僕は、そんな運動会を今始めて体感して、身震いをしている。それは『アンカー』の孝之も気付いただろう。

「まさか・・ビビつてる？」

少し震えている声で、孝之が話しかけてきた。

「まさか。これは武者震いつてやつだよ。」

そう言つてごまかしたが、本当はビビつていた。僕はこんな舞台でトップをキープしたまま走つて、孝之に繋がないといけない。もし転んで、ビリに急降下したときには、どんな拷問が待つてゐるのか分かつたものじゃない。といつても、アンカーの孝之には、僕の倍以上のプレッシャーがくるだろう。だから僕よりもカタカタ震えていた。

「落ち着けよ。結果はどうあれ、お前の走りをすればいい。全責任は俺がとる。」

とりあえず、僕は孝之を落ち着かせてみた。少し安心したのか、体に入つていた余計な力が抜けていくのが分かつた。

「甲斐、そろそろ出番だぜ。」

そういわれて、僕はレーンの上にたつた。僕のクラスは1位を保つていた。それを見て安心した時だつた。

「そういえば、初めて勝負するな。」

隣りを向くと、三組の、そして南斗のもう一人の男、伊芸良が軽くストレッチをしていた。厄介な事に、この学年で、トップ3を誇る足の速さを持った相手と走る羽田になるとは…。

（逃げ切れるかな？）

僕は不安げにそう思つてゐるのもつかの間、後ろから走者がきて迷う暇はなかつた。

（くそぅ！）

何すればいいか分からぬ僕は、ただ開き直つて、バトンを受け取り全力で走り出した。その時僕は、後ろを振り返らないようにただ前だけを見て走つていつた。一応、僕も多少速いではあるけど、良にかかれ、追いつけない相手ではないだろ。

（今俺は全力で走つてゐるんだよな？）

僕がそう思つたのは、走つてゐるはずの僕の後ろから、恐ろしい勢いで足音が聞こえるからだ。ほほ間違いなく良だ。僕は文字通り全身全霊、体中を使って走つてゐた。のはずが、気がつけば僕の隣には良がいた。

「孝之、助走をつけろ！」

コースの三分の一を走つた所で、孝之に指示を送つた。助走をつけゐるには、かなり早いのだが、なりふりかまつていられなかつた。

「早く、走れ！…」

二度目の言葉を送ると、孝之はようやく助走をつけた。普通ならば、バトンを渡す時に腕を伸ばし渡すだろ。しかし、僕は違う。カーブを曲がり、直線になつた瞬間、腕を伸ばした。

僕は一刻も早く、1位の状態でバトンを渡し、孝之に「ゴールしてもらいたかつた。だから、助走で少し長めに走らせ、僕は最初から腕を伸ばして、最短でバトンを渡す策をした。幸い、三組のアンカーは、僕より足が遅かつた。恐らく、良で距離を離したかつたという作戦だろ。

「孝之！ラストは華々しくな！」

「おう！」

孝之がバトンを受け取った時には、すでにあと半分くらいになっていた。バトンを受け取った孝之は本気で走り出し、2位の走者は追いつけなかつた。

「やつたあーーー！最初で最後の、1位だぜえーーー！」

クラスははしゃいでいたが、僕は間違いなく起立る『アレ』の瞬間を待つていた。

最終運動会計画～THE 対抗リレー 4（前書き）

あ、あらすじ
対抗リレー編、クライマックス

（絶対くるはずなんだ。孝之だからこそ起ころる瞬間が）

勝利マークの一組はすでに、握手をしたり、喜んだりしていた。明彦や俊もハイタッチを交わしたりなど、負けを疑っているなど、全く感じさせなかつた。が、僕以外の皆が忘れている。

あの『孝之』が『ゴール前』でなにも起きないわけがない。僕はそう思つてやまなかつた。だから、孝之の走りを瞬きもせずに見つめていた。

しかし、孝之は好調に走りつづけていた。

（考えすぎか・・・）

そう思つて安心した瞬間だつた。孝之が自分の足に足を引っ掛けた。体制を崩した孝之は前のめりに転んでいた。ゴールを目の前にして、ここで転べば1位を逃して、2位でゴールをするだろうけど、みんなの期待を裏切つた扱いを受けとんでもない事になりそうな気がした。ここにいる誰もが、この少年は間違いなく転ぶだろう。そう思つたに違ひない。その証拠に、僕のクラスの顔が喜びの顔から、驚愕の顔をしていた。

しかし、僕はそうは思わなかつた。

それが来ることを信じて疑わなかつた（言葉が悪いのは失礼だが、一応事実）僕の勝利を確信した。

「孝之、前に前転してから、テープに飛び込め！」

孝之と僕以外の人間がポカンとしていた。孝之は僕の言つたとおりに、倒れる瞬間、手を前に出して、昔体育で習つた前転を行つた。そして立ち上がつた瞬間、立ち幅跳びの要領でゴールテープへと体を投げた。孝之の体にゴールテープがピタリと張り付いたように見えた。

『ゴール！ゴールです！1位は二年一組です。2位はわずかに三組でした。』

アナウンスの外で『ワーウー』『キヤーキヤー』と女子の声が騒がしく聞こえた。この喜び方だと、事情を知っている3年だろう。放送部のテントでは、どういうわけか顧問の先生と部員が抱き合つて喜ぶというシユールな場面で少し笑つてしまつた。

ま、放送部の状況は置いといて。

孝之が、まだ信じられない表情で白いゴールテープを握つていた。僕らは今日のヒーローに肩をたたき出した。ねぎらいの言葉を送つていつた。

「ナイス！」

「かつこよかつたぜ！」

「なんかおれ、孝之がハンサムに見えたよ。」

これは俊。

「ブタ野郎め」

これは僕。

「やはりな。お前ならやると思ったぜ。」

これ明彦。

「ブタ野郎め」

これも僕。

「じゃあよ、今日のヒーローを皆で胴上げしそうぜ。」

僕が仕切つてみたら、一組の皆が一斉に集まつた。そして、孝之を抱えてから、胴上げをした。

「どんな気分だ、孝之」

「やつと勝つた実感が湧いたよ。」

「よかつたじやん」

明彦が少し微笑んだ。この雰囲気の中、放送部員のアナウンスが申し訳無さそうに聞こえた。

『あの・・・運動会自体はまだ終わっていませんけど・・・』

皆思い出したらしく、胴上げをピタリと止めた。そして、空に舞う孝之の体を受け止める人はいなかつた。

ドスン『ゴバア！

孝之のむなしい悲鳴だけが、運動場に響いた。

戦績 5位中 1位
戦利品 クラスの友情、運動会が終わっていないという辛い真実

最終運動会計画～THE 対抗リレー4（後書き）

次話からあらすじひやんと書かなきや・・・

ハーフタイム～争奪戦（前書き）

いろいろ、実験的な事をしてみました。
だからといって、違う作者が書いてないから。

あらすじ

リレーが終わって・・・

ハーフタイム～争奪戦

「ツハあー、暑い！！」

学年ごとに設置されているテントの、自分の席につく瞬間に、明彦は飛び込むようにイスに座った。それもそのはずだ。今回の運動会は異常気象による高い気温のせいで帽子を着用を許されていた。けど、『そんなものは邪道だ』という明彦と俊の意見により、僕たちは北斗軍団は、帽子もなしに今までの運動会の日程を過ごしていた。ということもあるし、もちろん、今までの競技のたびにいちいち本気でやっていた事もあるだろう。

「ゲ・・・ゲーテーラードくれ」

「なんで俺に聞くんだよ。ていうか持つてるわけないだろ」
焦点のあつていな孝之の視線が僕の良心にダメージを与えていたのだが、その効果はいまひとつのようだつた。

「つたぐ、そんな事言うからど渴いたじやんか」

僕はそういうと、席を立つてテントを離れていった。

「どこ行くんだ？」

「あつち

僕は、人気の少ない水道の方に指を刺した。そのとき、孝之の目が光つたように見えた。いや、間違いなく光つていた。孝之はものすごい速度で僕を追い抜き、水道のほうへ走つていった。

「くつ・・・待てよ、コラ。」

どういう根拠なのはわからぬが、今僕の心の中では『孝之に抜かれ、自分より先に水を飲まれると負け』というルールが、一瞬にして出来上がつていた。

「うははははーこの勝負はおれが勝つたようなもんだなあー！」

いつの間に、ゴールに着いた孝之が、勝ち誇つたように蛇口に手をかけた。（いつそこについたのか、本当に気になる）

「あーばよお

孝之が水道に口を近づけようとしたときだった。

「それにさわんじゃねえ、クソ野郎！」

横から蹴りを入れたのは、サンジ・・・ではなく、なぜか怒りの表情の俊だった。（ていうか、お前もいつの間にそこには・・・）

「わかつてゐるのか！」にある水はオアシスオアシス以外、絶対飲むんじゃねえ。

「お前何言つてんの！？」

孝之がフツーにつつこんじゃつたよ。さすがに僕もなんか納得した。

「だから、オレがたらふく飲んでやる」

そう言つて、俊が水道に口を近づけた時だったときだった。

「ペイ！――！」

という奇声を上げて、横から飛び蹴りをしたのは、明彦だった。（お前らいい加減にしろよ。どんだけ足速いんだよ）明彦は、倒れた2人を見下ろしながら、腕を組んで（えらそうに）語りだした。

「お前らは、黙つて聞いていれば、たかが水で殺しあいやがつて。地に堕ちたか、アホンダラ共め。」

結局、明彦も『たかが水』で、一人ぶつ飛ばした時点で、あいつ等と同じレベルなのがわかつた。

「だから、もうお前らがケンカしないよう・・・」

そう言いながら、蛇口に手をかけた。

（まさか！）

「お前らの分も飲むとしよう！」

「やめろおー！――！」

パツと見ると、とてもシリアスな場面に聞こえるが、内容を知ると酷く馬鹿みたい。そんな場面の中、僕はとってもマジで明彦を阻止しようとしている。（結局僕も、明彦達とそう変わらないレベルだった。）水の出た水道に、明彦が口を近づけた瞬間、僕は自分の履いていた靴を脱いで、手に持つと、目掛けてぶん投げた。

「つるあ――！」

僕の靴は、見事に明彦の顔にジャストミートした。明彦は後ろに倒

れていった。

「やつと・・・やつとだ。」

僕はとうとう、水道の前に立つことができた。もう僕を邪魔するやつはない。僕は遠慮なく、蛇口をひねり、水を喉に通した。だが、ある予想外が起きた。

「アツツツつ！」

僕は忘れていた。太陽のせいでの、冷たいはずの水道がかなりの熱湯になっていた事を。僕はあまりの事態に目の前が真っ暗になった。そして、その場で僕は倒れこんだ。

皆も、こうこうとこには、ぜひ気をつけてほしい。

あらすじ
バテバテな4人。

最終運動会計画～後半戦

ガリツ ガリガリ ポリボリボリボリ

「・・・・・うめえ。」

こんな暑い日に何も飲めないつらい事ではあるし、何かを食べることもつらい事だ。けど、『何を食べるか』によつては、かなり状況が変わる。まさに、今の僕らは本当の意味で天国にいるような気分にしている。

「なあ、次つて何だっけ？」

孝之がだるそうに明彦に話しかける。

「確か・・・・・フォークダンス・・・だつた気がする」

焦点の合わない目で孝之を見ながら明彦が答えた。話し方を聞いた限り、相当めんどくさがつているのがよく分かつた。実際、僕もとてもめんどくさいし、なにも考えたくない気分だ。暑いし。

「いっそ、逃げた方が良いだろ」

急に何を言い出すんだ、俊。

「帽子も被つてないのにこれ以上運動会してたら死んでしまうつて。

「バカタレカラ！」

突然、明彦が激怒した。僕はその理由を暑さのせいかと思つたら違つていた。

「一応、オレ達最後の運動会だろ？　アホみたいな思い出の一つくらい作ろ？　じゃねーか！　倒れたら倒れただで、いい思い出になるだろ？」

いい事言つてると思つけど、なんか違つてる気がしてならない。僕は微妙な心境だった。とりあえず、今回は明彦の味方につくことにした。

「俺もそう思うな。思いで作りに運動会は最適だろ？」

僕がそう言つてだめると、俊はおとなしくなり、孝之の持つている

『固体』を何気なく奪つて口にした。

ガリツガリガリ ボリボリ

「・・・つうし。たまにはムチャもしようかな。」

「・・・ていうか、それ、おれの・・・」

・・・ちなみに、さつきから僕達が食べているのは、俊と孝之がどこから持つてきたか知らない『氷』だ。やっぱり、氷はこういう時に役に立つもんだ。

フォーキダンスを体育着で踊るのもおかしいだろう、という先生方の意見で僕達3年生は、各自、制服に着替えに行つた。だが、しかし。ここで、ある重大な事件が起きた。

制服忘れた。しかも、北斗軍団全員。

ひょっとしたら、僕等はフォーキダンスに参加できないかもしれないことになつてしまつた。僕と俊としては、どちらでもいいのだが、明彦と孝之は、

「絶対嫌だ！オレ絶対このダンス出る！」

と、だだつ子のようにごねていた。孝之は彼女がいるからいいとして、明彦がなぜ困るのかよく分からぬ。けど、こんな本気な明彦も珍しいから、僕はまた味方した

「・・・明彦、賭けは好きか？」

「一か八かは結構好きだな。」

「そうか。一か八かね・・・」

その時、僕はどんな顔をしたのか分からぬが、明彦は僕の顔を見てハツとしたのが分かつた。

「・・・何を考へてるんだ？」

「別に。ただの悪巧み。」

僕はそう言つて、職員室の方へ駆けて行つた。後ろで、明彦達が不安そうな表情をしているのが見なくとも分かつた。けど、僕はこう思つてゐる。

この賭けに勝てば、フォーアクダンスは確実にもつと楽しめるはずだ
!!

最終運動会計画～共闘（前書き）

・ 祝40話…・▽(- - -)▽ 憄いがぢつかはわかんないけど…
あらすじ
見てるよーいの作戦

最終運動会計画／共闘

「教頭。教頭先生います？」

僕はこういうイベントのときに、決まって外に出ない先生を知っている。僕の予想通り、その先生は職員室の自分の席でうつぶせに寝ていた。僕は職員室に入るなり、教頭の肩を軽く叩いて起こした。

「フア～ア・・起きてるよ。そんなしなくても十分起きてたからな。

「教頭。今からフォークダンスをするんですが・・・」

「まあ、誰もいないから軽く呼び捨てでも大丈夫だよ。」

「・・・はい。・・・じゃ、野原。大事な話があるんだけど聞いてくれる？」

教頭にして理科の先生を務める野原忠^{のはらただし}が軽く頭をかきながらうなずいた。僕達にとって、この野原という人は『人生の師』に等しい人物である。状況が状況だから、詳しい話はいざれしたいと思う。

「運動会のプログラムで、今からフォークダンスがあるんだ。本当なら制服でやるんだけど、俺達忘れちゃってかなりやつかいな事になってるんだよね。だから、助けてほしいんだ。」

そこまで言うと、野原は突然笑い出した。

「はつははは。やっぱりお前^{めえ}ら軍団は大分変わってるな。普通のヤツならダンスができなくなるくらいでそこまではしないぞ。ホントに面白いヤツだな。」

僕もそう思った。自覚できる程、僕達は変わっていることが良く分かっている。野原が、胸ポケットからタバコを取り出し、口にくわえて真剣に話し出した。

「一応、手は貸したいけどよ、お前らが何をしたいか分からぬから今は何もできないよ。で、お前らはどんな考えがあつてダンスに出来るつもりなのかな？」

野原がそこまで言うと、くわえていたタバコに火をつけた。

「考えながらあるよ。しかも、普通のヤツには滅多に思いつかないと思つようなどびっくりなヤツ。」

「ほひ。」

野原が楽しそうに笑んでいるのが分かった。

「一つ目は、男女関係なく私服でフオーラダンスをやる。二つ目は、先生、保護者方の参加も自由にする。」

僕は自信満々に言つた。野原がこらえていたものを吹き出すよひに、爆笑しだした。

「ボクは何人の変わったヤツを見てきたが、お前は特に変わってるな。ひとつ分からぬんだが、何故保護者も参加させよつと思つたんだ？」

実はその理由も考えていた。

「俺達が個人で動いたのがバレないようにな。結構カンペキと思つけど？」

野原はとつとつ、腹をかかえて、笑いを我慢していた。

「OK。やつてみたらかなり面白そうだから、他の先生方に聞いてみる。」

親指を上げて、承認してくれた。けど、まだ顔は笑いで妙に引きつっていた。

「ぜひ、よろしく頼む。」

僕と野原がハイタッチを交わすと、そのまま野原は職員室を出て行つた。出る寸前にこう言い残した。

「ミスつても許してね。」

そのいい笑顔を見ると、ミスつても許せそうだった。というより、相手が野原だから許せる感じだった。これには何もできない僕は、手を振つて見送つた。

最終運動会計画～はい、終了

「お、甲斐。で、どうだった？」少し心配そうに明彦が聞いてきた。

「うん。多分大丈夫、って言つてた。心配はいらんだが。」

はつきり言つて、僕の内心が心配だった。上手くいくかどうかも本当にわからない大博打をしているわけだから、成功するとは限らない。確率的には失敗の方がはるかに高い。

（ほとんど負け戦だな。）

「ん？ なんか言つた？」

「なんも言つてねえよ。」

小声で言つたのに危なく孝之に聞こえそうだった。運動場を見ると、学校の制服に着替えた同級生たちの並ぶ姿がかなり目立ち始めた。危機感を感じた僕達のしゃべる言葉は少なくなつて、気がついたら僕達軍団が尋常じやない静けさになつた。そして、運動場に集まつた同級生たちが見る見る内に、それぞれ男女のペアが出来あがつていた。

「つたく！ 野原は一体なにしてんだよ！？」

焦りから、僕はつい孝之に怒るようにハツ当たりをしてしまつた。

「・・・・悪い。かなり焦つてるわ。」

孝之が驚いたようにこっちを見て、僕は少し落ち着くようにした。僕が運動場を見ると、ペアになつた男女が入場している姿があつた。よく聞いてみたら、BGMがはつきりと流れている事にも気がついた。僕達がどれだけ焦つていたか分かつたような感じがした。

「・・・終わつた・・な

俊が遠い目をして言つた。（確かに俊つて、ダンスはどうでもいいと言つていたと思つてているのは僕だけだろうか？）孝之と明彦はこの世の終わりのような、もしくは、怪獣でも見ているかのような、かなり険しい顔で運動場を見ていた。それらは生きた人間の表情をし

ていなかつた。

「・・・しょんなあ・・・・誰か夢だと言つてくれ」

「明彦・・・どうやら現実らしいよ。」

すでに運動場ではダンスの曲が流れていて、失敗に終わった事を分かつた僕は、皆に言つた。

「作戦は失敗だつたみたいだ。じゃ、あとはエイサーで頑張りうざ」
僕達はクラスのテントに戻る事も出来ないので、校内をさまよつことにした。

その瞬間だつた。

『現在ダンスをしている3年生の皆さん。至急、私服に着替えて、再度運動場に集まつてください。また、先生、保護者方の皆さんとの参加も自由なので、気軽にご参加下さい。』

最終運動会計画～ちょっとだけ大人の話

あまりにも突然な放送だった。僕たちはその内容をすぐには理解できなかつた。

「・・・今の放送は・・・なんだつて？」

確認の意味で、俊が聞いてきた。僕は、今自分が聞いた事を伝えた。「あれ・・・だろ？ 今からの校歌ダンスは私服でやるつて。しかも、保護者付きで。」

「おお！ なんか分からんが、大逆転でお！」

「よっしゃあ！ みんなおれついて来い！」

明彦が叫ぶと、僕らは一斉に運動場へ走つていつた。
(なんか中途半端なタイミングだな・・・)

僕は少し思つた。けど、これから校歌ダンスの楽しみのせいで、その思いもすぐに消えていつた。

「教頭！ あれほどダメだと言つたのに、一体何をしているんですか？！」

「何つて・・・放送に決まつてるじゃないですか」

放送席のいるテントの下で、校長は野原に対しても放送で本気で怒つっていた。というよりブチ切れていた。

「それは見て分かる！ 私が聞いているのは、なぜ『そんな放送をしているのだ』ということだ。」

校長の勢いは、かけている眼鏡が割れそうなほど怒りが見えてきた。野原は、両腕を組んで少し考へると、一言呟いた。

「校長。お子さんはいます？」

「は？」

「いや、ですから・・・校長こはおお子さんはいるんですか？」

「いるよ。ちょうど高校と中学2年の息子と小学校の娘が・・・・・

・それが何か？」

それから野原は、少しずつ語りだした。

「少しだけイメージしてもらいたいんですが……もし校長がここ
の生徒と同じ年齢としだったとしたら、全く同じ状況になつたら、どう
思います？」

「そうだな……友達の親とかと踊るのは面白そうだな……それに
好きな先生とかと踊るのも楽しそうだなあ」

校長は昔を懐かしむような、少し遠い目で言った。

「今の中学生もそう思つてゐると思いますよ。私には親は一人とも
いなかつたものですから、運動会とか授業参観というものが大嫌い
だつたんですよね。だから、こここの生徒達には私の分も楽しんでも
らいたいんですよ。」

校長は野原のその過去を知つたためか、野原の気持ちを理解した。

「……君の事を安く見ていたようだ。私が悪かつた。ところで、教
員の参加がいいなら、野原君、君も一緒に行かないか？」

「言つたじやないですか。私の分も生徒達に楽しんでもらいたいと。」

「
校長が少し残念そうにすると、校長は私服の生徒の方へ駆けていっ
た。それを見送つた野原の表情はどこか寂しさがあつた。

「野原。」

僕達は野原のいる放送席のテントにやつてきた。

「どうやつて説得したの？いわゆるワイロを？」

「アホ言え。アホ共め。」

「野原は煙草を一度吸つて、一言。

「……大人の事情……つてヤツだな」

（うわつ、なんか言い出したぞ……）

口に出して言いかけたけど、僕はそれを飲み込む事ができた。

「まあ、なんかよく分からんけど、俺達いつてくる。」

「野原の分もちゃんと楽しんでくるよ。」

貴之がそう言つと、一瞬、ほんの一瞬だけ野原の表情が変わつた

気がした。

「お前ら。本当にオレの分も楽しんで来いよ。」

どうやら氣のせいだつたようだ。いつもの野原のちょっとコルイ表か

情だった。僕達はそれから振り返らずに運動場へ走つていった。

最終運動会計画～ちょっとだけ大人の話（後書き）

かなりご無沙汰です。
指つった。

最終運動会計画～フォーカダンス前座戦～（前編）

珍しくパクリが多いけどなんに深く考えないよ!」としている。

最終運動会計画／フォークダンス前哨戦ちっく

「さて、どうしたものか・・・」

よくよく考えてみたら、フォークダンスの曲は2曲しか無いのを思い出した。僕は少し損をした気分になつたが、

「ひやつほおーーう！アゲアゲだぜ！」

明彦が一人で飛び跳ねていた。正直、あまりに痛々しいから、僕は他人のフリをしていたかったが、僕の隣にいる孝之も、

「ウツシャーーー！」

と言いながら、ガツツポーズをとつていた。もはや、他人と言い逃れるのは不可能だと悟つた。そしてもう一つ。

（そういうえば、女子と手を繋げないんだつた・・・）

僕はダンス自体は嫌いじゃないのに、こんな形でダンスをしないのはかなりもつたいたい感じがした。けど、女子と手を繋いでダンスつてちょっとな・・んー、迷うな。

「見いつけた。」

この後ろから聞こえる聞きなれた女子の声は・・・

アイツしかいない。

「・・・・ラディッシュめ、死におつたか・・・

「ブツブー。愛子でした。」

「普通に紹介すんなよ！ツツコめよ！」

僕は勢い良く振り返ると、かなり奇妙な自己紹介をした愛子がいた。

・・・ていうか、待てよ。

「お前、俺の前にいたっけ？」

「つうん。なんか緊張してる風に見えたから、来ただけ。あんたにしてはおかしいね。もしかして、女子と手を繋ぐくらいの事でビビつてるとか？」

なんで分かつたんだ？僕の表情に出ていたのか？それとも、こいつの目がマサイ族レベルの視力で観察されてしまったのか、もしくは

エスパーかのどちらか・・・

「なに動搖してんのよ。図星?」

「・・・はは、気のせいだろ」

僕はそう言つので精一杯だつた。あれだけ的確に言わると、そりや落ち込むだろ。

「・・・まあ、アレよ。いきなり知らない女子とダンスを始めても、あんたガチガチしそうだから、まだ知ってる女子と始めた方が、気も楽に慣れるでしょ。そんな感じで、運動会にいい思い出でもつくれりつよ。」

なるほど、いい作戦だ。

「頭いいな、愛子」

「ん~?よく聞こえなかつたな~。もつ一回言つていらっしゃい。

「戦闘力たつたの?か・・・『ミミだな』

「著作権で訴えられても知らないよ、私!」

そんなアホな会話をしていたら、いつの間にか私服の同級生、保護者、そしてなぜかの先生方も並んでいた。それで、さつきまであつた迷いも無くなつていた。

「・・・いやー落ち着いた。ありがとな。」

ひとまず、愛子にマジで感謝した。

「いまさら何言つてんのよ。」

「・・・ボケ」

僕がそう言つた瞬間、スピッジの空も飛べるはずのイントロが流れ出した。そして、愛子が差し出した手の平を僕は力なく置いた。

久々の一
挙一
話
バ
テ
た。

最終運動会計画～やつとフオーランス（前書き）

「」の運動会編も 約分 中盤を迎えるました。
・・・早く違うネタを書きたいのが本音ですネ

最終運動会計画～やつとフオーランス

人間、不思議な事が起るものだな、と実感した。

愛子が出してきた右手に、緊張しながら僕は軽く左手を乗せると、すごい事に緊張感はなくなつて逆になぜか安心してきた。

「アレだな。愛子つて精神安定剤みたいだな。」

僕としては、讃め言葉に近い言い方をしたはずだが、愛子は気に入らなかつたのか僕の足の指先をわざとらしく、踵で強く踏んだ。

（ウグアアアアア！－激痛めちゃくちくえ！－－）

普段なら、声を上げて叫んでいる所だつたけど僕は見事に耐え切つた。僕は心の中で叫びきつた。

「・・・何言つてゐるか知らないけど、もうすぐイントロ終わるから。」

明らかに声のトーンが落ちている。愛子の機嫌が悪くなつたのがよくわかつた。

「・・・らじゅ」

これ以上は怖くて言えなかつた。曲に耳を傾けてみると、もうすぐ歌に入るところだと確認できた。といつても、この曲は基本的に『歩く』のがメインだから、それほど難しくはないけど、あえて数えるならサビのところで『スキップ』する事（これは僕個人）と、2番の歌に入る2テンポ前（と先生が言つてた）に全員が振り返り逆向きになる、くらいだ。問題は何もない。と、思つた矢先だつた。愛子がどこかに行つてしまつた。

ということは、僕も自動的に相手を変えないといけない。僕は渋々次前に進むと、南斗でさほど目立つていない三神藍里の隣に並んだ。多分愛子の仕業だろう・・・か？とつあえず、僕は三神の手を取つてゆっくり歩き出した。

「・・・近くで見ると、やつぱり藍里つて小っさいなあ」

しばらく黙つて歩いていたけど、あまりの沈黙に耐えられなくなり

僕は初めて積極的に女子に話し掛けた。

「甲斐だつて、そんなに大きくないよ。」

三神の声を初めて聞いたけど、驚いた。眞面目に例えて『小鳥のさえずり』という言葉が一番似合つ透き通つた声だつた。けど、一つ予想通りなのが、やつぱり声は小さかつた事だつた。けど、僕が実際に気にしている事をはつきり言いやがつて……（僕の身長は159cm、三神は148cm。どっちもどっちだな……）僕は怒りをこまかすためにとりあえず一言言つた。

「……いい声だな。眠くなりそつ。」

「眠い？私の声つてあくびが出るほど微妙な声なの？」

「なんでそうなるんだよ。意味わからんよ。」

で、気がつくともうすぐサビに入る事に気付いた僕たちはまた相手を代えるために進むと、今度は仲田美智子だつた。もう、3年生全員と保護者、教員が混ざつてるのは思えないほど、知つてている女子としか当たらない。

「あ。孝之の友達だ」

「甲斐だ！名前ぐらい覚えろよ。」

それほど話した事は無いとは言え、初対面じゃない人に向かつて普通はそう言えるものだらうか？しかも気がついたら、既に美智子と手を取つてゐるし。

「……結構楽しいもんだな、フォークダンスつて」

「何？女子と手を繋ぐのがそんなに楽しいの？やらしー」

・・お、女を本気で殴りたいと思つたのは生まれて初めてだ。僕は震える右拳を落ち着けていた。

「そんなんじゃなくて。俺つてこういう行事ものつてかなり苦手だつたんだけど、このフォークダンスみたいにいろんな人と接するのつて、以外に楽しいの知らなかつたんだよな。」

「あー、それ分かる。美智子も実際やつてみるまで思わなかつたじゃ、今日の運動会はたくさん楽しまないとね。」

「そういうのは、孝之に言つた方がいいぞ。」

僕がそういうと、『おバカ！』と照れくさそうにしながら顔面を美智子に軽く殴られた 何故殴る？ まあ、美智子の言つとおり、運動会を楽しまないとな。と思いながら、僕はダンス相手を変えた。

多少書き方を変えてみたよ。

だからと言つて違う作者じゃないから。

最終運動会計画～やつとフォーアクダンス 俊の場合

（やばい！これは人生最大の危機だ！）

オレは今焦っていた。

これを読んでいる人はこんな経験があるだろつか？親の参加する行事に、自分の親がやたらと豪華な服装で来てめちゃくちゃ恥ずかしかったこと。誰の親なのが知らないのがかえつてダメージが高くなるような経験。

オレは今、まさにその状況にいた。今8月の真っ只中、その中で真っ赤な服に、真っ赤でヒラヒラしたスカートを着ている親。誰が見ても、不自然極まりない光景だ。

「ヤバイヤバイヤバイ・・・ヤバイ・・・

「どうしたの？」

相当なプレッシャーの中、不意に話しかけられて、異常にビクッとした。

「な・・なんでもない・・暑くてもうヤバイなあ、て」

「へえ、そうかな？・・・そつか、帽子まつたくかぶつてなかつたからね。」

なんでそんな事知ってるんだろ？少し気になつたが、一瞬にしてその疑問は消えた。実際、この暑さに、正直頭もまいりそうだしあの『真っ赤な人』が気になつてしまふがなかつた。

（はあ、まだ2番の途中くらいか・・・）

オレにとつては飽きるほど聞いた曲だから、あと2、3分がかなり長く感じ始めていた。気力の無い俺は、相手を変えた瞬間だった。

「シウンちゃん、大丈夫？」

その時顔を上げたのが、間違いだったのかもしれない。ずっと前にいたはずの親は気がつけば目の前にいた。本気で心臓が止まつたようだった。

「んねえ、帽子なんかかぶらないで。倒れちゃうよ。」

「……ちよつと待つた。かなり前の方にいなかつた？」

「うん。けビシュンちゃん見つけた瞬間、飛んできちゃつた。」

「……とりあえず、シュンちゃんはやめて……」

オレはこの言こようのない脱力感を『吸血鬼に血を吸われた、まさにその瞬間』と、のちに語つていた。

「どう? 学校は楽しい?」

周りから、少しだけだけど、微かに人の笑う声が聞こえた。開き直つたオレは、

「楽しいに決まってるじゃん。」

普通に会話を始めた。一応、北斗のメンバーは当然親を見た事があるから余計にしんどかった。普通に見た光景が、ただの中学生となんかセレブな人が何か話をしながら、ダンスをしている。誰が見ても面白いに決まってる。

「それにしても、多分初めてじゃない?」

「何が?」

「ほら。シュンちゃんつてよくお父さんと話をするでしょ。わたしと話すといつても、一言、一言ぐらいでしょ?だから、息子と踊りながら話をするつてなんだか嬉しくて、ね。」

冷静に思い出してみた。確かに、昔から世話をしてもらつたり、いろんな話を聞いていたの父さんだった。そして、なぜなのか、今目の前にいる母さんは話した記憶がそれほどないし、自分がなにか母さんにしたのか、と聞かれると、よく分からぬ。

「……じゃ、踊る。母さん」

そう言つた瞬間、さつきまでダラダラするような踊りが、生き返つたかのようにはずみ始めた。ハツキリ言つて、周りから見るとオレが何をしたいかはあまり知らないのだが、オレは、とりあえずコレを言いたくて、楽しく踊り始めた。

「オレ、……とりあえず、これで、親孝行したことでいいかな? 今、他に何すれば良いのかよく分かんないからさ。」

「……いい孝行息子をもつたね。私は……」

「な、泣くなよ。恥ずかしいなあ・・つもつ

場面場面でしか見ていなかつたけど、なんだか良いものを見れたような気がした。運動会のフォーケダンスの話にしては、結構いい話だつた気がする。なにせ、遠くから見ていたからよく分からぬ所もあつた。

・・・・次は孝之でも見るか

最終運動会計画～やつとフォーカダンス 孝之の場合

（ああ、まだかなあ・・・」
正直、今おれがこのダンスでの一番の盛り上がる所は多分言いつまでもないだろ？。

そう！美智子とダンス！！

だ。多分、北斗軍団にこんな事を言つと、おれの命は亡くなるかもしない。さつきまで一つ、焦つてていた事は、甲斐と踊つていると、気のせいなのかなんか楽しそうだった。その時間だけ、結構シヨックだつたが、甲斐のリアクションから考えて、美智子はおちょくつただけだつた。（甲斐の表情つて、意外に行動で出てくるからなあ。）とまあ、おれはその瞬間がくるまで、文字通り、上の空だつた。

「孝之、おい孝之。」

急に呼ばれたから、思わず

「はい、なんでしょう？」

と、つい言つてしまつた。おれはこの癖は分かつてゐるんだけど、なぜか治らない癖だ。ともかく、呼んだ相手を見ると、科学の先生の阿座間先生だつた。学校での呼び名は『デーモンの召喚』とまで呼ばれるほどの激怖い先生だ。

「孝之。一学期の期末テストで、赤点だつたよね。一学期の実力テストが済んだら補習ね。分かった？」

「わかりました。デー・・・阿座間先生。」

危なかつた。友達感覚で呼び名で呼びそつだつた。

「オッケー。それじゃ。」

先生はそう言いながら、軽やかなステップで次の相手の方へ行つてしまつた。結構ノリノリだな。デーモン。なんにしても、あんな暗い話題のせいで全くダンスに盛り上がりなくなつてしまつた。も

う帰りたい。

「どうしたの、暗い顔して。トイレ行きたいの？」

「そんなわきやねーだ・・・」

相手が誰でも強く言い切るつもりだった。けど、相手が美智子だつたらおれは当然言えない。

「もう疲れた誰か助けてよお。そんな合図だしたつて。誰も見てないし、ましてタイムを告げる笛はならねえんだよおー。」

「ちよ、ちよっと孝之。本当に大丈夫?！」

さつきまでのどうしようもない切なさと、たつた今現れた嬉しさが「コチャ混ざりしそぎて、自分でも分かるほどのみじな壊れっぷりだつた。

「・・・よし、踊ろつか

「うん。」

ゆつくり手を出すと、美智子がそれに合わせて、手を置いてきた。デーモンが現れる前の嬉しさが再び蘇ってきた。（のちに、このときの表現を孝之は『天にも昇るような気持ち』と言つていた。が、その後にボロボロにされた。）

「なあ、美智子。念のため聞くけど、誰と踊つてる時が面白い?」「女の子にわざわざそれを言わすつて、ダメだよお。」

美智子が照れくそそうに言つた。それにつられておれも照れた瞬間。なぜか、右拳で殴られた。（そういえば、甲斐もさつきこれをやられたつけて・・・）

「当然、こうなるのは分かつてたけどなあ・・・」

あまりに予想通りすぎて、僕は逆にイライラしていた。しかもなにがあつたのか、孝之殴られてるし。さて、ダンスももう少しだし。

最後は、アイツでも見るとしょつ。楽しみだ。

最終運動会計画～フォークダンス終了 明彦の場合

はつあつ言つて、俺はこのフォークダンスをアイツらの誰よりも楽しみしていた。理由は至つて簡単。

いろんな女子と話すいい機会だからだ！

無理があるかもしれないが、これは本当に、決してヤマシイ意味ではない。普段から俺は女子と喋ることがほとんどなく、会話の大半が北斗の部下達だ。しかし、このままでは俺たち軍団は『ホの集まり』やら『ゲ 集団』やら、最低な響きが出てくるかもしない。その上、だ。部下の孝之に彼女ができる、俺に彼女が出来ないはずがない！といつとから、このフォークダンスにやる気を見せていた。

だが、今は歌の最後のサビ。もうすぐ終わりなのにまとまな会話をした覚えがない。作者め、よくもふざけた設定にしやがつて……

「あ～あ、良いことないなあ・・・」

やる気が無くなつて、下を向くとそこには南斗の藍里がいた。背が小さいつて軍団の中で噂だつたけど、170cmある俺の肩ぐらいいが藍里の頭のてっぺんくらいだった。これは噂どおりなんでもんじゃない。

「いや、小つさくて見えなかつた」

「小つさこつてこんな。比亚迪。」

「まどか『比亚迪』って珍しい感じがした。ていうか、声高いけど、小つさ。こいつのいろんなところにビックリした。

「い、いや、悪気は別に無かつたんだけど・・・」

「わたし、コレ結構気にしてるんだから・・・」

藍里がそう言つた瞬間、この場のテンションが落ちた気がした。うつかり言つてしまつたとはいえ、このままでは俺是最悪の人間になるつぽい。普段から紳士を目指しているけど、そんなことなんか関係なく、謝る事にした。

「『』、『』めん。そんな氣にしてるって思つてなかつたから。運動会終わつたらジュースでもおこるから、許してえ」
途中からどうこうわけか、少しぶざけてしまつた。それに気付いて『あ、ヤバ』と思つたときだつた。

「ジュース？いいの？…じゃあミルクティーね』つて。」

さつきまではなんだつたんだ？そう思えるほど表情が一転した。しかも、その見違えるほどの表情が変わつた瞬間、俺は胸を押さえつけられた感じがした。俺は必死で氣のせいだと言い聞かせた。

「終わつたらな。」

俺は氣がつくと、かなり落ち着いていた。と同時に、ダンスの音楽も終わつていた。

僕はいろいろとピックリした。南斗の藍里の表情つてあまり見たことが無いけど、何故なのか、明彦と話しているときほどこか楽しそうな気がした。それに、最後の明彦の表情・・・
(いや・・・まさか)

あの2人がどうなつていくのか。僕としてはとても気になる展開になつてきていた。

とつあえず、運動会の終わりもあと少しだ。がんばるぞ。

最終運動会計画～フォーカダンス終了 明彦の場合（後書き）

ひとまず三部作終了。

季節は冬だけど、私の心はまだ今年の夏休みなのであしからず。

最終運動会計画・異変

疲労困憊といつのは、まさしくのじんだりつ。気温は28。僕の意見としては、いつ死んでもおかしくないほどのダメージを受けていた。

・・・もう・・限界近いぜ・・

もんかな。」

俊の言う通りだつた。とにかく喉が渴いてしようがない僕たちは、喉が渴いたからといって、水道から出てくる熱い水だけは飲むわけにはいかなかつた。口にすれば即『死』につながる事を僕たちは話しあつことなく、理解していた。

「・・・・で、次はなんだつけ?」

頭か上手くまわらない僕は、考えるのをめんどくさがって孝之に聞いた。

「んー…たしか、エイサー…だつたと思ひ

エイサーかあ・・もう最後なのか・・

言われてみれば、最後のプログラムはエイサーをやつて運動会の閉会式だった。なるほど。ゴールは田の前、つてことか。すると、明彦が景気よく

「いいじゃーん！」氣合入れて、最後の運動会、おもしろいもん楽しんでい

と、言った。そして、僕たちはエイサーの衣装を取りに、体育館へ向かおうとしたそのときだった。

ドサツツ

と、何かが倒れた音がした。振り返ると、さつきまで死に掛けていた孝之が後ろのほうで倒れていた。気になつた。僕たちは孝之の方

に戻ってきた。

「おーい！ 何倒れてんだよ。」

「」のタイミングで死んだフリなんて、絶対流行らんぞ。」

どんなに俊と明彦がどんなに声をかけても、うつぶせに倒れてる

「あーあー。」の意味がわかるのか?

「まわる・・・もつか・・・も・・・な・・・・・

今、明治時代をつむぐた後も、業たるの前に、業の辯

倒れこんだ。

ハツキリ書いて、俺もわから……

それは言葉の途中だつた。ほんの一瞬、僕の意識がなくなつたような気がした。というより、『氣絶』したのかもしれない。

「どうした甲斐? まさか・・・」

「ああ。多分だけど、コイツ等が倒れたのと、今俺がそうなる原

「因方れ方、力氣方でる」

アーティストの言葉

「多谢，魏公！」

ノルマニヤの政治小説

そこで張り詰めていた糸が切れたように、僕の意識も、ふと、と無くなってしまった。僕は薄れ行く意識の中、明彦の声だけが耳に

響いていた。

最終運動会計画～終幕

目が覚めると、そこは保健室のベッドの上だった。アレからどれくらい時間がたつたのかは分からぬ。時計を見ると、すでに5時をまわっていた。

「おっ。もう起きたんだ。早いねえ。」

保健の先生の香織先生が呑気にお茶を飲みながら、いそいそと振り向いた。

「どいつもこも、まだ頭がボーッとするでしょ？ もちつと休んどいて。」

「・・・そうします」

保健室に行つた憶えはほとんどなかつた僕にとって、ほとんど冒険している感じがした。（寝ているだけなんだけ）それに、この先生はこのちよつと老けた先生方の多い中で、唯一の20代の先生だという。友達の話だと、見た目が芸能人のように綺麗な事から、この保健室に行く奴もなかなか少なくならないらしい。

「先生。孝之と俊は？」

「大丈夫。まだ寝てるよ。」

「いやそうじゃなくて、元気のかつてこと……」

「ああ、そつち。そつちも大丈夫よ。」

・・・信用してもいいのだろうか。この人のこんな所が少し心配なのは僕だけだろうか。また少し休むと、体調が戻つてきた感じがした。

「そんじゃ先生、もう良くなつたんでもう戻りますよ。」

（戻つてもいいけど、わたし知らないよお～）

「なんか言いました？」

「ううん。なんでも」

少なくとも僕は、あの先生の呟いた言葉をちゃんと聞いていたら、地獄に行かないですんでいたのをあとで後悔した。

「いよお～甲斐。必要以上に俺一人で頑張らせやがってよお・・・」

「嵐の前の静けさ。そうとしか言ひようが無かつた。今笑顔で話している明彦なのだが、その本性は、堪忍袋を引きちぎつたような勢いだろう。」

「つで、なに？熱中症で倒れた3人の分までエイサーを踊つた俺の努力は報われる事無く、おまけに、テントの片付けつて・・・甲斐・・お前も手伝え。嫌とは言わせん。」

「嫌、俺元病人だから、無茶させたらそれこそ本当の熱中症にかかるかもしねんだろ。」

「全然問題無えじやん！つーか、嫌とは言わせんと言つた直後に嫌つて言つな！」

本気でお怒りの団長に逆らう事が出来ず、僕は成すがままに手伝いを始めた。ただ、疲れるだけの作業を黙々としただけだった。作業中、一度もあの2人の姿を見ることは無かつた。

最後が充実しない・・僕たちの最後の運動会の幕は降りた・・・・

最終運動会計画～終幕（後書き）

中途半端です
あとひとすみません

//シシッペの独りパーティー（前書き）

この話で50話あります。ので、
それっぽいことを2話連続でやってみました。

//シシッピの独りパーティ

？？『イエー！…皆さんこんなにちはば。ただいま午後2時より、ミシシッピの独りパーティーの時間だよ。どうぞよろしくお願いします。えー、このラジオは、この小説に対する過去に書かれた評価や感想をラジオのはがきやメッシュージ風に返事をする、ってな感じのヤツです。では一つ感想を読んでからゲストを呼びたいと思います。では一つ目。古い順に読んでいこうね。』

ガンダマさん。面白い、続きを読むくなる

ミシ『おお！ガンダマさんありがとうございます。やっぱりアレですね。自分が読まれていてこんな風に言わると、嬉しくなりますねえ。おっと、それではゲストの方をお呼びしたいと思います。この2人です。どうぞ…。』

？『どうも。【北斗】に出演している小橋川明彦こばしがわあきひこです。』
？『えーと、同じく【北斗】に出演している大城孝之おおじょうたかゆきです。』
ミシ『えー、お一人さんはどのようにして、北斗軍団に入つたんですか？』

孝『それはですね…。』

明『ちょっと待てい！その話は作者著者が前から書きたいとか言つてから言わん方がいいでしょ。』

ミシ『…作者はオレなんだけビ…。』

孝『ん？なにか言いました？』

ミシ『むかついたんで、次いきます。2枚目。』

タカシさん。甲斐久しぶりだな隆志だ久しぶりに読んだけどまあ見事にジョジョはいってないか？まあこれからも頑張れや（、A、ノシ

ミシ　『タカシさんすみません。口の方が反対に出来ませんでした。』

『　明　『オレ知らねえと。てこいつがミシシッピやん。』

ミシ　『ん? なんだい』

明　『タカシさんつて誰かな。なんか甲斐の知り合いつぽいけど』

孝　『それと、ジョジョが入ってるつて言つてるけど、どおいうこ

と?』

ミシ　『・・・大人にはね、話せない事情があるんだよ。ちなみにジョジョは細かくは言えないけど、最初のほうにあるから自分で

探してみてね。』

孝　『・・・逃げた・・・』

ミシ　『つ・ま・り! 話すと長くなるの! そこは理解して!..』

明　『中学生相手に逆ギレつて大人氣ないな・・・』

ミシ　『はい。次。』

ガラマンの風　さんから。　もつとひねりなさい

明、孝　『ダサつ』

ミシ　『ま、まあいいんですね。作者はベタなヤツが結構好きらしいから。そういう思つていただけたら、こちらも嬉しいです。・・・のかな?』

孝　『中途半端はダメだよ。ミシシッピ!』

明　『そうだよ。もつと自分に自信持てよ。アンタは普段から死んだ魚のような目をしきやつてるから、友達からやや冷たい目で見られるんだろう。』

ミシ　『うつさい! オレの方が年上だから敬語くらい使え! ていうか、勝手にオレのプライベートを語るりやあ!..』

明、孝　『あ、噛んだ』

ミシ　『・・・』

明 『・・・・・』

孝 『・・・・・』

ミシ 『はい！異常、ゲスト2人を交えてのトークでした。来週のゲストは、【北斗】の甲斐と俊をお呼びします。では、ミシシッピの独りパーティー でした。バイバイ』

孝 『ちよつと待つ・・・漢字が・・・』

明 『だつせー。間違つてや・・・』

「すっげつまんねーじゃん！このラジオ！聞いて損した。つーか聞かなきや良かつた。なんで俺こんなのに聞いてしまったんだ？！」
僕には怒りと喪しみしか込み上げてこなかつた・・・

ミシシッピの独りパーティー（前書き）

運動会編の最後がなぜああなつたのか・・・
気になる人はどうぞお読みになつて

『シシッピの独りパーティー』

ミシ 『わーて今週もやつて来ました 『シシッピの独りパーティー』。今日は早速ゲストの方に登場してもらいましょう。どうぞ』

甲 『【北斗】の沙次田甲斐 と・・・』

俊 『屋比丘俊です。』

ミシ 『前のヤツと違つて、今回はこい雰囲氣で始ましたな。この雰囲氣のまま終われそうだと思つ。』

甲、俊 『絶対無理だと思う』

ミシ 『・・・ダメだな北斗軍団は・・話にならん』

甲 『一応聞こえてるんだけど・・・』

ミシ 『いいシッコ!!だ。罰としてこれ読んで。』

甲 『えつ、ま・・・わかつたよ・・・』

アイツ センヨリ。予想外テースハ どんどん続きかいちゃ
つて(*ー、)-

俊 『・・・顔文字下手くそだな。ミシシッピつて』

ミシ 『パソコンで書いてるからそりや難しいつて。顔文字不自然
になるつて!先週聞いただろ?』

俊 『聞いたんだけど・・ラジオの声だけで、どんな顔文字かとか、
普通分からんつて』

ミシ 『そつか!「レラジオだつたな。すつかり忘れてた。』

甲 『その内、世間に見捨てられるぞ。』

ミシ 『オレそこまでひどくないわ!つーかお前ら。一言言つとく
けど、一応人生においてオレの方が先輩だから。そりんとこわきま
えてくれよ。いいか?』

甲、俊 『へいへい』

ミシ 『実際話してみたらむかつくヤツが多いな。北斗軍団つての

は。次のハガキ、俊読んで。

俊　『よし来たあーー!』

　S・Y　さんからハガキ。　　スゴく面白い!! 続きが読みたくなるような小説です!!

甲、俊　『・・・・・』

ミシ　『なんだ? こいつなんか見て』

俊　『そんないこの小説面白いのかなあ、つて』

ミシ　『読者が1人でも面白いと思ったものは、大体が面白いモンなんだよ。知らなかつただる?』

甲　『大体が面白い? つてことは、この小説自体微みょ・・・』

ミシ　『シャラー　普! ! そんなこと言つて読者が減つたら冗談^{ジョーク}にならんだる。発言は結構控えてくれ。・・・ 疲れてきたから最後のハガキ』

　サイゴンサロ　さん。　やばい面白い! 孝之とかいうキャラが最

高(、A、)

俊　『あんたも懲りないね』

ミシ　『オレのせいじやねーよー性能の低いパソコンのせいだろー!』

甲　『いや、十分高いだろ。といひでさ!! シシシッピ。前の運動会の話があつたろ?』

ミシ　『気がついたら呼び捨てかよ・・・・ ああ。その話が?』

甲　『なんで最後のエイサーまでやらないで、妙な終わり方をしたの?』

俊　『あ、それオレも気になつてた。』

ミシ　『・・・・・ 設定的には2007年の夏休みぐらいだな・・・・・』

・『

俊　『そりぢやなくて。なんであの終わり方?』

ミシ　『・・・・・・・・・・・』

『

甲　『まあかとは思つが・・・【飽きた】なんて言わないでしょ
な?』

ミシ　『ギクッ』

俊　『ギクッって言つたぞ、この人。』

甲　『なんか図星っぽいぞ』

ミシ　『・・・だって・・・だって!運動会の話題へ書きすぎてネタ
がいつぱい出てくるもんだから、早くそれを書きたくて・・それ
で・・漫画でいう打ち切りっぽく、終わつたんです・・』

甲　『お、おい。そこまで言わんでいいから早く止まれって。』

ミシ　『だつて・・・だつて――――あああああ上げあおひり』

『』

俊　『わあ――母ちゃんの気が狂つたあ。』

甲　『お前ら何言つてんだよ、ちきしょ――――以上、ミシシッ

ピの独りパーティ―でした。また来週、会いましょ

ミシ　『わははは――オレは独りじやなあーい。皆がいるう・・
ふあんぐえ・・ふあ・・・・・・』

かなり疲れた。もう僕は一度と出ないことを決めた。

//シシッペの独りパーティ（後書き）

やつと、50羽を超えた！！！！

ネタと時期的にまだまだ続きつつですがよろしくお願いします。

木口、ヒロかく囲み出し（前書き）

久々の新章（？）なんで
新鮮な感じがす”いした。

とつあえず、楽しく読んで下せ

休日、とにかく呼び出し

いや、一人暮らしどはいいもんだ。

話すととても長くなる（さつとつ話分ほど）のが、ちょっと理由が
あってマンションの一室を使わせてもらっている。ここの大皆さん
が僕を引き取つてくれたおかげだ。とはいっても、ただ、一人だけ
で暮らしても退屈だからペットを飼うことにして。真っ黒い、綺麗
な毛並みのネコだ。名前は（あまり大きな声では言えないが）、そ
のクールな外見から『ハイド』と名づけた。

「お前のおかげでわが家は寂しくないぞ。このヤロ」

そう言いながら、僕がハイドの首の下をなでてている時だった。

「甲斐・・・お前つてこんな感じのキャラだっけ？」

「家にいるときだけだよ。こんなキャラ・・・つてアレ？」

なんで明彦たちがここにいるんだ？ あまりの展開に僕はなでてい
る手を止めた。

「ちよつと待つた。ここに来るつて全然聞いてないんだけど・・・

」

「まあ、そう水臭いコト言つなつて。どうせヒマだつたんだろ？」

「お前らが来てからな」

僕は明彦の後ろにいる一人を見ながら言つた。今日は思い切つて
休もうと思つたのに・・・・・ていうかだ。

「・・・で？ そんなに用がないときは家には来るなど俺は言つて
たけど、どんな用？」

本題はそこだ。実際、滅多なことでは家には来ないし。

「あ、そうだった。これを見せに来たんだよ。」

俊がポケットから、一枚の紙を僕に渡した。手にとつて見てみると、それは俊宛ての手紙だつた。しかも、すでに開けられている。

「？ この手紙つて誰から？」

「愛子から。しかも中読んだらお前につて。」

「なんで俺ん家じやないんだよ！」

「アイツは何を考えているのか、やつぱり分からぬ。とりあえず僕は、愛子の手紙を読むことにした。

なんていうーーかな。

とにかく、大事な話があるんで『リングゴ公園』の男子トイレまで来てね

愛子

と、書いてあつた。いろいろつっこみたいけど、めんべくさいんで一つだけつっこむことにした。

「・・・なんで男子トイレなんだよ」

「他にあるだろ。そういうトロロ。」

「まづなあ。リングゴ公園つて、ビニー。」

「なんでついて来るんだよ。俺一人行けばいいだろつが。」

「人聞きが悪いぞ。おれたちは場所を知らない甲斐のために、純粹に道案内をしているだけじゃん。」

「道案内をする人間は、間違つてもニヤニヤしないぞ。しかもこの大人数・・・・」

北斗軍団どころが、南斗まで混じつてゐる・・・大体、敵対してゐんじやなかつたのか？

「お、着いたぞ。」

『リングゴ公園』に到着してみると、そこはなんの変哲のない、トイレの建物の上にリングゴがくつついてるだけの公園だつた。パツと見ただけでは、アレがトイレと分かる人はなかなかいなさそうだ。

「あの野郎・・・・人の休日潰しといて、俺をあのリングゴの中でもボコボコにしようという発想があり得ん。つまらん用だつたら、即

効で帰つてくるから。」

「イヤ。そういう用とは限らんぞ？」

全員が異様なまなざしで僕を見ていた。一体、あの中で何が起ころんだ？

「んじゃ、とにかく行って来る」

僕は不気味な恐怖を持ちながら、リングの中へと入つていった。

いこぶれていた。

あけましておめでとひびきぞこます。
ことしもよろしくおねがいします。

休日、とかく呼び出し、後に逃亡

「つたぐ、電気ぐらうつけろよ。」

昼間とはいえ、トイレの中は暗くてさび付いた雰囲気をもつていた。正直、怖がりな僕には絶好な状況だシチュエーションつた。僕は電気のスイッチを入れるが、電気は一向に使えなかつた。あきらめた僕は、そのまま奥へと行つた。外からの明かりでわずかに見えるが、トイレの個室が一つだけ閉まつていた。ますます嫌な雰囲気がでてきた。

「・・絶対アレだよな」

僕は恐怖心を抑えて、個室の扉を開けた時だつた。

ガシャー——ン!!

「うあわあ——!!

僕は足元をぶつけた『なにか』を確認した。手にとつてよく見たらなんの変哲ないの無い鉄パイプだつた。多分、ドアにもたれていったパイプが、開けた時に落ちるように設置した感じだつた。冷静になつた僕は、再びドアを開けて個室を確認すると、ありえない光景が広がつていた。明らかに誰かが倒れているのだ。それを確認しようとした瞬間だつた。トイレの電気が突然点いたのだ。そして、僕の目の前には何があつたのか、血まみれになつた藍里の姿があつた。

「・・・・・・・

ワケが分からなかつた。なんだつて藍里がこんなことに・・てい
うか、なんで藍里がここに?

「どう、藍里。話は終わつた?」

さらに展開が動いた。今度は普通ならそこにいるはずの愛子の声が聞こえてきた。僕はもう、なにがなんだが分からなくなつてきた(いわゆるパニックだ)。僕がこの死体の処理に困ついていた時だつた。

「甲斐・・・あんた何してんのよ?」

「いや・・・あ・・・そこで藍里が死んでたんだよ。」

僕は少しづつ落ち着きながら、今の状況を語った。

「…………じゃあ、それは？」

愛子の震える指の先を目で追つと、さつきの鉄パイプに、ベット
リと血がついていた。

「い、いや……これは……」

「いやあ――――！」

「どうした？ なにかあったのか？！」

外で待っていたアイツらが、今の悲鳴でトイレに入ってきた。トイレに入つただけで、僕はもう後戻りができない状況になつてしまつた。アレを見たメンバーの顔は、ひどく驚いていた。そして、こつちに顔を向けると、俊が冷静に静かに言つた。

「……別に殺す事ないだろ」

「俺がなんの恨みがあつて殺すんだよ。しかも藍里つてよ
「機嫌がわるかつたとか……なんか気にいらなかつた……と
かよ」

「んなワケ無いだろが。本気で俺がコレをやつたと思うのか？」
全員の冷たい視線が僕と、血にぬれた鉄パイプを交互に見ながら沈黙していた。しかも、隣にいる愛子に至つてはいつの間にか泣きじやくつっていた。僕は目の前が真つ暗になつたようだつた。
パワー ウーワー
「……パトカーの……だよな？」

サイレンの音で、南斗軍団の良も顔が青ざめてきたのがわかつた。

「ど、どうする？」「」

「知らねーよ……どうすんだよ瞬」

「オレに聞くなよ！！」

孝之と俊と南斗の俊がパニクつていた。良はもともと、筋が通つた性格だからか、

「逃げるなよ。本当にやつてないなら、ちゃんと話せよ。」

明彦に至つては、

「とりあえず落ち着け。オレは警察に絶対にチクツたりしないか

ら逃げる。詫問とかは全部隠しておくからよ。」

そして、ただ泣きじゃくつたりつむき見る姫子。僕はもつがえる

余裕なんてなかった。

「ううおお――――。」

僕はひとまず自分の家に逃げ帰ることにした。

休日、とかく呼び出し、後に眞実

「ま、マジで？」

隠れながら家に来てよかつた。けど、信じられなかつた。マンションの前にはすでに警察が大家に聞き込みをしていた。とにかく。家には帰れなくなつた。僕は冷静になつて思い出してみた。

「……ここからは俊の家か……」

僕は、一番近い友達の家に行く作戦に出た。

「一体、どうなつてやがる？！」

どういうわけか、俊の家の前にも警察がいた。

「いたぞ！あの少年を捕まえろ！」

長身の警察とほか数人が、駆けてきた。

（ヤバイ！！！！！）

僕は全力で逃げ出した。多分、この様子だと他の軍団の家にもいる氣がする。僕はアテもなく、ただ走り回っていた。

（なんでこんな目に合わなきや……ちつしう……）

僕は、ただ走り回っていた。

「もう、帰つていころかな？」

僕の腕時計はもう8時を周つていた。あたりは、もうほとんど沈んでいた。今日のMステ、見逃したなあ……

「甲斐い・・・・・」

僕はドキッとした。僕は橋の下で人の少ない橋の下にいるから、ほぼ間違ひなく僕以外はいるはずがない。それなのに、しかも僕の名前を呼ばれた。僕は恐る恐る後ろを振り返つた。が、誰の姿も見当たらなかつた。僕は首を戾して息をつくと、僕の肩に、誰かの手が乗つた。その手はとても冷たく、本当に人間の体温ではなかつた。僕は全身に鳥肌が立ち、寒気が急激に襲い掛かつた。僕は逃げるよ

「あ・・・藍里をとつて振り返ると、僕はさりに寒気がした。

「あ・・・藍里？」

僕は幽靈といつをはじめて見たが、ありえないほどしきり見える。その幽靈は、うなり声を上げながら、僕にゆっくり、足を引きずりながら歩み寄ってきた。

「・・・お・おお俺は別に何もしてないんだぞ。なんでこいつなるんだよ！？」

藍里が、ゆっくり足を引きずつてくる。

「・・・悪かったから・・俺が悪かったから本当許してくれー！」
何故なのか分からぬが、僕は謝った。実際、自分のせいではないのだが、僕は必死で謝った。少し沈黙が流れたときだつた。

「・・・・・甲斐、本当にゴメンね」

「・・・・・・・・は？」

藍里が申し訳なさそうに言つた。僕は全然理解できない。

「いやー面白かった。まさか甲斐つて、本当に怖がりだつたんだな。」

「だろー？珍しいものが見れるつて言つたじやん。」

僕も珍しいものを見ている。楽しそうに北斗軍団と南斗軍団が、楽しそうに群れている。僕は何が起きたのか、未だ理解できていな。つまり・・・・・

「はつきり言おう。お前はばつと騙されていたんだよ。」

・・・・・・・・・・・・・・

木田、とかく呼び出し、後に眞実（後書き）

書いてて楽しい話です。

て、いかみんなのキャラ、ちょっと変わってる気が……

休日、とにかく呼び出し、後に決意

僕はそれを聞かれて、思考が停止した。まるでコンセントを抜いたようだ。

「・・・『めん。頭回らないから、説明して欲しいんだけど・・・

・

「いいぞ。どこから聞きたい？」

「とりあえず、いろいろとトリックは分かつたんだ。けど、最初の血まみれのと警察のアレはどうした？」

「それって、半分以上分かつてないじゃん。まあ・・・」

良が説明しようとすると、機嫌のいい明彦が横から割ってきた。

「あの血はだな。化学部の使っている・・ま、よく分からんが、何か変な特殊な液を赤く染めて作つてもらつたんだ。どうだ？ スゴいだろ？」

「・・あの液大分掛かつてたけど、あの色は洗濯でおちるのか？」

「おちるぞ。特殊だからな。」

「・・・なるほど。それで、警察はどうやって？」

「これは意外と苦労したな。実はアレって買ったもんだぜ。もちろん本物なじやないけど、それにかなり近いものをリサイクル屋で見つけたんだよな。ちなみに、お前を追いかけたヤツは、そこにいる伊鯨瞬だよ。」

全てがつながった。なるほど。けど、もう一つ分からるのが。

「何故この企画をやろうと思つた？」

「はつきり言つと、アレだ。お前のビビッた顔が見たかったからなあ。全員、その意見で賛成しちやつて・・・悪かったよ、ホント。

・

明彦がそういうと、そろつたメンバーが一斉に笑い出した。そんなに僕のこの顔が見たかったワケか・・・

（・・・殺してやる・・・）

僕の静かな殺意は誰にも感じ取れなかつたよつだ。近づいて、
僕が作つた地獄に呼ぶことこじよつ。

「お前ら・・・」

僕は小さく彼らを呼んだ。何かを感じ取つたのか、みんなの騒ぎ
は一瞬で止んだ。

「・・死なない程度に殺してやるよ・・・・・」

僕は一言残すと、自分のマンションへゆつくり歩いて帰つていつ
た。僕・・・いや、僕は決めた。

俺はアイツらを殺す復讐魔になつてやる!!

「とりあえず、Mステ・・途中からでも見なきやな・・・・」

まずはそこからだ。家に帰つて、ゆつくり作戦でも練るといつよつ・
・・

休日、とにかく呼び出し、後に準備

「おばさん、ただい・・・・・
ゴシヤツ ひでぶ！」

忘れていた。ウチの大家にはこれは禁句だった・・・

「あ、甲斐。帰ってきたの。ただいま、は？」

「・・・ただいま優希さん」

「おかげり。ところで、昼間のはあんたと同じクラスの人つてね。後で甲斐に謝つてたけど。大変だつたね。」

「ああ、かなり疲れた。もう寝るとするよ。」

「へえ。じゃ、おやすみ」

「じゃ。」

俺は2階の階段に上がつて自分の部屋に向かうとき、後ろから

「それとね。Mステ録画してないからね。」

という声が聞こえた。（・・・わざとだな）。時計は9時12分を指していた。

「さて・・・・・と

部屋に戻つて俺が一番最初にしたことは、電話の前に立つことだつた。あいにく携帯はまだ持つてないから、家の電話でやるしかない。俺は復讐リベンジのための『材料』を少し集めることにした。（性格上、アイツは自主的にあの計画には賛成ではなかつただろうな。）

俺の勘が正しければ、アイツは協力してくれるはずだ。俺は、友達から聞いたアイツの電話番号をゆっくり押していった。

トウルルルルルル・・・ トウルルルル・・ガチャ

『もしもし、三神です。』

きた！いいタイミングで出てきた！

「・・・・・藍里か？」

『…………あのことまだ気にしてる?』

「たった数時間で忘れてくれるとでも?けど、少し協力して欲しい。そうしてくれたら、俺の『復讐』の相手にお前は選ばない。マジで約束する。』

『……わかった。協力つて?』

「協力つていうか・・質問なんだけど。アレの首謀者しゅめいしゃは誰だ?」

『確かに・・愛子と明彦が中心だった。』

『・・ウソじゃないな?』

『ホントよ。ウソついたら後が怖いし。』

「わかつた。ありがとう。じゃ、ゆっくり休めよ。」

ガチャ・・・

「なるほど。愛子と明彦か・・・」

ふざけたことをしてくれる・・・俺がどんな人間だったか忘れてるようだ。

「・・・そうだな。今回はあいつも手伝ってもらおう。」
俺はもう一度電話の前に立つて、番号を押しつついった。

トウルルルルルル・ガチャ

『はい。中江です。』

『あいつだ!俺は今ツいてるぞ!』

『大輝か?俺だ。甲斐だ。ていうか分かるだろ。同じ小学校だから。』

『今も同じ中学校だろ。今は違うクラスだけどな。つで。珍しいな。お前から電話つて。なんか良い事があつたのか?』

『逆だよ。久々に酷くやられたからな。復讐に相応しいなにかスゴイ奇策はないか?なあ、俺に奇策のコツを教えてくれた師匠さん。

『まあそりだけど・・・自分でやればいいだろ?』

『俺も最初そう思つたさ。けどよ。いろいろやつてたら、俺がやつた、つてバレるじゃん。だから、俺はそのバレないかつ、ヤバイ策が欲しいんだ。なんか、そんなヤツある?』

『…………ひとつだけあった。昔やろうと思つたけど、なんだかんだで時間がなくて出来なかつたのがあるんだ。おれ達中学生だからもう出来ると思うけど。』

「なんだそれ。早く教えてくれよ。」

『わかつた、教えるよ。長い話だから紙と鉛筆準備してくれ。・・・

・ひとつ条件があるんだけど大丈夫だよな?』

「楽勝だよ。ドンと来いだ。』

『条件は、だ。材料を色々買いに行くとさだが、クラスの誰にも見られるなよ。特に、お前の言つ『復讐』の相手にはな。』

「・・・それはちょっと厳しいな・・・」

『おいおいおい・・・・材料は怪しまれないからおれが買いに行くよ。・・・・じゃ、作戦の内容を言つから、お前の分かるようにメモしてくれ。材料をお前ん家に持つてきたときに細かい質問とか聞くよ。ここまで問題は?』

「ない。続けて。』

『じゃあ言つべ。おれがやるつとしたのはな・・・・・・・・・・・・

』

9時33分。

『じうだ?面白そうだろ?』

「これはいいな。本当に小学生のときこに考えたのかよ。」

『本当だよ。またなにか気になつたら、来たときに聞いてくれ。じや。』

「わざわざありがとな。じゃ。』

ガチャツ・・・・

「持つべきものは友・・だな。・・・・・フフフ・・ハハハハ・・・・

アーッハツハツハ!・!・

笑いが止まらない!」の大輝の策によつて皆殺しにしてくれる!

「来週が楽しみだな・・・・・・

俺はソファに座り、ハイドを撫でながら高笑いをしていた。

木口、とにかく呼び出し、後戻準備（後書き）

この作者も書くのが楽しみになつてきました。

同時に、甲斐が高笑いしている頃。

「いやーさつきは楽しかったな。あの甲斐の顔は傑作だったぜー！」
よつほど楽しかったのか、俊や愛子たちはほどどの出来事について、まだ話題が盛り上がりっていた。

「まつたくだ。しかし、アレだな。録音して実際に鳴らしたパトカーの音つて案外気付かないもんだな。コレって誰が考えたんだ？」
「俺だよ、俺。^{おれ}」

「瞬か。結構やるじゃんか。」

「だろ？」

といったように、会話が弾んでいた。敵のはずである北斗軍団と南斗軍団がたつた一人を陥れただけなのに、すごいはしゃぎようだつた。ただ一人を除いては・・・

「どうした、孝之。さつきから黙つてるけど大丈夫か。」

明彦が心配そうに話しかけた。一人以外はまだ話題に熱中していた。

「大丈夫。けど、今になつて恐ろしくなつてきたんだよな・・・」

「はつ？なにが？」

「アイツの事だよ。」

孝之は恐ろしいものを見たような表情で話出した。

「ほら、覚えてる？昔、アイツに一度いたずらをしたとき、おれたちがしたときの5~6倍近くのいたずらをかえしてきたのを・・・

「・・・」

思い出した。アレは去年くらいか。たしか、国語の時にアイツの教科書と知らない女子の教科書を摩り替えて、音読の時に気がついたアイツは、『話せない女子』ということから、本人に直接返さずに、俺の方に持ってきて一言、こうつぶやいた。

・・・思い知らせてやるよ。

そう言い残すと、アイツ・・・甲斐は俺に本を持たせて帰つていつた。

「・・・そして翌日、その一日が悪夢だつたんだよな・・・」
「・・・思い出したら、恐ろしくなつてきた。」

この話を聞いていたのか、ここにいる全員が静かになつていた。

「なあ、アイツのしたいたずらつてどんな事したんだ？」

良が興味が湧いたように聞いてきた。明彦は恐ろしそうに語りだした。

「そうだなあ・・・・・・俺の上履きの中に、ポテトチップスの欠片がボンドでくつつけられたり、数学の教科書の数字が書いてある所だけ、マジックで塗りつぶしたり。どどめには、俺とネコ俊が付き合つてる、なんて最悪なデマながしたり、散々だつたな・・・」

「ネコつて言うな、ボケ。」

「・・・悲惨だな

良が聞いて後悔をしていた。

「・・・つてことは、だ。オレ達の今回のいたずらに対する、5
～6倍近くの復讐つて何をすると思つ?」

「・・・・・・・・・」

完全に静まり返った。ただ、さつきまであったはずの暖かい空気が、一瞬にして失ったのは全員が確認できていた。

「分からん。けど、はつきり言える」とは・・・

「はつきり言える」とは?「

「近いうちに仕返しをするだろ?・・・ひょっとしたら明日には

始まるかも・・な

「それはヤバイな。みんな、これから気をつけんとな。少なくとも、アイツの誘いには絶対に乗らない方が良いな・・・今日は遅い

から帰るわ。」

「そうだな。じゃあな

一同は不安を抱いて、家路に向かった。

同時連載中なんで、そちらの方もよろしくお願ひします。

リアル狂説しへ 戦の前の開会式

チャチャン チヤン チヤチャン

数日後、日曜日の朝に、ターミネーターの着信音が響いた。

「はい・・もしもし・・・」

朝早いせいなのか（厳密に言つと、時間は正午近くをさしていた。）、愛子はだるやうな声で電話に出た。見る限り、あまり意識はないようだ。

「え、藍里？珍しいね。こんな時間に・・・そう、もう昼なんだ。それで、話つて？」

愛子はしばらく話を聞いていた。その内、愛子に笑みが出来た。

「ふうん・・・面白そう！それつてどいで？」

愛子はその場所を聞いて驚いた。

「へつへうそ！？あの『幽霊病院』…？」

時間は2時13分。一人を除いては全員が集まっていた。

「しかし、藍里も考えたね。ここでもまた甲斐を驚かそくなんてね。でも、アイツ来るのかな？」

「大丈夫。甲斐には『来なかつたら、学校で幽霊を信じているお子様だと言つふらす』って言つたから、『絶対来てやる！』って言つてた。」

「・・・意外と恐いね。藍里は。」

「しかし、アレだな。おれは初めてこここの事知らないけど、この『幽霊病院』つてさ、どんな場所？」

疑問に思つた孝之が藍里に尋ねた。藍里は、おじいちゃんから聞いたといつ昔話を静かに語りだした。

それは、この沖縄が戦時の頃の話

その当時は、当たり前のように戦争での負傷者も多かつたという。そのため、医療道具も機器も満足にないまま、あちらこちらで小さな病院ができた。その中でこの病院には、道具も機器も十分にそろつっていた。しかし、この病院に治療を受けに行つた人たちが帰つてくることは無かつた。

「なんで？道具とかも揃つてゐるのに人が死ぬのか？やっぱり、医療ミスとか、どうしても助けられない患者がいたとかか。」

「ううん。私もそう思つたけど違うみたい。あくまで噂だったんだけどね。」

当時のこの病院の院長が治療している患者が田の前で死んだ事から、気が狂つてしまい、病院の医師達や患者を持つていたメスで全員殺したらしい。

「・・・つてことは、この病院にいる幽霊つて・・・・

「当時の院長な」

孝之の顔から血の気が引いてくる様子がよく分かる。今の孝之にはさつきまでの元気はほとんど消えうせていた。

「といつても、私も初めて来るから単なる噂話とも思つけど・・・あ、きた。」

藍里の田線に田を向けると、この場所の主役が顔面蒼白で現れた。あいつ、沙次田甲斐が。

リアル肝試し～戦の前の開会式（後書き）

超久々に投稿したぞ――
とりあえず2話書いたのでよろしく

リアル肝試し～ゲームスタート（前書き）

ここからひとつホラーにしてひとつ必死に製作中です。
途中から飽きないで下さい

リアル肝試し／ゲームスタート

「『丁寧にたくさん呼んでくれたな・・・

やつぱり氣のせいではなかつた。甲斐の話し方につもんの霸氣の
よつなものが全く感じられなかつた。それに、どんなに顔を見ても、
やつぱり顔面蒼白になつていて。しかも、少し声が震えてて、緊張
してゐるのか、ポケットから手を出そとしない。

「どうした愛子。俺の顔になんか付いてるのか？」

「いや、幽靈が憑いてそつな・・・

「幽靈つていうな・・・オバケと呼べ。」

・・・相当同様してゐるな。これは。

「え？ 幽靈が怖いの？」

挑発するよつな愛子の話し方・・・いつもなら全力で否定してや
るが・・・今の僕にはこつ言い返すしかなかつた。

「・・・オバケの方がかわいく聞こえるだろ？」

・・・話を進めよう。こんな事を言つてる場合、じやない。

「・・・で？ 僕呼んだ用つてなに？ さつさと話して終わらうぜ。」

「そつか。じゃ、今からルールを説明するよ。その前にちよつと
くじ引いてみて。」

何か調子狂うな、コイツ。とりあえず僕たちは（僕はようやくボ
ケットから手も出せて）、藍里の持つている六の開いた箱から丸め
られた小さな紙を一枚ずつ取り出した。

「じゃ今から、紙に数字の書かれてゐる順に一分ごとに中に入つ
ていつて。そして、病院の中の部屋の中に箱を置いてあるから、自
分の数字の箱を持つて帰つて来て。分かつた？」

「・・・つまり、俺は1番最初に入つて一分後に2番の人に入る
わけだな。俺は1番の箱を持つて戻つてくる、つてことだな。」

「うん。そう・・・っへ？」

僕がそう聞くと、全員がビックリしたようだつた。間違ひなく、

僕が一番ビックリしているのに・・・

—

僕は一目散に病院に入つていった。院内に入るまでに、僕は一度も振り返る事は無かつた。

「いやあ、アイツもツいてないな。まだか一番手つてキツいだろ。

明彦が同情するように言った。

「オレ2番だしなあ・・・」
俊がため息をついた、その瞬間だった。

「 · · · 甲斐？」

根拠は無い。
ただ嫌な予感がした。

リアル肝試し～ゲームスタート（後書き）

夏バテに気をつけてください

リアル肝試し～遭遇

現在2時半、

昼間の時間帯のはずなのに、どこか空が曇っているようだつた。カラスが飛びまわつたり、妙に風が強く吹き出しだしたりしていた。この雰囲気が良くないことを、一同が気付いていた。

「・・な、なあ、なんだ今の？明彦・・」

それはオレも思つていた。けど、考えられることが一つしかなかつた。

「・・たぶん出たんぢゃないのか？」

「出たつて・・・ナニが？」

孝之がおそるおそる聞き返してきたが、返事はしなかつた。この病院の事を知つていればすぐに気付くだらうと思つたからだ。

「・・ウソに決まつてるだろ？なんで幽霊が出たつて言い切れるんだよ！？」

予想通りの答え方だつたが、オレだつて完全に信じたわけじゃない。むしろ、信じられないくらいだ。

「オレだつて信じたくない。けど、アイツが叫ぶつてよっぽどの事が起きてるのは間違いないんだ。オレは中に入つて調べてくる。」

「私も行くよ。なんか不安になつてきた・・」

全員が不安に駆られ、藍里を除いた一同が病院内に入ることを決めた。

「あいつは行かないのか？」

愛子に尋ねた。

「藍里つて靈感があるみたいだから、中には入りたくないみたい。

」

「そうか・・」

とりあえずオレ達は病院の中に入つていつた。中の様子は、錆びが目立つて臭いが悪く、灯かりも無い、まさに出てきそうな場所だ

つた。外も暗いから、灯りになりそうなものは、各自が持っている携帯電話ぐらいだった。

「・・・ったく、臭いつたらないぜ。」

「仕方ないじゃん。戦時の病院だつたらしいし。それにしても、そういう時代にしては、結構立派な病院建てられたな。」

言われてみればそうだ。戦時の病院のイメージつて、テントで治療してるとか、広い小屋のよつたな場所のよつたな気がするが、ここは3階建てだ。今現在見たら、電気器具や道具とかがそろつてないが、施設自体は、本当に立派なものだ。

「ツツツ・・・　　ツツツ・・・

奥のほうから足音が聞こえてきた。

「甲斐？　甲斐か？」

オレは足音のする方に向かつた。しかし、途中で違和感を感じた。

今のは革靴の音だ。

アイツがどんな靴を履いてたか知らないが、間違いなく革靴のはずがない。一体誰なんだ？ 答えはすぐにやつてきた。

「・・・な、なんだよ・・・これ・・・」

ライトを照らしたものは、着ている白衣と手に持つたメスに血が滲んだ、恐ろしいくらい前傾姿勢の男がいた。

リアル肝試し～遭遇（後書き）

随分久々（執筆のたびに思つ）に投稿です。

ちなみにこの話で60話みたいですね。この小説で頑張つていきました。

「へえ、それは大変だつたな」

「だろ? しかも2時間くらい追われたあげく、その白衣の幽霊を演じたのが甲斐だつたんだよ。しかも藍理と組んでやがつた。」

現在、夏休みのあけた九月、

明彦は夏休みに起こつたある事件を健に話していた。今でこそ怒りに満ちた声で話しているが、その時の明彦を含めた全員が本気で泣きやうだつたといつ。健はそれを笑いながら聞いていた。

「・・・なあ、これ笑い話ではないんだが・・それは知つてるよな?」

健は、机にうつ伏せになつていて。別に気分が悪いわけではない。単純に笑いをこらえているだけだつた。

「いや・・分かつてはいるんだけど・・・笑てしまうんだつて。聞いただけじゃ、こんなのは騙されるわけ無いじゃん。なのに見事にはめられて・・・普通おかしいって! アハハハハ!」

明彦は両手で顔を隠すように覆つた。あの場所の雰囲気と、そろえられた計画と小道具で確かに本物と思つていたが、冷静に考えてみれば、いくらなんでも幽霊がメスを持つていてるわけが無いし、すぐにはるはずだろ? という以外に浅い内容だつた。コレで騙され続けた明彦たちは実際に面白い。そう思われても仕方ないだろう。

「・・・それにしても、良く笑うようになつたな。なんだかんだ学校、楽しんでるじゃん。」

明彦としては話題を変えたかつただけだつたのだが、この質問に對して、以外にも真面目に答えた。

「そうだよな。けど、以前のおれならこんな事は無理だつたと思うんだ。おれがこうしてられんのも、明彦たちのおかげかもな。」

「まあ気にはんなよ。俺たちは当然の事・・・・・」

「ま、明彦自体なにもしてないけどね」

「今度俺と勝負してみるか？おい」

自分から話題に出してなんだけど、明彦なりに照れを隠していた。自分達のした行動が間違つていなかつたようで嬉しかつたのだろう。自己満足でも、当の本人が良い意味で変わつてているのだから、自分達にとつて意味のあるものに感じた。

「・・・ああ、話変わるんだけど、なんで北斗軍団つてできたんだ？やっぱ何か理由があつて造られた組織だとか・・・」

・・・明彦は凍りついた・・・

「待つた。今甲斐は居るか？」

「うん。あつちにいるけど、呼んで・・・」

「別に呼ばなくつていい。場所を変えよつ。」

図書館にて

「移動の必要つてある？」

「アイツは自分が絡む昔の話がキライだから、本人の前で話せば俺たち一人の命が無いからな。」

明彦は少し遠い目で、窓を眺めた。静かな図書室という状況で健は緊張していた。

「ていうか、まず軍団ができるから順に話すよ。・・・いやー懐かしいな・・俺たちが一年の、丁度この時期の話だな。まだ俺たち四人・・いや俺と俊だけが普通に仲がよかつた頃で、アイツが無口で無愛想な不良だつたな・・・」

・・・そして、時は一年前に遡つていいく・・・

ちょうど一年の九月ごろ。ぶっちゃけ沖縄は年中そんなに寒くはならない場所だから基本的には暖かい、が、地元の人間でも危険な時期はあるものだった。七月から九月、間違えたら十月の上旬あたりまで蒸し暑い日々を送らなければならない。

・・・細かい日付は忘れたが、珍しく蒸し暑くもなくただ涼しい風が吹いていたあの日、確かにオレたちは初めてあつた・・・

「げつ。体育館使われてんじやん」

給食を食べ終わっての昼休み時間、やつぱり学生というのは遊ぶのが好きなんだろう。暑くても体を動かした方が人はたのしいものなのだろう。

「まだ始まって十分しか経っていないのに、何だこの人の多さは！？ 俺たちこの時間暇にするのいやなんだけど・・・どうする明彦？」

「オレたちといつても二人だけなんだが・・・待てよ・・俊

！思いついたぞ。」

「なんだ。いい場所思いついたのか？」

「今日は涼しいし、屋上で寝ようぜ」

・・・俊はため息をついた。

「おお！結構涼しいもんだな。よく思いついたな」
・・・はつきりいって、今日は動きたい気分ではなかつたし、もともと今日はずつくりしようと想えていたから、のんびり出来そう

で涼しそうな場所を考えてみたら、なんとなく屋上がでてきたのだ。
けど、はつきり言つのも気が引けるから少しこまかすこととした。

「ま、オレにかかれば……」

「おい誰かいるぞ」

殴つてやろうかと思つたが、怒りを抑えながら後の指の指す方を追つた。男はフェンスに座り運動場を眺めるよつこぼんやりしていだ。変わった点があるとすれば、中学一年生が煙の出る棒を口こじている、という点だけだろう。

「・・なんかアソツ、タバコ吸つてんだけど・・・アレ絶対ヤンキーだよな。」

俊は一度ドアを閉め、オレに「いつまつた。屋上に入らす、オレたちは一度会議することにした。なんとなく、バレないよつに小声で会話を交わした。

「ほほ間違いないと思つが・・・なんかおかしくないか?」

「いや、おかしいって、なにが?」

「いや・・なんかよく分からんけど、異和感を感じるんだ・・」

「意味がわからんけど、つーか『違』和感だから。なんで感じ間違つてんだよ。なんだ?お前の頭はナタテロロで出来てるのか?」

「誰がナタテロロだ!つーかお前も!『感じ』じゃなくて『漢字』だから。お前もう一回生まれ変われよ!」

「気がついたら、なぜか言い争つていた。・・・原因は覚えていない。知らないうちに小声からただのロゲンカのレベルの音量になつていた。

そんなときだつた。

「・・・あんたらなにしてんの?」

フェンスの男に話し掛けられていた。オレたちはなにも言い返すことが出来ずに黙つていると、男は口を開いた。

「まあ立ち話もなんだから、そこで話そう。」

「・・・そこで・・なにをしてたんか？」

・・落ち着かない話し方で話し掛けてしまった。

「何つて・・・タバコすつてたんだが。ここ意外と誰も来ないからのんびりできる場所だつたんだけど・・・結構珍しい事もあるもんだな。」

オレたちはお互に初対面のはずである。にも関わらず、男は果然と会話をしてきた。何を話せばいいのか・・・

「やつと見つけたぜ、カイイ！」

のどかな午後を破る声が屋上に響いた。屋上に八人の見かけない男たちが現ってきた。雰囲気は一気に悪くなつたのがすぐに分かつた。

「これだけそろえれば、お前もすぐに殺せるぞ！大人しく死ね」「・・・まだこりないんですか。見た目と比例して頭悪いんですね。先輩は」

確かに。仲間を連れた男は、今時あんまり見かけないリーゼントの髪型でサングラスと濃い外見をしていた。ぶち切れた男は仲間と一緒に襲い掛かってきた。

「今日こそ殺してやる！殺れ！―」

「やつてみろよ、ザコが」

迎え撃つように、その男も大群の元へ駆けていった。

思えば、ここからかもしれない・・・まだあるはずもない名前と、メンバーの無い軍団が広げる物語のゼロからの始まりは・・・

やつと書きたかった話を書けてるんで、むっちゃ嬉しいです。結構力入れて執筆しているんで、よろしく！

CHRONICLE -O- 『甲斐』（前書き）

超久々です！――！

書き方を大分変えてみました。これからちょくちょく投稿できる
ように務めたいと思います

正直言つて、1人対8人。どっちが有利なんて言つまでもないはずなのだが、決してそういうわけでもないようだ。カイがポケットに隠し持つていたペットボトルを取り出し、中に入つた水をぶちまけて目を眩ませると、その一瞬で一人一発ずつ攻撃を入れて、全員を倒してしまつた。しかも、彼の与えた一撃は、アゴ、金的、わき腹といった、ほとんど鍛え様のない部分だけを的確に狙つていた。

「……つたぐ、初めて炭酸水を飲めると思つたのに」

・・少し訂正。中に入つた『炭酸水』、だつた。あれで目潰しはヒドイな・・・

とか思つてゐると、カイがこちらに振り返り近付いてきた。後ろには八つの死体・・・ はつきり言つて、殺されると覚悟した。

「大丈夫か?」

「ま、まあ大丈夫・・だな」

かなり意外な一言。この男は訳が分からぬ。煙草を吸つてたり、ちょっと変わつた口調で、十秒ちょいでヤンキーたちを叩きのめしたり・・・かといつて、俺たちの心配。本当によく分からん。

「じゃ、いいか。大体こんな感じだから、もう俺には関わるなよ。一人のほうが好きだし。」

カイはそこまで言つと、屋上のドアに入り校内に戻つて行つた。

「なあ、カイつてどんな奴？」

隣の席の友人にそう聞くと、友人は恐る恐る聞き返した。

「カイつて・・・あの紗次田甲斐だよな？」

「多分ソイツかな？ 昼休みに屋上にいる・・・」

友人は席を寄せて、小声で話し掛けた。

「アイツには関わるなって！ アイツにろくな噂は無いぜ。この前だつて上級生数人を氣絶させたらしいし。あんなのに関わったら命がいくつあっても足りないって。」

いろんな友人や先生に聞いてもこんな感じの話しか聞けなかつた。つまりは、この学校においての彼のポジションは『大問題児』というのが一般的のようだ。彼の友達にも聞いてみようとしたが、基本的に人とほとんど関わろうとしないらしく、ほとんど友達もいないそうだ。

「学校になにしに来てんだか・・・」

独り言のように呴いたつもりだが疑問になつた。友達がいらないなら学校に来る必要は無いし、ケンカなら学校じゃなくてもできるし。・・・ますます訳が分からなくなってきた。少なくとも、不登校ではないのは確かだ。

（明日、昼休みに聞いてみるか）

答えるとは思えないが、本人に聞くだけ聞いてみる事にした。

「で？ なんでオレも来る事になつてんの？」

「しようがないだる。一応甲斐とまともに関わつてゐるって俺たちだけだし、・・・それにアイツ・・・」

「？ 明彦？」

「・・・じや、開けるわ」

（もしかしたら・・・アイツ良い奴かもしれんし・・・）

屋上の扉を勢いよく開けて、俺たちは後悔した。昨日より遙かに多いヤンキーの群れに、その中に甲斐が囮まれたような図式になつていた。そんな光景を見て、（少なくとも）俺は何故かこつ思つていた。

（ 納食、食べ過ぎなきやよかつたな・・・）

「んん？！なんだお前等は……？」

こんな世界とはほど遠い俺たちはまともに喋る事も出来なかつた。ヤンキーたちからの熱い視線・・・とても耐え切れなかつた。その時、

「観客いる方が盛り上がるつしょ？」

甲斐の声だ。そう言つた直後にいつの間にか手にした『なにか』を上に軽く投げた。全員がそれに目をやつた瞬間、2人がなぎ倒されていた。それとほぼ同時に、『なにか』が落下しながら炸裂した。

パン！ パパン パン パパン！

それは爆竹ばくちくだつた。あまりの騒音に耳を塞ぐと、甲斐は讀んでいたのか、手を使えないヤンキーたちを次々と倒していつた。卑怯といえは卑怯だが、あまりに上手くいつてるせいか、そういえなかつた。気がつけばこれだけの間で、半分近くを地面に眠らせていた。

「さて。うるさくしちやつたし、先輩達も戻つた方がいいんじやないすか？教師が来ると思ひますけど？戻らないなら・・・」

「甲斐！後ろ！」

俺が言つたときにはもう遅かつた。甲斐に振り下ろされた金属バットが頭に直撃していた。つい数秒前まで暴れていた人間が一瞬に

して糸が切れたよつに倒れてしまった。

「やつたぜ――おこ、」の間にコロイツを殺せ――今までの怨みを晴らしてしまえ」

動けないでいる甲斐に対し、畠々は武器を振り下ろしたり、足で踏みつけたりしていた。放つておけば、死ぬのかもしれない。

「逃げよげよげ明彦。これじゃ次は・・・」

俊の言つ事が正しかつた。このまま『観客』で面づりになると、ほぼ間違いなくこいつにも来るかも知れない・・・逃げるのは正しい。

そう、正しい・・・

間違つてなんか・・・

「オラアアア！」

俺が何をしたか？考えが出来る前に気がついたヤンキーの後頭部に思いつきり蹴りをしていた。自分でも驚きだ。

「チキショ――やつまつた――俊――お前も手伝ってくれ。」
「つたらお前も共犯者だ」

「ふざけんなあ――なんでそなうなんだよ――！」

「叫んでねえでさつさと手伝え！猫みたいな顔ヅラしゃがつて――！」

「誰にネコニャーニャだ、ゴルrrrrrrア！！！
「・・なにキしてんだ、こいつ。・・まあいいか」

何故そうなったのかはよく分からぬが、俺たちは甲斐を助けに
やけくそに暴れだした。

痛つてえ・・・

殴られたからではなく、全く使い慣れない拳がことごとく使われているからだ。喧嘩なんてほとんどしたことがないのだが、よりよつていきなりの殴り合いでだ。緊張するしないでなく何も考えずに、手を、足を出し続けた。けど、それでどうにかなるもんだ。残る敵は4人。

「手間かけさせやがつって・・・クソガキが

しかし、こっちの方がダメージが上なのが明らかだ。動くこともままならない。相手は待とうとうそぶりすら見せず、こちらに近づいてきた。

「いや、俺たちはよく頑張ったよ・・・俊、お前逃げとけよ
「・・・オレも動けないんだって。・・・へへ、イタチの最後つ屁

つてヤツだ。」

「どこの力〇ロシードだよ・・・」

それが俺たちの最後の会話に・・・

ならなかつた！

「バカめ！」

ヤンキーの背後から、復活した甲斐が後頭部に肘打ちを強打させていた。残り三人。それにしても『バカめ！』って……悪役かよ。

「さて……あと一回でまとめて片付けるか……」

小声で言つていたが、その言葉は明らかに全員に届いていた。

「一対三で、どうやってオレたちと戦^ヤるつもりだ？」

「……一人で、って言つたか？」

甲斐がヤンキーの後方に少しを田をやるとそこからは、

何もなかつた。しかし、効果は十分にあつた。ヤンキーたちが甲斐の視線を追い、一斉に振り返つた。その瞬間、甲斐は敵に目がけて走りだしていた。気配に気づいたヤンキーが顔を戻すが、その時には遅かつたようだ。

「あばよ！」

真ん中にいた奴は顎への頭突き、両隣にいた奴は顔面に綺麗にラリアットが入つていた。直撃したのか、ヤンキーは反撃をせず、前めりに倒れこんでしまつた。甲斐は、全員が倒れていることをしつかり確認すると、

「ああ～、疲れた！」

と言ひながら、地面に座り込んだ。俺たち以上にケガをしているは

ずなのに、痛がる素振りをさほど見せないし、あの数を倒しきった
し・・・俺は自然に口にした。

「ア、イツ・・・人間じゃないな。」

「・・・ま、でもほとんどが汚い手を使って勝つたようなもんだけ
どな。」

「確かに。ていうか俊、起きてたんだ。」

卑怯といえば間違いなく卑怯だ。しかし、卑怯なだけでこの数を
倒せるもんなのか？

考えた結果・・・・・・さすがに無理かと。

243

「なあ、一つ聞いていいか？」
「別にいいけど。」

突然甲斐が話しかけてきた。割と普通に話しているところをみると、もう回復したんだな。そこは置こといて、甲斐が不思議そうにこいつ尋ねてきた。

「途中から、何故巻き込まれにきたんだ？訳が分からん。」

その後、この屋上での一件は職員会議どころか警察沙汰になつていた。なんせ二十人近くの負傷者がいたんだ、当然といえば当然だろ。結局この事件は、『甲斐の正当防衛』ということで、あのヤンキーたちは一ヶ月の自宅謹慎、もしくは転校を命じられた。俺と俊は巻き込まれた形だから、おどがめなし、つてやつだ。後にこの事件は、生徒の間で呼ばれるようになつた。

「それが『九月の暴動』つてやつ。聞いたことある？」「耳にしたことあるけど、そんな事件だつたんだ。」

それにしても、昔の話を他人にするつて何か恥ずかしいな。甲斐じやないけど、今ならしないだろうとこいつを当時は迷つ事無くしてたからなあ。

「・・・俺も青かつたな」
「まだ十四歳じやん・・それよりさ」
「ん？」

「あの甲斐の質問。なんて答えた？」

健が不意打ちてきに話しがけてきた。確か・・・・・アレ?なんだつたつけ・・・ええ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おかしいな。俺ははつきり覚えてるんだが?」

「いやいや、お前が覚えられてこの話に感動つてやつが……」

「

俺は喋るのを止めた。まだ暑いはずなのに背後から妙に冷えた空気が流れ込む気配を感じた。恐る恐る、ゆっくり振り返ると話の張本人の甲斐が後ろから俺たちを覗き込んでいた。

「……い、いつから聞いてた？」

「そうだな……確か『げつ。体育館使われてんじゃん』って辺りから、かな？あんまり懐かしいから楽しくなってさ……」

楽しいなら目を笑わせろよ、マジで怖いんですけど……ていうか、ほぼ最初から聞いてるよ、甲斐のヤツ。なんで俺気付かなかつたんだろ？……

「ま……そういうことだからさ。他言無用で頼む、な？」

「は、はい……」

俺たちは、ただ頷くしかなかった。その直後、俺たちはすぐに立ち上がり逃げだした（もちろん、全力疾走で）。スタートの遅れた甲斐は追いかけようとはせず、立ち止まつたまま話し掛けってきた。

「あーおじつ、待て！ ジュースぐらーおじつてくれたら機嫌直るかもよお？！」

「知るか、バカやろー！」

俺はそう言って、振り向かずに走りつづけた。走りながら、一つの不安がよぎった。

明日が怖いなあ……

夕日を背に走り去る明彦の姿を見送つて、僕は小さく呟いた。

「やんと言ったじゃん。あのときの言葉……」

たまには昔話も悪くないかもしれない。ジュースはないが、機嫌が良くなってきたし夕日も綺麗だから今日はゆっくり帰らうとかな。

放課後にて（前書き）

久々にバカな内容いってみます。
いろいろパクリなものが入ってるんで、ヒマのある人は調べてみて
は？

「甲斐ー、ちょっといいか?」

僕がなんとなく廊下を散歩中、俊が呼び止められた。後ろから急に呼ばれたから驚きを隠せる訳が無かった。

「つうわつ、びっくりしたあ・・・で、どうしたん?」

「明彦から伝言。一時間後の放課後に『第一次闇ナベ大戦』をするから、それまでにできとうなモノ買って来い、つてさ。」

急すぎだろ・・・ろくなモン準備できないぞ・・・面倒くさいしてきとうじまかして帰らうと考えた時だった。

「ひなみに、来なかつた団員には明日から『マジュニア』って呼ぶそつだが・・・」

「なにそのチョイス!・・・分かったよー行けばいいんだが、チクショ・・・!」

なんだ、このろくでもない罰ゲームはー?とりあえず『マジュニア』は嫌だから、買出し行つてこひ・・・僕はある気持ちで胸がいっぱいになつた。

「アイツを殺す!」

「その様子だと、みんな来たようだな。・・・団長はとても嬉しい。」

少なくとも、『マジコニア』さえなければみんな来なかつた、と僕は思う。知つている人だと余計に嫌な呼び名だし・・・

「各自の材料をこのナベの中に入り込んでくれ」

何処から準備したのか、持ち運びの可能な小さなガスコンロに、大家族向けの巨大なナベ。明らかにアンバランスな組み合わせなのだが、誰も何も言わなかつた。ともかく、教室の電気を消して、真っ暗な闇を作り出して、コンロの火を頼りにそれぞれが『てきとうなモノ』をつっこんだ。できれば、前回みたいなムチャなものが無い事を祈るしかない・・・

「ルールは前回と一緒に。『熱い』とか『不味い』などの反応見せたやつはアウト。大丈夫なら『もうまつしろ』もしくは『優勝しちやつたもんねー』で。新ルールについてだが、口に含む時には『せえーのでDIVE!』か『セメナキヤイケナイ』のみ! 今言つたもの以外の単語を口にしたヤツは強制アウトだ。以上!-!」

明彦、ノリノリだな・・・つーか、やりたい放題すぎだつて。そんなにシマリがないとまたみんなにコソコソ笑われるぞ、オマエ。・・あ、僕もやばいかも。

「順番は・・下の名前をあいづえお順で。まずは・・・

「「「明彦」」

わざとかと思えるボケで、明彦はこの大戦の先陣をきつてみせた。

部屋が暗くて様子は良く分からぬが、多分表情は青ざめているのが目に浮かぶ。

「うー、マジかよ。……………バーのでDHWEE-」

思つたより早く明彦が箸をナベに伸ばしたようだ。明彦がそれを口にした瞬間、通常ナベで聞くはずの音が聞こえてきた。

バリツ バリツボリボリボリ バキツ

・・なんだ、この音は？・・ていうか何食べたんだ、あいつ・・
・僕たちがこの音に気になつていいのうちに音が静かになつていき、
飲み込んだらしく、ゴクッ、っという音が聞こえた。

「もつ」・・・・・

僕たちは驚愕した。得体の知れない謎のなんかを口にして大丈夫といえる団長が存在するのだ。言い切れば、あんたは漢だ。^{おういん}僕たちはただ静かに次の言葉を待つた。

「・・・サル・・・・・・・」

声色としては、少し苦しそうだがちょっと余裕がありそうだ。多分、皆期待しているはずだ。言え、言つんだ。団長、明彦。

・・・・ん?

その一言の直後だつた。明彦は口から多量の吐血・・・・ではなく、いわゆる 口を床にぶちまけた。大惨事この上ない。

「おい、床掃除するから急いで電気点けろー。」

孝之に電気を点けてもらつと、もつとありえない光景を目にした。嘔吐されたものにではなく、ナベの中に何故かガンプラが入つていることに。よく見ると頭部パーツが見当たらない。

・・・・まさか

「明彦・・・・ガンプラの頭を・・食つ・・・・」

あまりの恐怖に、僕の口はそれ以上開かれなかつた。ていうか明彦・・・・

「分からなかつたといえ、無理に食べる必要は無かつたと思つが・・・・」

いりして、『第一次闇ナベ大戦』は最低なオチを迎へ終了した。

明彦 アウト 食べたもの ガンプラ（機体名ザザビー）

大会成績

大会中止

ヤツの恋人疑惑～甲斐の場合

ある日の毎休み時間、北斗軍団は男子トイレでの会議だった。しかし、そんな場所に関わらず会議には確かに熱が存在した。

何故そうなったのか・・・その理由は、甲斐の持つ一枚の紙からだつた・・・

「・・・なんかさ、最近暇じゃね？」

開口一番、明彦がとんでも発言を口にした。明彦は真剣に話しているが、他のメンバー（特に甲斐）にとてもやる気が感じられなかつた。

「いや、暇なのはいつもだと思うけど・・・」

「孝之、お前は分かつてない。俺たち個人じゃなくて『北斗軍団の活動』がなくて暇だ。つてことなんだよ。これがどう状況かわかつてるだろ？」

「いいことじやないか。平和である事は良い証だよ。おれたちはおれたちで楽しんどきやいいんだよ。な、俊？」

「オレも本当にそう思つ。」

「甲斐、お前はどうなんだ？」

余りの反対ぶりに、若干涙田の明彦が甲斐に弱々しく尋ねたが、甲斐は答える素振りを見せないどころか、窓の外を遠い目で眺めていた。

「・・・甲斐？」

孝之が話しかけてきて、意識を取り戻したようだ。甲斐は視線を明彦たちにむかすと、静かに口を開きだした。

「いや・・・なんか、お前らが喜びそつな・・・そんな感じの・・・えっと・・・話題だが・・・」

よほど話しづらいのか、周りを見渡しながら途切れ途切れで甲斐が言葉を発していった。話し終えると、胸ポケットから一枚のかなり折り曲げられた紙を取り出して、投げ捨てるよつに明彦に渡した。その紙を孝之が広げると、一言零れ落ちた。

「・・・え？」

明彦からは何かの文字の列のようなものしか見えていなかつた。気になつた団長は孝之から紙を取り上げて、紙を手にした。

「・・・え？」

明彦が紙を手にしたまま凍りついた。気になつた俊は団長から紙を取り上げ（略）

「・・・え？」

甲斐以外の団員が凍りついた。とつあえず甲斐は（略）

「一応、そこに書いてある文章は本物・・・」

「ちよつと来い・・・」

全て言い切る前に、甲斐は三人がかりで男子トイレまで連れ去られた。

『個室にて』

「アレはなんなんだ？説明しろ」

「いや、見たまんまじやん！説明つて・・・」

「そうじやない。お前から見て、アレはどう見えた！？お前の意見を聞きたい！」

約一分間。甲斐はしばらく言い留まっていたが、決意したよう口を開いた。

「・・・後輩からの・・・・ラブレター・・っぽいやつっぽい・・・

テンパリ過ぎた結果、結局小声と奇妙な話し方で甲斐はそう言つた。

ヤツの恋人疑惑／序盤

「で？その娘の名前は？」

「何これ？新手の拷問？とにかく、話の内容が内容だから団員に無理を言って屋上に移動してもらつた。

「手紙には栗原麻奈くりはら まなつて書いてあつたんだけど……俺知らないんだよね」

「栗原？……ああ！！」

俊がひとり言を呟くと、何か思い出したように叫んだ。ビックリさせんなよ。先に反応したのは明彦だった。

「知ってるのか？」

「思い出した。女子バレー部の後輩だつたな。」

俊の部活・・・の後輩。

「ていうか俊つて、部活入つてたんだ。何部？」

「男子バレー部だよ！たしかに今更説明するの嫌だけど……」

「ふーん、一応交流はあるんだ。んで、どんなヤツ？」

なんで僕こんなに冷静に尋ねてるんだろ。凄え。

「なんちゅーか・・・全然大人しい子、大声は出さないやつって感じかな。バレーかなり上手いんだけど、ロミヨニケーションってヤツが苦手そうなんだよな。」

「よくそんなとここまで見てるな。・・・発情期か？」

「違えよーまあ、女バレの中では何気に入気高い方かな?」

しかし、考えれば考えるほど分からぬ。なぜ僕はこの栗原という後輩に目をつけられたのか……僕なにかしたのか?だとしたら、あいつからの……

(…………ん?)

ある可能性が生まれた。

「…………その栗原つて、普段はメガネかけてる?」
「ああ、そうそう。かけてるかけてる。最近変わったみたいだけど。」

「…………その栗原つて、普段笑うときにややこらえ気味の栗原?」「といつより、口を開けて笑わないうつてタイプかな。」

ああ…………間違いない。確定だ。

「世の中つて狭いんだな。」「もしかして…………」

さすが孝之。もう感づいたのか……

「お前やつぱり知つてたのか」

明彦に突っ込まれた。さすがに気付くよな。今になつて後悔がぶり返してきた。

「知つてるつていうか…………つきしおう……アレがまさかフラグになるなんて!」

「何があつたんだ？」

団員たちが顔を寄せてくる。実際話しづらいから助かるのだが、ムサいんだよ、この空間。

「案外長くなるけどいいか？」

団員は黙つて首を縦に振つた。

「あれは確か・・・・・4日前の買い出しの時だつたな。」

「材料は・・・・こんな感じか」

その当時の夕飯は、なぜか鍋になつた。あんな光景見て嫌な時つてのに・・・しかし、僕にはある楽しみがあつた。それは・・・

「B・Zのベスト、『ULTRA Pleasure』、やつと見つかつたわ！」

歌の一つでも歌いたい気分だ！そんな喜びに満ち溢れているときだつた。

「いいから、いいから！」

声のほうに目をやると、二、三人の酔つ払いに誰かが絡まっていた。酔つ払いが出るには大分早い時間だ。普段なら無視しているところだが、機嫌が悪くなつたのもあるが、絡まれているのが同じ年くらいの女子という、世も末的な光景に耐えられなかつた。

そこから、僕にも意外な行動に走っていた。

材料の大根を手にして、それで酔っ払いを殴つたのだ。

「え？」

偽りなしの、全くの本音。思わず声に出ていた。周囲が呆然としているスキに、

「に、逃げよ！」

白い凶器と知らない女の手を掴んで、とにかくこの場を後にした。

ヤツの恋人疑惑／回想中

「ふう、ここまで来ればいいだろ」

そろそろ日も暮れてきて、夜になろうとしていた。自宅のマンションの前まで来たのはよかつたが、どうも入りづらかった。殴った拍子に材料の大根は真つ二つだし、今夜は鍋だし、知らない女子を連れてきたり……

・・・・ん？ 知らない女子？？

握られた左手の先をゆっくり田で追つていいくと、先程の女子がいる。そのまま連れてきちゃつたらしい……

「・・・あの、・・・あなたは？」

少なくとも誘拐犯ではないと言いたい、なんて言つて信じるかな？・・・・・すげえ微妙・・しかも、なんか睨まれてるし。

「・・・・・別に気にしないでいいから。忘れてくれると助かるんだが・・・」

「・・・・・じゃ、名前だけでもいいですか？顔がよく見えないもので・・・」

忘れる気無いじやん、この人。

「よく見えない・・?メガネかなんかつけてる?」

「はい・・・でも逃げる途中で落としたみたいで・・・」

なるほど。睨まれてるんじゃなくて、目を細めて見てたのか。つか、原因僕じゃん。メガネを探しに行こうにも、もう時間も遅いし、あるいは誰かが踏んで壊したか拾つたとかありそuddash;うだし・・・

「コンタクトは？」

「ありません。」

マジかよ・・・仕方ない。あのコースしかないな。

「・・・よし、新しいの買おう」

「え？ でも・・・」

「俺は自分がモヤモヤすんのが嫌いなだけだからー心配したいなら自分の家の帰り道でも心配しろ！！」

言い過ぎたのかどうかはよく知らないが、僕は視界の弱いこの女子を連れて専門店まで向かった。

「・・・速く選んでくれ。頼む・・・・・・」

すでに時間は八時を過ぎていた。もうかなりの時間オーバー（材料夕方から持ちっぱなししだが大丈夫かな？）。僕も無事じやすまない気がしてきた。

「・・・待つてください。もう少し」

「これで四回目なんだが・・・・・・」

「もうすこ・・・・・・ありました。」

三十分かかった末、青いフレームの小さなメガネに決定されたよ

うだ。本当に長かった……。女子がメガネをかけたまま」ちらを見ると、まさかの

「……どこかで会いました?」

といつ、時代を感じさせる殺し文句が口に出てきた。

「……知ら・ね。さつさと……いいから……ふ……そのメガネ買って……帰……らせて。」

笑うのを我慢するのがこれ程苦痛とは……違う意味で顔見て話せなかつた。僕はメガネを取つて購入しに行つた。

「ひどい……出費だつた」

わざわざベストアルバムを新品で買つて、自費で材料を買つて、あげくに知らない他人のメガネを買つ。なぜこうなつたんだらう……おまけに……

「本当にありがとうございます。家まで送つてもらえるなんて……」

あんな光景見て、一人で帰らせる奴つているのだろうか。それとも僕が変わつてゐるのか?……すこいどうでもいい……

「名前、やっぱり教えてもらつてもいいですか?……あ、私、栗原つて言つます。」

卑怯な自己紹介しゃがつて・・・名乗らんとダメみたいじやないか。僕は諦めて名乗る事にした。

「・・・紗次田。別にそいつ会つ訳じやないから、こんなんでいいよな?」

「はい。・・・あ、家が見えてきたので、ここままで。本当あります!」

栗原という女子は丁寧にお辞儀をすると、そのまま家の方まで走つていった。途中、振り返つて、控えめな笑顔で手を振つてきた。無視する訳にもいかないので、僕も軽く手を振り返し、振り返つて自宅に帰ることにした。

「嫌だなあ・・・」

自分の一時間後の姿をいろいろ考えて、僕は深くため息を吐いた。
・
・
・

ヤツの恋人疑惑／中盤

「…………といつことがあつたんだ……」

し、視線が痛い……

「テメーヨー……」のマンガの世界の話だ、コノヤロー！」

明彦がそう言つのも分かる。当事者が未だにこの状況を夢だと思っているし。しかし、こんな僕以上に明彦は、涙を撒き散らしながら僕に殴りかかるとしていたが、孝之たちの制止でどうにか少し落ち着けた。

「俺だつて……女の子と付き合ひてえよ……」

やつぱり原因はそれか。ていうかまだ付き合ひてないんだが。

「とりあえず。俺はどうした方がいいと思つ？」

そう、本題はここだ。僕はこのような経験は全く無かつたため、一人でどうできる自信が無かつた。ところが……

「いや、だから俺彼女いないんだつて。」

「オレも。」

「…………しまつたあ！明彦と俊にもいなかつたあ……だが諦めるにはまだ早い。」

「孝之、キミの意見を聞いつけ。」

孝之は腕を組んでじょじょと考へていた。わずか数秒で思いついたのか、孝之は顔を上げて「」と言つた。

「とにかく話は聞べべきだと思つ。逃げたらダメだ。」

「・・・せつぱりダメか・・・

「相手の本音はちゃんと聞いた方がいいよ。自分の思いを全部ぶつけてくるはずだから、考えて返事はした方がいいと思つよ。一応、片思いも立派な恋だし。」

「・・・なるほど、分かった。」

正直、言つてることが分かったような、分からなかつたような・・・最後の辺りの怒言つぽい発言にちょっととイラつとしたが、抑える事にした。

「たしか・・・放課後だつたから、まだ時間はあるな。じょじょと考へとくとするよ。」

僕はとつあえず個室から離れ、教室に戻る事にした。その間、ある決意で僕の胸中は固まつていた。それは・・・・・

(男らしくへじり断りつ・・・)

ヤツの恋人疑惑／終盤直前

時が経つのは早い……今は既に放課後。俺の気持ちも知らずに、屋上のフロンスから野球部たちは声出し合いながら練習をしている。野球部は熱いのに風が妙に冷たく感じた。

「……明彦見てみるよ」

「ん？ 野球部がどうした？」

「……・・・・人が「ミミ」のようだ」

「・・冷静じやないな」

「当たり前だ！」

これから告白されるつて分かつて、緊張しない男つているのか？まあ、作者はそんな経験が無いからなんとも言えないが……とにかく！僕には一大事なんだ。

「つーか、なんで俺もここに？」

「一人でできないもん……相當しんどいもん」

どう思われよつと、僕はどうでもいいから誰かについて欲しかった。それは事実。

「……明彦……歌つてもうつてもいい？」

「えつ、なんで」

「頼む」

「……・・・・・ゆめめえじやあないいアあレも「おもせもおも」、その手えでドア「おう開あけましょうウオウ！」

「……やつぱナシで」

声は良いのに、歌い方が・・・むしろ、声が若干似ててムカツク。この状況での選曲もうちょい考えてくれよ。確かに、-Zは好きだけど、今はタイミング違うって!

「・・・は」

10?

「それが仕事だ！」

卷之三

明彦の声から冗談の色が消えた。というより、僕の一言で怒りがわいたらしく、肩をガツチリつかまれた。

「お前が何しようと別にいいが、俺の前で情けないことだけは許さん。今逃げたらあの娘を裏切ることになる。お前が逃げたいなら勝手にすればいいが、その時はお前を殴らせてもらいつ。」

この言葉が、さっきまでウルラソウルを歌つてた人と同じなんか？けど、確かにここで逃げたら男がすたるどころか、裏切ることにもなるからな。よし、決めた。話を全て聞こう・・・明彦のおかげで目が覚めた気がする。

「臆病なお前に団長命令だ。逃げるな、たてやかえ！」

噛むんじゃねえ————！ でも大分落ち着けた気
がする。

(明彦・・あんがとな)

「ん、なんか言った？」

「・・いや別に・・・・・」

一回で聞けよ、恥ずかしいじゃん……けど、調子に乗せてもアレだから言わない方がいいかも。つと。

「もう少しそろ時間だ。適当に隠れててくれ。見てるよ、俺は逃げん。」

「もちろんだ。逃げたら脱退だから」

ハーデル高くなつてね?とにかく、明彦はそこに倒れている古いロッカーに入り込んでいった。入る直前、臭つ、って聞こえた気がしたが、今集中することにした。覚悟はできた……いつでも来い!

そして、屋上の扉が開かれた……

ヤツの恋人疑惑～終盤直前（後書き）

明けましておめでとうございます。

この小説、全然まだ続きますが、よろしくおねがいします。
(できれば飽きないで)

ヤツの恋人疑惑／終盤

汚いロッカーに入ったな、サビの匂いがかなりひどい。俺の不満も次の光景で消え去った。ロッカーの穴から、甲斐と栗原氏の姿を確認できた。

（来た！）

叫びそつなテンションを小声でこらえた。

「すみません。少し遅れました。」

素直に謝る栗原氏。それでいて申し訳なさそつつむく顔。・
普通に可愛いぞ。どうする、甲斐？しかし、アイツは

「いややや、べべちゅに気ににしてないかりや」

「・・本当にすみません。」

・・・緊張の塊と化していた。戦えない体になるの早っ！ていうか栗原氏、甲斐の緊張に気付いてないし。客観的に観て、顔を合わせずに謝る女子と緊張で上を見ている友人。自分が何を曰いてるのか、分からなくなってきた。先に気付いたのは甲斐だった。彼女が見てない隙に深呼吸を2、3回行っていた。

（なに？何がしたいんだ、この一人は）

精一杯のツツ「ミ。正直、この光景は全然ツツ「ミ」にいく。ある

意味立ち会いたくない現場だ。

「それで栗原・・さん。一応聞くけど・・・・・話つて?」

甲斐の一言が、約450文字目にしてやつとまともな会話が始まつた。後輩でも、女子を呼び捨て出来ないのは甲斐らしかった。栗原氏は下を向いたままポツリと話した。

「甲斐先輩、好きな人つてあります?」

ド真ん中直球ストレートが、甲斐の一番弱いコースを着いた。甲斐は703のダメージを負つたようだ。

「・・・・・ん?」

顔には出さないが、口元がかすかに震え、目が必死で犬搔きをしていた。激しく動搖しているのがバレバレだった。その証拠に、今聞こえてないフリをやってのけた。

「ですから、甲斐せ」

「ストップ!・・・・その前になんで俺の名前を?教えた覚え全く無いんだけど・・・・」

無理矢理場の空気えたよ、コイツ・・・

「えと、友達とか俊先輩から色々話を聞きましたので。でも、いい噂が聞こえなかつたんですけど」

「へ、へえ。俊も言つてたんだ。・・・なんて?」

「昔はヤンキーだつたとか、面倒臭いヤツだつたとか・・・」

多分、情報のほとんど俊だよな？後輩そんな情報多分知るわけないし……

「でも、私、違うと思つんですね。」

違う・・・・?

・・・・・・・!

まさか栗原氏は

「本当は先輩、凄い良い人だと思うんです。」

あんまり知られてないけど、本当なんだよな。事実、人一倍良いヤツだが、当のアイツは、それを『ただ甘いだけ』と言つている。だから、どんなにいい事しても、気がつけばときとうな誰かがした事にして隠れている。そのことはあまり教師にも知られてない。まあ平たく言えば、感謝に慣れてない、といつこと。

「私を助けた時の、見返りも求める事もなくただ助けた先輩が本当の先輩なんだと思います。だから、私はそんな先輩が」

その続きを言わせないためか、甲斐が栗原氏の両肩に手を置いた。覚悟を決めたか！？

「栗原さん。俺はな・・・・」

声に震えが無かった。いつも落ち着いた甲斐がしゃべっていた。

(イエス か、ノー か。)

少しの沈黙を置き、甲斐は顔を上げた。自然に締まつた顔つきで

アソツは口を開いた。

ヤツの恋人疑惑へ決着

「俺、立体に興味が無いんだ。」

「…………え？」

「…………はつ！？？？」

「言い方を変えよう。俺は一次元が大好きなんだ。」

「一次元ってあの……」

「うん。アニメとか、漫画のアレ。」

何言つちゃってんのアイツ！？冗談だよな？？それにしては甲斐は凄い真顔だし。ていうか知らなかつた。アイツがそんな趣味だつたとは……

「マジメに聞いてくれ。」

（あんな話の後で聞けるか！）

小声でツッコんでみるが、うなずいていた栗原氏は顔を上げ、また顔を真っ直ぐ見た。

「俺を良い奴だと言つてたけど、それは大間違い。俺は自分の利益が有るときだけ動く、オタクな奴だ。」

認めたよ、コイツ。でもこの言い回し、なんか嫌な予感がする……

「でも私を助け……」

「アレは気まぐれ。助けられたと思ったなら、それは気のせいだ

面倒臭そうに頭を搔きながら説明する甲斐。

「いいか？俺みたいな力バ野郎より良い奴なんて、世界中の車の数ほどいるんだ。少なくとも、俺はアウト。ていうか、お前ほどの奴を無視する男がそういうんだよ。」

「先輩は無視するんですか？」

不覚にも俺はときめいてしまった。あんな笑顔でそう言われたらそうなるのでは？ アイツもそつらしく、面と向かって言われ、顔を赤くしてコッチを見ていた。いや、俺に助けを求められても・・・

「・・・・残念だけど、俺はあえてする。全然釣り合って無いし、まだ互いを全く知らない。なにより、立体の造型には飽きてるからな。」

なぜ立体の話に戻る。しかも途中から声が高くなつて、テンパつてるのがバレバレ。ひどい・・・

「・・・・分かりました。」

え、なにが？

「先輩がそこまで言つのでしたら、諦めますね。話を聞いてもらつてありがとうございます。」

軽くお辞儀をして、屋上の扉に走り去つていった。栗原氏が扉を開けると、

「栗原一。」

甲斐が呼び止めた。「——から見えないが、扉が閉まる音が聞こえない様子だと、そこにまだいるらしい。甲斐は恥ずかしそうに鼻の頭を搔きながら、小さく言つた。周囲の音は静まり、ただ風が流れていた。

「……やつは、友達からついでに……三次元にもちょっと興味が湧いたから……」

「……は……。」

栗原氏の明るい声が返ってきた。甲斐がゆっくり手を振ると、扉の閉まる音が低く響いた。しばらくして、俺はサビ臭いロッカーから急いで出てきて、甲斐に尋ねた。

「お前、本当に一次元……」

恐る恐る聞くと、自信満々にハイハイ答えた。

「いや、まさかだろ。」

やつぱり「冗談だったか……お心したような残念なような……

あれから翌日。

「ハハハハハツハハツハツハツハアハハハツハハ！いや、二
次元は無いわ～」

笑いすぎだろ、俊。腹抱えてまで面白いなんて、どうしても思え
ないんだけど。まあ、現実でそう言つヤツがいたら確かに面白いで
はあるが・・・とりあえず・・・

ガツ

「痛つ！急に殴るなよ！」

「限度つてものがあるだろ？」これ以上は肅正といつ名分でボコボ
・

「はいはい、了解デス」

分かればよろしい。

「でも、同じ断り方にして、もつとマシなのなかつた？」

孝之・・・それ言わないで。でも、理由聞いたら納得するかな？

「・・・あ、あの時の俺の中では、重くもなく軽すぎでもなく、
明るい雰囲気で断るにはアレが最適だつたんだ。えつと、なんか・
・

分かる？」

孝巳はしばらぐ腕を組んで、口を開いた。

「……いや、普通に断つても良かったと思つけど
「それじゃ見てくれる人が楽しめないだろーやるなら裏をかくの
が一番だと……」

「そんな現場余計誰も見ないから。」

「……一理ある。」

はあっ、と溜息が自然に出てきた。今冷静に考えてみると

「俺、他に好きなヤツがいるから」

「君にこと知らないから、友達からでも」

「興味ないね」

「うつせーバーアー力！」

「バカめ、どんな男かも見切れんのか……」

ダメだ。僕の頭ではこんなのが浮かべない。ひどい脳内だ……
特に最後の、どこのベジ……

「あ、麻奈だ」

マナ？俊が向いた廊下を目で追つていいくと、そこに栗原が恥ずか
しそうにうつむきながら、廊下の窓辺にもたれていた。

「多分俊じやないのか？バレー部キャラプロテンに用があるらしいぞ。

「どう見てもお前だろ。……とりあえずオレも行くから行くぞ。」

「かたじけない俊……」

ホント、助かつた・・僕と俊は廊下で待つ栗原に赴いた。

「え、どうかした？」

途中、緊張で声が裏返つてしまつた。が、栗原は気にせず（もし
くは気づいてないか・・まあどうでもいいけど）話しあげてきた。

「やつぱり先輩、昨日のウソなんですね。私がここにいるだけ来るなんて。」

・・・・・あつちやー、謀られた。どう言ひ訳すれば僕は助かるんだ?

「けど大丈夫ですよ。他に好きな人がいたら、私かないませんから。」

今、この人はなんと？

「今、他に・・なんて？」

「ですから、他に好きな人がいるからあんな断つたんですね？」

なんで? なんでそんな話に突入していくんだ?

「 そ う な の ？ 」

「オレに聞くなよ！ 知るワケねえーだろ！」

だよな。少なくとも、そういう理由で断つたつもりは全く無い。

「ちよつと甲斐? なにしてんのアンタ?」

「お、愛子。なんか懐かしいな。

「ちよつと良かつた。今ちよつとワケ分かんなくてや、俺……」

「なによその子ーもしかして……」

「待てー多分お前の想像の半分しか当たつてないぞー。」

愛子はこつちを睨みつけると、文字通り、廊下を真っ直ぐやつてきた。弾丸みたいに・・・必要は無いはずだが、逃げよつとしたが、その間もなく捕まつてしまつた。

「しばらぐ田を離した隙に、アンタつてヤツは……」

「でででででつー耳をつねるな、半端なく死ぬーマジ死ぬーーー！」

「うつさいー耳でも切つて、芳一になれ！」

僕は本氣で痛いんだ。なのに、俊と栗原はその様子を笑いながら眺めていた。こつちは冗談じゃないんだよ！

「おいいいいいい、助けるおおーー！」

「バカめ、どうこう技かも見切れんのか。」

俊テメエ・・・見切つてるから助け呼んでんだろうが！ いつまでも笑うな！

結局、誤解が解けたのはそれから十五分後のことだった。

ヤツの恋人疑惑～後日（後書き）

次回より、長編的な話に入りたいと思いまっす！
ではでは

序章～話の始まりにてはかなり分かれりが、ギリギリまでわづだから

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

ただ真っ暗で何も見えない、と思いきや、自分の手足から姿はしつかり見える。妙な状況に入り込んだもんだ。とりあえず周りを見渡してみるが、何があるわけでも無く、闇が広がっているだけだった。

「それにしてもなんだこの状況は？ 気味悪い所に来たなあ

「待っていたぞ、少年よ。」

不意に寒気がした。後ろから得体の知れない低い声が聞こえてきた。振り返って正体を確認するが、そのような姿はどこもなかつた。

「おー、こっちは

視線を下に向けた。声の正体は

新品のように綺麗に整った、クマのぬいぐるみだった。まさかあの声が、この愛らしき見た目のぬいぐるみから発せられたのか？

「あの・・・どちら様で？」

「貴様が来るのを待ち望んでいたぞ。遅かったじゃないか。」

「無視？ それほど質問じゃないと思つが・・・

「どうやつにこに来れたのか・・まあ、そんなことばどうでもいい。私の呼びかけにお前が応じた。まずはそれだけでも良しとしよつ。」

「話が全然見えねえ・・・誰か僕の代わりにここに来てくれないか、300円あげるから。」

「紹介が遅れたな。俺の名はワン。王と書いてワンだ。よろしくな」

「声と顔と名前が一つも一致しないんだが・・・しかも、さつきからコレは、ぬいぐるみが口を開けて話す訳でなく、本体から声が出ているような感覚で喋るから、会話が妙に難しい・・・」

「えっと、ワン、だっけ？俺はどうしてこちに居るか教えてくれないか？全然訳が分からなんだが」

「何、理解してなかつたのか？いいだらう。ずばり君は・・・」

「どうでもいいが、全部の一人称が完全にバラバラだけど・・・少年、貴様、お前、君。いまいちまとまらない奴だな、コイツは

「ズバリ！MEの正体は！御主が集めた、七つの金のキョロちゃんの化身だ。七つ集めた褒美に・・・」

「願いを一つ叶える、てきなヤツ？」

「そう。物分りの早くて助かる。」

よく聞いたら、一人称すらバラバラだ。なんて安定感のない化身なんだ。

「ていうか黙つて聞いてたらあんた、七つそろえて願いを叶えるつて設定、ちゃんと考えて言つてるだろ？ うな？ 半歩間違えたら大問題だぞ」

「なに!? 既にどこかでパクられていたのかーー!?」

お前だよお前！めんどくせーなヨイツ！！！」

なんかハラハラするな、このクマ。ある意味心臓に悪いキャラだ。

「さあYOKOの願いを語つてみる。可能な限り叶えてやるわ。」

基準がさっぱり分からん。コイツの場合、どうから不可能なんだ？

ワン、うぜえ。微妙に急かせる辺りがかなりつぎやー。しかも、テ
ンションが上がつて、若干口調も変わつてゐるし。

「とりあえず俺をここから……」「

出せ、と言おうとしたらい、ワンの後ろから光が差し込んできた。

「ふつ、 そうか。 あなたには無いのか。 謙虚な人だな。」

ワンの体は宙に浮き出た、光の方へ後退しだした。いや、話し聞

いてた？

「聞け！俺は・・・」

「何も言わなくて良い。てめえの言いたいことは分かつてゐるつも
りさ。けど、その言葉はその時の為にとつておけ。人間は、おめえ

が思つてゐぬほど弱くないからな。」

「フン……」

光に溶ける寸前、やみなみを搔きまわし手を振り、最後に叫つた。

「甲斐、またな……」

「また出る予定あんのかー!?

「わつーびつくりした

隣で驚く愛子の声で田を開けたら、なにかの中こいた。シートに座つてゐるの感じ、そうだ

「そういえばこれから修学旅行だっけ?まだ飛んでいない様子だけど、これから離陸ティクオフするみたいな?離陸するときに手を前に出すと勝手に落ちてくつて言つアレ、すげい楽しみなんだよなあ。」

「甲斐……外、見ていろん

沈んだ声に促され恋を覗くと、

「…………雪?」

「今着いたの。」

僕は、自分自身に対する怒りで、あのサイヤの王子のように飛行機内で叫んだ。

「クソツツタレー——

ああ、車内事故・・・

すでに周知の通りかも知れないが、沖縄県には雪は降らない。例えるなら、ベロを人のこめかみに刺せる殺し屋が実在するくらいありえない、と思う。

しかし、大昔に一度降ったとか降つてないとかあやふやな話があつたから、そもそも言い切れない。少し確率が上がつても、せいぜい20奪三振の偉業と並ぶくらいだと思う。

つまり、何が言いたいかというと、沖縄から初めて海を越えた人間にとつて、雪とはある意味テレビの向こうの未知な世界そのものということである。

「でもアイススケート場はあるんだよな。でも雪と氷じゃ違うな
「やべえ、あの中に飛び込みてえ！」

まだ移動中のバスの中、外を眺める人、友達と話をする人、寝ている人と、いろんな光景が広がつていた。
ちなみに

「どうする 団員共？降りるなら今のうちだが？」
「アホか。お前と孝之の数字足しても、負ける気がしないな
「弱い犬ほど吠えるつて言うけど、見事に実践してるな
「女だてらに強いとこ見せなきやね」

三人の視線が交わつた。

「「「せえーのーー」」

明彦　」

俊　8

孝之　2

愛子　Q

「やつた初の一位！」

「くっそ！俺の八連勝があーー！」

「まさか流れ持つてかれたかあ？」

「ていうかいつまでこのゲームやんのー？そんなに樂しくない上に、おれ一回も勝つてないしー！」

四人はインディアンポーカーで白熱していた。

「途中から思つたんだが、この流れでなんで甲斐と愛子の立ち位置が？」

「良い質問だ俊。アレ見てくれ」

明彦は後ろの座席に振り返り、妙な空きのある座席を指した。その一番後ろの席には、孤独の甲斐が両手を前に出したまま、静止していた。

「・・・なにあれ？」

「余程飛行機の重力体験したかったんだな」

「ある意味おれより運が無いかも・・・」

「しつ！何か言つてるわよ」

一点を見たまま甲斐の口が、音の入つてない映像のようになパクパク上下していた。

四人は会話を止め、その声に耳を傾けた。

「あれは・・彗星かな?いや、彗星はもつといいつつ・・・バアツと・

L

四人は絶句した。

「えっと・・・本当に可アレ?」

「愛子・・・あれは詳しく述べられないが、ある一コータイプと同じショック症状だよ」

「孝之、読者に分かりやすくか、」エミが言つた方が速いで、

恐ろしく力オスな会話

「どうするつて、何が？」

明彦は一ヤツと笑みを浮かべた。

「誰がニヤツ、だゴrrrrルア！！」

「凄い巻き舌だけど、誰も語つて無いぞ。聞いえてもナレーション

卷之六

うつさいバカ。運が無いってだけで簡単にキャラが立つ訳無いだ
。

「誰がバカ野郎だ、おい！これでも立派なステータスだぞ！誇りだぞ！」

「落ち着け孝之。何で上見てキレてんだよ」

言い過ぎた。悪い・・

「とにかくだ。お前らが何を騒いでるか知らんが、ナレーションの暴言なんかほつとけ。進行上、一応いないと困るし」

明彦は一つ咳を吐いて言った。

「あれ? ナレーションつておま・・・声聞こえ」

明彦、無視だ無視。

「ルールは簡単だ。アイツの飛行機で止まった時を、見事飛ばしたら勝ち。そんだけ」

「最後のは別に上手くないな

「私も」

「おれも思つた。」

どうにかこまかしきれたが、思わぬ不評を浴び、

「俺は取り返しの・・・・取り返しの付かないことをしてしまつた・・・」

彼もニユータイプになつてしまつた。

「明彦おおおーー!」

果たして三人は、一人の哀戦士を救出できるのか?

まさかの後半に続く!

「でも誰から行くんだ。あんな気まずいのオレは行きたくないんだが・・」

「確かに。あれを打破出来る明彦ぐらいなのに、いつか明彦の仕事なのに。肝心の団長はこれだし」

愛子は一人の隙を見て席を立ち上がるが、

「「おい待て」」

逃走に失敗した。

「だつて怖いのに！アレはキツイって、伝染するって！」

「確かに荷は重いが、そこは耐えてくれ。オレたちがやるしかないんだ、なあ孝之？」

「・・・実はおれも凄い逃げたかった」

両者が睨む。

「と、とにかく！いい加減動かないと話が進まなくて、読者が逃げてくれる」

「逃げる程読者がいる訳では無いと思つ。」

違ひないが黙つてやつてくれ。

「よし一手中に分かれよう。俊とおれでクソ団長をどうにかする。

愛子はアツチを

「もつとじつ・・・バアツと・・・

「・・・・・絶体アツチが重いと思つ」

孝之が軽く手招きして、愛子の耳を寄せた。

「お前甲斐に氣があるんだろ? 大分前のおれと同じ顔だから。」

「ああ、オレも途中から氣付いた。氣付いてないの本人くらいだ

が。」

「どんだけバレバレなのよ!」

だから話進めろよ。ただでさえじょうもない話してんのに・・・

「よしー各自健闘を祈る! 散! ! !

「おーい明彦お、戻つて来おい」

確認。ここはバスの中だから大した動きはほとんど無い。愛子は最後尾の座席まで移動し、二つ隣の席に座った。

「おーい甲斐、無事?」

「いや彗星はもつとじつ・・・・・」

変化無し。ていうか、どうやって元に戻すとかあるのかこの状況?

「もしもーし? ちよつと大丈夫?」

相変わらず口は閉じない。そもそも対処法があるのか分からぬ(作者含め)愛子は戸惑いを隠せなかつた。

「おーい、飛行機はもう降りたぞー。熊本だぞー」

「そんな大人、修正してやる!」

突如前の空席に右の正拳を繰り出した。

「多分悪化してるよね?」

「考えたら、どうやって直すんだコレ?」

「オレもさつきから気になつてた。叩けばどうにかなりそうだけど、すでにひび割れてるから怖いんだよな。」

「うん。始めて15分後のジョンガだよね?かなりギリギリだよね?」

「・・・フラフラしたっていいじゃないかよ」

一人は瞬時に明彦に向いた。

「今、喋った?」

「今なら大丈夫かも?明彦

「とりかえしの・・・」

まるで氣のせいだつたように元に戻つた。

「・・・・・そうか、B・Zだ。今明彦が言つたフレーズは歌詞なんだ。どつかで聞いたと思つたわけだ。」

「てことは俊。B・Zを歌つてたら復活すると?」

一人は頭を抱えた。その原因は

「オレB・Zそんなに知らないんだが、知つてる?」「おれもそんなには・・・」

根本的な趣味の違ひだった。それ以前に、バス中で歌い出すこと
自体にためらいがあった。

「・・B・」以外で探そう。これでは明らかに武器の相性を間違
えている。」

「おれもそう思つ。他の装備を探そう」

一人は団長と向かいあいながら、再び策を練つた。

ああ、車内事故・・・完

「あの、ちょっと・・・私にどうじろつてこひのよ・・・」

「彗星はもつと」ひつ・・・・・

愛子は腕を組んで考えるだけだった。進展の無い展開に、正直うんざつしていた。

「ひうつ・・・・周りは遊んだり寝たりで、自由にしてるつてのこ・・・・何が悲しくて私はこの廃人の救出をしなければ・・・・」

愛子はシートから顔を覗き込ませ、俊たちの様子を少し伺つた。が、二人の顔がうずくまり、文字通り頭を抱えていた。あまりに絶望的な状況に、愛子はうつすら涙を浮かべた。

「ちよつとーこれじゃ攻略法ないみたいじゃないー二話もこんなしうもない話してるので、何で変化の一つも見当たらないのー?別の意味で悲しくなつてきたんですけど・・・・誰か教えてちよつだい・・・・・」

「

「これだ!」

「ん?どうした孝之?」

俊が顔を起こすと、隣の孝之はケータイを見て歓喜していた。

「明彦と甲斐は一ユータイプ的な錯乱をしているだろ?だから、

実際そんなサイト見てあのシーンの後のセリフか何かでやってみよ
うと思つて・・・

「それは助かるが孝之・・・」

俊は言葉を詰まらせた。

「ん、どうした」

「いや、その、な・・・それって著作け」

「俊。言いたいことは分かる」

孝之は俊の肩に、ポンッと手を置いた。

「多分大丈夫だよ」

「この人多分って言つてるんだけど。この人汗かいてるんだけど

「ええい、ままよ!!」この軟弱者!!」

孝之は俊の手を取り、握り拳を作らせてそれを明彦の顔面目掛け
て殴らせた。

バキッ

「いやー、やるな俊は。でもさすがに顔はまずくないか?」

「ちよつと待て!なにオレが殴つたみたい空氣作つてんだコラア
ア!意外にしたたかな小細工かましてんじゃねえぞテメエ!!」

「いや、でも戦いに犠牲はつきものつて言つし」

「オレを巻き込んだだけだろ?が!」

「つるわこな。何騒いでるんだ?」

横から明彦が割り込んできた。

「お前がうるさいんだよ！明彦は黙つて……つて」

「アレ？もしかして復活してる？」

「いやあ寝てたからよく覚えてないが、気が付けばこんなんでさ・

・・どうかしたのか？」

右の鼻から流血している明彦が神妙な顔つきげ尋ねてきた。しかしどうなつているのか、殴られた箇所も赤くなつていてにも関わらず、それに対する発言は全く出てこない。

「あ、あ・・・明彦・・鼻・・鼻が・・・」

「・・・・ハナ？ああ鼻水か！」

・・・・血？」

明彦は凍りついた。

「・・・・ええ、と、寝て、いる間、オレは、一、体、？」

「あ、明彦は休んどけよ。ヘタに動いたら血が止まらんだろ？テイツシユ渡すから、これでも詰めて上向いて休んどけよ。ていうかさつさと寝ろ。」

「お、おお？なんか知らんがありがとな」

明彦が口を閉じるのを確認すると、一人は最後部の座席に席を移した。

「しゅ・・しゅ～ん！孝之い・助かつたよおお！私、もう駄目かと思つたんだよおおお！――！」

愛子も相当追い詰められたらしく、ほとんど涙目になつて一人に助けを求めた。

「先生！早く、早く甲斐を助けてください……！」

「落ち着いて下さい！我々も全力を尽しますので」

「なんでノリが医療ドラマ？」

俊は握り拳を作り、右拳に一つ息を吹きかけた。そして、

「宇宙天地 与我力量 降伏群魔 迎来曙光 吾人左手 所封百

鬼 尊我号令・・・・・・・・

「ちよ、俊！？何唱えてんの！？」

「多分アニメ版の地獄先生っぽい経文だと思つ・・

「無に還れ！…」

俊の振った右拳は、見事に甲斐の無防備な側頭部に直撃した。瞬間、甲斐の目の色が、元の若干死に掛け氣味の色に戻った。

「おお！甲斐が元に戻った！！

「やつた！」

「これで一件落着、て感じかな？」

「・・・・おい

甲斐が静かに一言溢した。

「・・・今俺を殴ったのは誰だ？」

除々に顔を上げ、全員を見つめた甲斐の顔は無表情、だが、確かに怒りの色があふれ出していた。

「誰・な・ん・だ？」

一人は甲斐から目を逸らしつつ、俊に視線を向けた。

「え？ ちょ・・・・・マジで？ マジで言つてるの？」

「心配するなつて、俺もそこまで鬼じゃない。一応お前にも選ばせてやるつて」

俊は安堵のため息を吐いた。

その刹那、

「火葬と土葬、どっちがいい？」

甲斐はシートから立ち上がり、数えるように指を折り始めた。俊から血の気が引いていくのは、自身にも理解できた。

「ま、待つて、話し合おう。まだ墓予約すらしてないからそういう話はまだ早いからやめた方がいい・・・」

「大丈夫だつて。俺が立派なもの造つてやるから・・・」

「そんな殺生な・・・」

ウボアアアアアアア・・・・・・・

湯煙の観者たち（前書き）

またもううらうらない話です・・
せきせきせきせきせきせきせき

「いやー極楽だ、極楽」

「温泉なんて、おれ初めてだよ」

「まったくだ。しかもここ露天だからな。非の打ち所が見当たら
ない」

あの後、明彦たちは初温泉に浸かり、ご満悦に感想を述べていた。

「でも俊にはさすがに悪いことしたなあ。結局旅館来ても温泉ど
ころか、川に浸かりかねない勢いで連れて行っちゃつたし」

「・・・ゴメン甲斐、ほとんど笑えないんだが。ほとんど事実な
だけに」

「いやホント、反省してるって

確かに甲斐にはやりすぎた事実はあるが、実際覚ましにグーパ
ンをされては、誰だつて気分悪くなるに決まってる。ていうか、気
分の良くなるヤツを募集したいもんだ。

「甲斐を弁護する訳じゃないけど、向こう側、いや向こう川にい
るけど、一応うなされてたから、大目に見ても良いと想つよ。逆に、
よく我慢できたな、みたいな」

「一理あるが、それ以上にオレの後処理を評価してもいいんじゃね
ーかー?」

実を言つなら、俊の負傷が表立ち、旅行の中止を危ぶまれたが、
明彦の話術により最悪の事態だけは避けられたらしい。

「つたぐ、世話を焼かせる団長だぜ、バカ野郎」

「おい、今のセリフそつくりそのまま投げ返すぞバカ野郎。」

「嫌だバカ野郎。あ、そうだ。俺はあのサウナに入つて来る。」

甲斐は湯から揚がると、小屋よりも小さいだらうサウナ室に真っ直ぐ歩いて行つた。

「冒険家だな。オレは自主的に行こうとは思わないな」

「だから、反省してるんだって。口にするのが恥ずかしいんだよ」

「孝之・・・」

明彦は孝之の肩に手を置いた。

「アイツ、さつきだだ漏れてたんだが」

「え、マジ?」

「おお、懐かしいなー」

北斗一人の浸かる辺りに、背の高い男とやや目付きの悪い男が入つてきた。

「お、お前は・・・・ヤンキー君とノッポちゃん?？」

「殺すぞお前ーー。」

怒りのあまり立ち上がる一人。

「冗談だよ。だからさ・・・・ほら・・・おま・・・とりあえずタオル取れるぞ」

一人はあらわにされたフルーツポンチを、恥ずかしがつて手で覆

わす、冷静に座り、湯に戻った。

「・・・お前やつぱ名前忘れてるだろ？ そりなんだろ？」

「・・・・・・こやつ、まさか」

「おれは覚えてるよ。明彦風に言つと、ヤンキー君が良で、ノックちゃんが瞬、でしょ？」

「合つてるけど、全然釈然としねえ・・・」

「で？ 南斗ナント力以来の登場のお前らがなんか用か？」

「嫌なとこ覚えてんじやねーよーま、とにかく集まつてくれ」

瞬は言葉にじりりいのか、さつさと比べて小さな声で言った。

「おれよつ、旅行イベントのお約束として、女子風呂を覗きに行こうと思つ。間違えば修学旅行は中止になりかねない。しかし、それでもロマンを求める勇者がいるなら、親指を立てたサインをくれ。」

無論、良は親指を立てた拳を瞬に表示するが、当然と言つべきか、あとの一人は表情も動きもないまま、黙つていた。

「ま、無理にとは言わな・・・」

「待てよ瞬。これが答えだ」

明彦が水中から出したのは、親指の立てられた握り拳だった。

「いい返事が聞けて嬉しい。行くぞ同士よ」

「任せろ同士よ。そういう訳だ、孝之もど・・・」

「あ、おれバス」

「そ、そつか・・・」

そして三銃士の、樂園を目指す旅が始まった。

「で？具体的なプランはあるのか？」

明彦は瞬に尋ねる。すると、瞬は誇らしげに腕を組んで笑う。

「……無いな」

なんとも頼りない返事を堂々と返してきた。良もそれは初耳だつたらしく、呆れたように口を開けていた。

「ちょっと待て。何も考えてないのか？」

「当たり前さー。プランなんてのは、その場しのぎで考えてこそ面白いものなのさ」

「なぜか言い訳にしか聞こえないんだが・・」

「奇遇だな、俺も似たようなこと思つてた」

「とにかくだ！」

瞬は無理矢理さえぎるよつて、大声をあげる。

「さいわい、ここは露天風呂タイプの温泉だ。だから、楽園への扉はひとつじゃない。分かるな？」

「ああ」

「つまりだ。方法はいくらでもある、といつてさ。やついうわけだ、これから作戦プランを考える。」

「どうでもいいが、作戦とプランって微妙に似てないか？」

神妙な顔で瞬が一人に手招きをする。話の内容が内容なだけに、大っぴらに言えないから一人は小声で話せる範囲で近づく。

「さて。何かないか。みんなの案を聞きたい。」

「そう言われてもすぐに出でこねーだろ」

「いや、一つ考えていたんだが」

明彦が挙手をする。

「俺の作戦としてはな。まず瞬があつちの正面から堂々と入る。すると当然、クラスの女子の意識はお前に集中する。その隙に俺と良がそこの仕切りから覗く、といつものだがどうだ?」

「おおっ、と良が声をつなげせる隣で瞬は不満そつに明彦を見つめる。

「ちよつと待て。なんでオレがそんな汚れ役をしなきゃならない?」

「汚れ役だなんてそんな。戦争映画のキャラで言つなら、家族のために必死で生き残るつと努力するが、最終的に敵に撃たれて未練たっぷりに死んでしまうような立ち位置だろ。それの何が不満なんだ?」

「不満タラタラなんだよ!」ていうか明彦の例え話が妙に具体的すぎるで、すげくいやなんだけど

話の流れとして、明彦の提案が却下される。が、そのすぐ後、良が静かに手を挙げる。

「このまま奇策を考えても時間が過ぎるだけだ。ここはオーソドックスに外から覗こいつ。この仕切りから覗いた所でバレない方がおかしい。」

「なるほど、一里あるな」

「いや、普通だろ」

基本的な方針としては決まった。一人は暖かな湯船から立ち上がり、風呂場をあとにしようとした矢先、

「待て」

途端に良が呼び止める。

「おそらく、女子もその展開を予想しているかもしない。慎重に行かないでどうする?」

「つと。確かに」

「安全確保のために、瞬はその仕切りから顔を出してニヤニヤしてくれ。それで瞬が女子を攪乱をせている隙にわれたちは裏からその様を眺めて……」

「て、待てやつ!」

瞬は裏から逃げようとした良の肩を勢いよくつかまる。

「よく聞いたらさつきとそんなに変わらん立ち位置をオレに任せないか?」

「そんなにじゃない。全然、だ」

「ぶつ殺してえ・・・」

「そうよ。遠慮なくぶつ殺しちゃなさいよ

「言わぬくてもやつてや・・・」

・・・・・・・

瞬は硬直した。自分に殺意を促した相手が全く不明確だったことに気がついた。当然、対象である良が言つはずがなく、明彦のいる方向とは違う場所からの声だった。それに気付いたらしく、二人も

呑気な笑顔が崩れていく。

「・・・なあ。今のつてさ」

「ああ。やつぱりそう思うか？」

いサレサ そハなまかがた

「よし、じゃあ、『世』の『で』声のした方を見よう。それでは、

明彦の提案に一人がうなづく。どう考へてもいやな予感しかしない。しかし、それでも三人はやるしかなかつた。

三人は一斉に仕切りに目を向けていた。そして、徐々に視線を上げていく。目に入ったのは、

「くたばれ！」

異様に泡のたつた洗面器の湯水を放つた愛子の修羅の形相だった。湯気だつているなぞの水が三人の見開いた目に直撃する。

「こ、この！眼球の奥まで刺されたみたいな感覚は！まさか！」

仕切りの上から悶える三人を覗き込んでいる愛子はピースサインを向けて一言言い放つ。

「正義は勝つ」

「あつちい」

沖縄なんて年中暑いか暖かい場所にずっと無縁だったから、サウナに入るなんて生まれて初めてだ。感想はというと、以上の通り。ひねりのない感想で申し訳ない・・・

強いて表現するならそうだな、ふたを閉められて蒸しられている中華料理の気分だ。きっと肉まんもマーぼーも、こんな気分を幾度となく味わってきたのだろうか・・・なんてかわいそうな中華料理たち、お前たちの痛みを今俺は一身に受けているんだ。なにも悲しくない、俺ももうすぐ・・・

「・・・何考えてんだか」

完全に暑さにやられてるらしい。自分が何を考えているのかあまりよく分からない。なんなんだよ、中華料理の気持ちって。悪いかよ、上手い感想が言えなくて。でも、コレは黙つて座つてるだけでも結構なにかの鍛錬になつてしまふから案外キツい。ましてや初サウナ。暑い以外の感想をコメントするのが酷な話だつて。

「そもそも、サウナに入つた男の話を好き好んで見るやつなんているのか？この調子じゃダラダラとこの一話が終わっちゃうぞ。それも基本的に全部一人言とモノローグ。どんだけやる気がないのか、この作品の作者は。」

おつと、これ以上の愚痴は危険だ。口を閉じることにしよう。さて、側に架かっている小さな時計に目を向ける。時間を計算してみ

ると、

「あつ」

もうこんな時間か。気がついたら、規定の10分を楽勝で超えている。今の時点すでに頭はそんなに働いていないのに、これ以上いれば死んでしまう。残念ながらワンマンショーは終了のようだ。俺は熱せられたテーブルから立ち上がる。

ガチャつ

「ん？」

ドアに身体を向けた時だつた。6、7人ほどの大柄の男が所狭しとサウナに侵入する。口には出来ないが、どうにも柄がよくなさそうに映つてしまい、とても声をかけることを拒んでしまう。俺は邪魔にならないよう、身体を低くさせながら扉に向かつ。

「おひ、兄ちゃん」
あん

一際大柄な男が声を揚げる。あんちゃん？誰のことだ？？辺りを見てみると、その呼び名がしつくり来るような男はどこにもない。

「おいおい、お前以外にいないだろ？？て、兄ちゃん。」

「は、はあ？？すいません」

「グハハハハ。気にすんなつて。まあこいつち座れよ」

・・・俺だつた。

男は隣の空いたスペースをダンダンと叩いて示す。外見と合つてなんと豪快な性格か。とはいっても、俺も命が惜しい。

「いや、すみません。せつかくですけど俺」「連れないと言つなんよ。座れつて…」

「しかしですね…」

・・・・・気のせいか、後ろから妙に敵意のこもつた視線を感じる。いや、多分それ以上のドス黒い・・・いや、気のせんだらう。どうにしても、俺は座らないといけないらしい。まあ、小話するくらいいのものだひつ、こうこう人ならそんなに気負つ心配はなさそうだ。

「・・まあ少しくらいでしたら」

「おお、すまねえな！」

隣に腰をかけるなり背中を平手を打たれる。はつきり言つて、ほんの一瞬、暑さでショート寸前の脳内では、この男は確実に俺の右拳でぶん殴られていた。が、ニカツと気持ちよく笑うものだから、うつかり許してしまつた。とりあえずブレークは踏めたから良しつしよう。

「それでもサウナなんて俺、初めて入りましたよ

「おいマジかよ！ガキだな」

「いえそうじやなくてですね、俺沖縄から修学旅行で來たので。」

「ほおーう、じゃまだ学生なんか」

「はい」

「そーか。感想はどうだ？」

「・・・心が洗われますね」

ぶつちやけ、ときどきの感想を口にしただけで心は真逆にヒートしてゐる一方だ。

ちなみに、頭が結構ボーッとしてきてゐる。

「粋だな兄ちゃんは。中々氣に入つたぜ！将来ウチの組に入らな
いか？」

「・・・は？」

今自分が何を言われたのか理解できなかつた。ぶら下げていた顔
を上げておっさんの顔を見ようとした時だつた。

（龍の・・・・・刺青・・・・・？）

気持ち分の程度に両肩に乗つかるタオルの下から、荒々しい龍の
絵がポロリしていた。なんとなく、血の氣が引いていくのが実感し
た。

「じめつー オヤジにさけた口聞いて・・・
「落ち着けよ。ガキ相手にキレてんじやねーよ」

今のはほぼ確信した。間違いない。

どうやら、ましても任侠な人々に遭遇してしまつたようだ。

いや、ちょっと待て。一回落ち着いてくれ。
なんで俺はいつもその筋の人たちと絡むんだ！？今んとこ（作中
で）一年に一回関わってるぞ・・何、神は言つてゐのか、ここで死
ぬ定めだ、て。

「？ どうした兄ちゃん？」

「・・・いえ別に。ちょっとのぼせただけですから」

「情けねーなおい。まだ三分そこらだろ？」

そつか、俺はもう十五分が経とつとしてるのか。すげつ・・・

「兄ちゃん？ なんで笑つてんだ」

「いえ、そんな大したことじやないんですけど、一応僕が先に入つ
ていたので三分よりは割と後ですよ？」

「てめーっ、おやじになんて口聞いてんだゴラフアーー！」

え、今の沸点だったのか！？ 今の言い方ははまづかったのか？

「おいおい待てよ。兄ちゃんは本当のこと言つてゐるんだから気に
すんなよ。で、兄ちゃんはどれくらひここにいるんだ？」

おお、おっさんイケメンすぎるーーのタイミングでそれを聞くな
んてじんだけ仏様なんだよ。ここは正直に言つて逃げるしかない。
俺は一回笑つて言った。

「・・・ゴジふんです」

土壇場で声がかすれ、『じゅう』とこう単語だ出せなかつた。表情こそ変えなかつたけど、内心では泣き叫んでいた。

「そーか五分か。じゃあもひつと話しみじみ

「おっさん、俺死んじゃうんですけどーこんがり肉にならつてー上手に焼けちゃうつてー！」

「そう言えれば兄ちゃん、沖縄から来たとか言つてたね、ビーフ？」

「……………帰りたいですね」

「ガツハハハハ！ホームシックって訳か」

違う、そのままの意味なんだ。おっさんはもうイケメンを返上してくれ。というかもう頼むから帰つてくれ。マジで帰つてください。なんですよ

「すいません。人待たせてますんで、俺先に上がりますね」
「おいおい連れねえな。もちつと話しうござ」
「いえいえ、口うるさいやつだから後でいろいろ言われるのが嫌なんですよ」

とにかく、なんでもいいからここから出たかった。思いついた限りのできとつな単語を連発して、逃げの口実を作つてみる。

「へえ、それって彼女なのか？」
「はい」

「……………んん！？」
「……………んん！？」

「いつちょ前に女なんか作りやがつてよー」のヤロー。」

「え、いや、そんなことは」

「よし、余わせん」

……………んんん…? ちよつ、おつさと、マジで今なと…? ていうか返事聞いて。

「えとすこませんが、もう一回書かせらえますか?」

「だからよ、兄ちゃんの女余わせてくれつて。な?」

いや、「な」って言われても困るんですけど…彼女なんていいから、バレたら俺死ぬぞ

「いや、やうは言われても」

「つしゃ、そつそく見に行へとすつか。おいてメーひ」

完全に無視されてる。

おつそんま重い腰を上げて、部下を引き連れてサウナを出でこぐ。

「……………まあこ」

まさかとは思つが、俺はほり死ぬのか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3953a/>

北斗による協奏曲

2011年10月3日04時29分発行